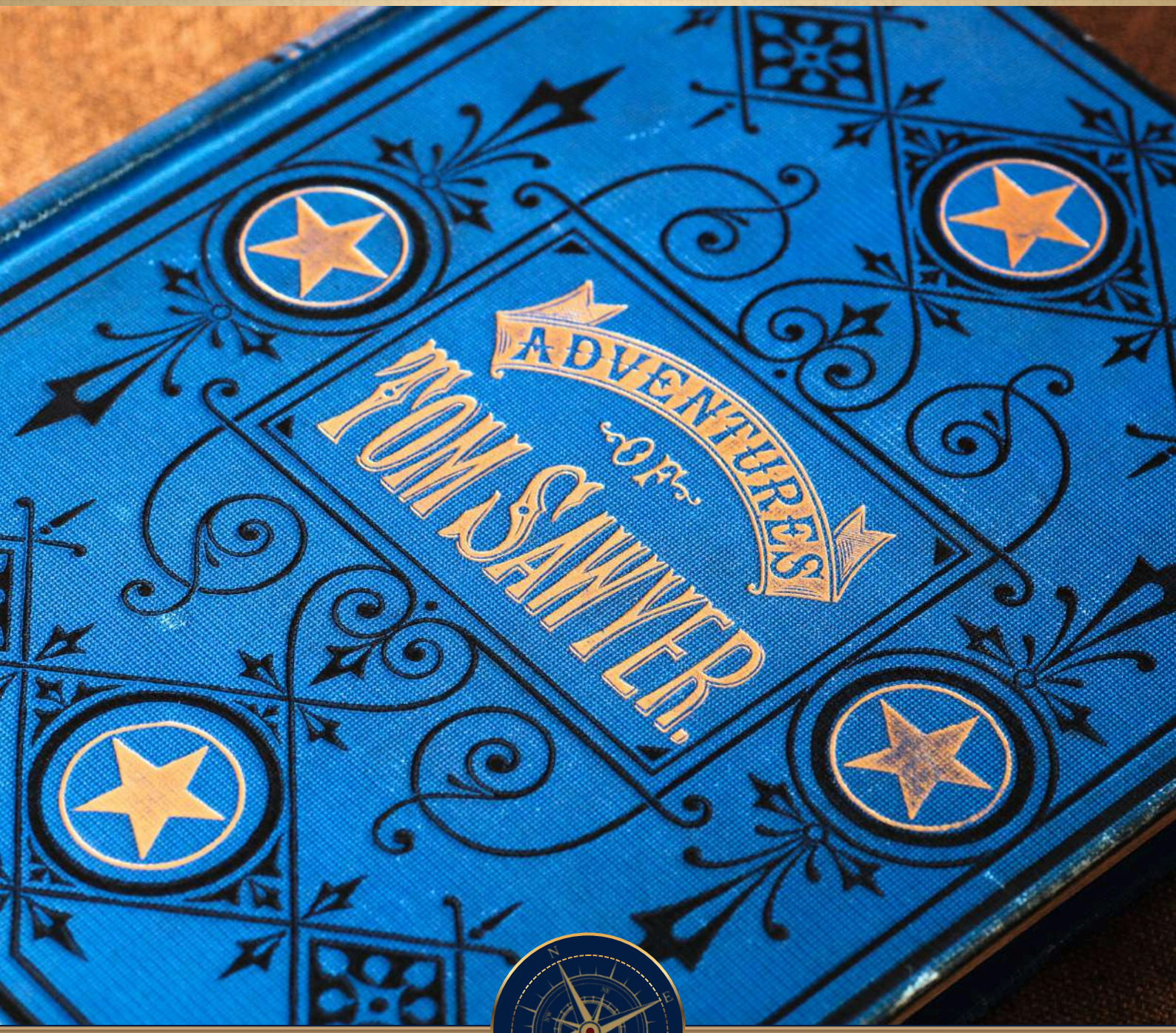
京都府立図書館・京都外国語大学付属図書館
共催 稀覯書展示会



自由への羅針盤

―アメリカ250年を刻む書物たち

CHRONICLES OF LIBERTY

京都府立図書館・京都外国語大学付属図書館共催稀覯書展示会

自由への羅針盤

―アメリカ250年を刻む書物たち

CHRONICLES OF LIBERTY

京 都 府 立 図 書 館
京都外国語大学付属図書館
2026

ごあいさつ

陽春の季節、6 回目の京都外国語大学付属図書館・京都外国語短期大学と京都府立図書館の共催展示会を行う運びとなりました。

今回の展示会は、「自由への羅針盤－アメリカ 250 年を刻む書物たち：CHRONICLES OF LIBERTY」をテーマとし、京都外国語大学付属図書館からは、所蔵する稀覯本の数々が披露されます。

当館からは 100 年以上前から使われてきた洋書と和書の展示、および書籍以外のものを出品します。明治期の当館貴賓室で用いられたアメリカ製の典雅な模様を施したドア飾りと、アメリカと深い関わりのある石版画です。アメリカの文化、ひいてはその大きな影響を受けてきた日本の文化を、広い射程でご覧いただく契機にしていただければと思います。

図書館には、収集した資史料を保存するだけでなく、それらの魅力を前景化した展示会や関連する講演会など、文化を創出する機会を積極的につくることが求められています。

今回も双方の図書館で、多くの皆様にこころ豊かなひとときをお過ごしいただければこの上ないよろこびです。

2026 年 4 月

京都府立図書館

館長　川口　浩文



ごあいさつ

６回目となる京都府立図書館との共催展示会「自由への羅針盤－アメリカ 250 年を刻む書物たち：CHRONICLES OF LIBERTY」を開催できますことを、京都外国語大学図書館を代表しまして心より嬉しく思います。

本展は、アメリカ合衆国建国 250 年という節目を見据え、自由・冒険・対話というテーマを軸に、文学作品から歴史史料まで幅広い資料を通して、アメリカという国の精神の軌跡をたどる試みです。

展示には、マーク・トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』やヘミングウェイ『老人と海』といった、アメリカ文学を象徴する作品が並びます。少年の好奇心と自由への憧れ、老漁師の孤独な闘いと誇り――これらの物語は、時代を超えて読者に「生きるとは何か」を問いかけ続けています。文学は国家の歴史を直接語るものではありませんが、その精神の深層を映し出す鏡として、アメリカの多様な価値観を理解する手がかりを与えてくれます。

また、『日本遠征記』など、両国の接点を記録した一次資料も本展の重要な柱です。黒船来航から始まる日米関係の歩みは、相互理解の難しさと可能性を示す貴重な歴史の証言です。これらの史料を読み解くことは、国際社会に生きる私たちにとって、過去を学び未来を考えるための羅針盤となるでしょう。

本展が、来館者の皆さまにとって、アメリカという国の多層的な姿を再発見し、また日米の歴史的つながりを新たな視点から見つめ直す機会となれば幸いです。

京都府立図書館との継続的な協働に深く感謝申し上げるとともに、今後も知の交流を広げる取り組みを進めてまいる所存です。

2026 年 4 月

京都外国語大学付属図書館
京都外国語短期大学付属図書館

館長　舟杉　真一

― 展 示 目 録 ―

京都外国語大学付属図書館蔵

IRVING, Washington　*The legend of Sleepy Hollow.* -- Philadelphia, 1928.

アービング『スリーピー・ホロウの伝説』 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p. 1

EMERSON, Ralph Waldo　*Letters and social aims.* -- London, 1876.

エマソン『文学と社会的目的』 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 2

HAWTHORNE, Nathaniel　*The scarlet letter.* -- Boston, 1850.

ホーソン『緋文字』 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 3

LONGFELLOW, Henry Wadsworth　*Evangeline.* -- Boston, 1868.

ロングフェロー『エヴァンジェリン』 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 4

POE, Edgar Allan　*The murders in the Rue Morgue : facsimile of the MS in the Drexel institute.* -- Philadelphia, 1895.

ポー『モルグ街の殺人』原稿写し・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 5

POE, Edgar Allan　*The bells and other poems.* -- London, 1912.

ポー『鐘ほか詩集』 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 6

THOREAU, Henry David　*Walden : or, life in the woods.* -- Boston, 1854.

ソロー『ウォールデン：森の生活』 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 7

STOWE, Harriet Elizabeth Beecher　*Uncle Tom's cabin : or life among the lowly.* -- Cleveland, 1852.

ストウ『アンクル・トムの小屋』 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 8

MELVILLE, Herman　*Moby-Dick, or the whale.* -- New York, 1851.

メルヴィル『白鯨』 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 9

WHITMAN, Walt　*Leaves of grass.* -- Brooklyn, 1855.

ホイットマン『草の葉』 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 10

ALCOTT, Louisa May　*Little women and Little women married.* -- London, [1889?].

オルコット『若草物語 第１部・第２部』 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 11

BIERCE, Ambrose　*The cynic's word book.* -- New York, 1906.

ビアス『冷笑派用語集』 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 12

TWAIN, Mark　*The adventures of Tom Sawyer.* -- Hartford, 1876.

トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 13

TWAIN, Mark　*A tramp abroad.* -- Hartford, 1880.

トウェイン『ヨーロッパ放浪記』 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 14

JAMES, Henry　*The wings of the dove.* -- Westminster, 1902.

ジェイムズ『鳩の翼』 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 15

CRANE, Stephen　*The red badge of courage.* -- Shelton, [19--].

クレイン『赤い武勲章』 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 16

CATHER, Willa Sibert *Death comes for the Archbishop.* -- New York, 1927.

キャザー『大司教に死は来たる』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 17

LONDON, Jack *Smoke Bellew.* -- New York, 1912.

ロンドン『スモーク・ベルー』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 18

LEWIS, Harry Sinclair *Elmer Gantry.* -- New York, 1927.

ルイス『エルマー・ガントリー』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 19

O'NEILL, Eugene Gladstone *Desire under the elms.* -- New York, 1925.

オニール『楡の木陰の欲望』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 20

CHANDLER, Raymond Thornton *Farewell, my lovely.* -- Shelton, 1967.

チャンドラー『さらば愛しき女よ』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 21

ELIOT, Thomas Stearns *Old Possum's book of practical cats.* -- New York, 1939.

エリオット『ポッサムおじさんの実用猫百科』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 22

FITZGERALD, Francis Scott Key *The great Gatsby.* -- New York, 1953.

フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 23

HEMINGWAY, Ernest Miller *A farewell to arms.* -- New York, 1929.

ヘミングウェイ『武器よさらば』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 24

HEMINGWAY, Ernest Miller *For whom the bell tolls.* -- New York, 1940.

ヘミングウェイ『誰がために鐘は鳴る』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 25

HEMINGWAY, Ernest Miller *The old man and the sea.* -- London, 1952.

ヘミングウェイ『老人と海』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 26

FAULKNER, William Cuthbert *Absalom, Absalom!* -- New York, 1936.

フォークナー『アブサロム、アブサロム！』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 27

MITCHELL, Margaret *Gone with the wind.* -- New York, 1936.

ミッチェル『風と共に去りぬ』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 28

STEINBECK, John Ernst *East of Eden.* -- New York, 1952.

スタインベック『エデンの東』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 29

WILLIAMS, Tennessee *A streetcar named Desire.* -- New York, 1947.

ウィリアムズ『欲望という名の電車』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 30

SALINGER, Jerome David *The catcher in the rye.* -- Boston, 1951.

サリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 31

BRADBURY, Ray *Fahrenheit 451.* -- New York, 1953.

ブラッドベリ『華氏 451 度』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 32

ELIOT, John (ed.) *The Holy Bible : containing the Old Testament and the New.* -- Cambridge, 1663.

エリオット『聖書』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 33

SMITH, John *The generall historie of Virginia, New=England, and the Summer Isles.* -- London, 1632.
スミス『ヴァージニア史』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 34
LEWIS, Meriwether / CLARK, William *Travels to the source of the Missouri River and across the American Continent to the Pacific Ocean.* -- London, 1814.
ルイス、クラーク『探検記』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 35
HAMILTON, Alexander [and others] *The federalist, on the new Constitution.* -- Philadelphia, 1818.
ハミルトンほか『ザ・フェデラリスト』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 36
SPARKS, Jared *The writings of George Washington.* -- Boston, 1834.
スパークス『ジョージ・ワシントン著作集』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 37
HAWKS, Francis Lister *Narrative of the expedition of an American squadron to the China Seas and Japan.* -- Washington, 1856.
ホークス『日本遠征記』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 38
HEINE, Wilhelm *Reise um die Erde nach Japan an Bord der Expeditions-Escadre unter Commodore Matthew Calbraith Perry in den Jahren 1853, 1854, 1855.* -- Leipzig, 1856.
ハイネ『世界周航 日本への旅：ペリー提督の遠征艦隊に搭乗して』・・・・・・・・・・・・・・・・p. 39
GRIFFIS, William Elliot *Matthew Calbraith Perry.* -- Boston, 1887.
グリフィス『マシュー・カルブレイス・ペリー』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 40
Japan expedition press : U. S. steam-frigate "Powhatan". -- Shimoda, 1854.
「ジャパン・エクスペディション・プレス」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 41
『亜国渡来一件記』-- [18---].・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 42
カラーメル原撰 、小関高彦訳『新譯合衆國小誌』 -- 東京, 1855.・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 43
「大日本へ献上貢物品々」墨摺版画 -- [1854].・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 44
一惠斎芳幾「亜米利加国大船之図 其余五箇国大船之写生遠景」 -- 東京, 1861. ・・・・・・・・・・・p. 45
AUDUBON, John James *The birds of America.* -- Leipzig, 1972.
オーデュボン『アメリカの鳥類』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 46

◊自筆書簡

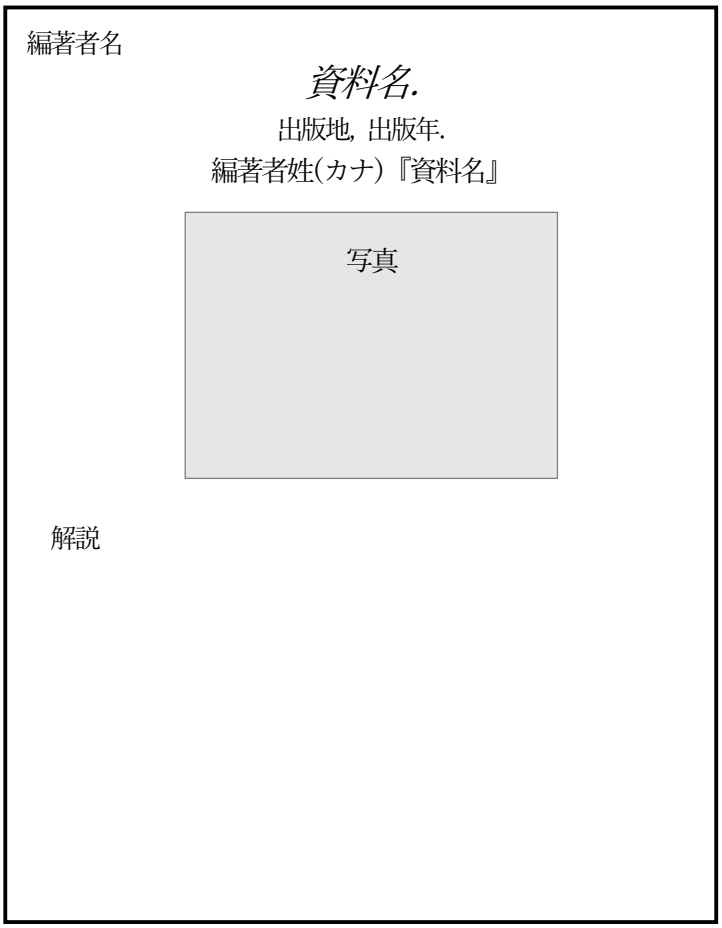
WASHINGTON, George
　ワシントン　盟友・キャリントンへ宛てた人事の書簡 -- 1798.・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 47
PERRY, Matthew Calbraith
　ペリー　協力者・レッドフィールドの子息へ宛てた書簡 -- 1857.・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 48
HAWTHORNE, Nathaniel
　ホーソン　アメリカ領事在任中の公的書簡 -- 1857.・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 49
LONGFELLOW, Wadsworth
　ロングフェロー　出版社へ宛てた謝絶の書簡 -- 1864.・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 50
WHITMAN, Walt
　ホイットマン　晩年の詩「夕食と歓談の後」原稿 -- [1887?].・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 51
TWAIN, Mark
　トウェイン　友人・ダンカンに宛てた礼状 -- 1906.・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 52
JAMES, Henry
　ジェイムズ　知人・ゴードンに宛てた晩年の書簡 -- 1910-1911.・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 53

京都府立図書館蔵

GALT, Alexander S. (ed.)　*Cassell's popular science.* --London, 1903.・・・・・・・・・・・・・p. 54-55
Y&T 社製 ドアノブ ・・・p. 54-55
TWAIN, Mark　*The adventures of Huckleberry Finn.* -- Edinburgh, [ca. 1900].・・・・・・・・・p. 55-56
柾不二夫**『英語英文学講座』9 巻** --英語英文学刊行会, 1934.・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 55-56
Portraits and biographical sketches of twenty American authors. --Boston, c1887.・・・・・・・p. 55-56
『現代アメリカ小説全集』第 1 巻 -- 三笠書房, 1940.・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 56-57
パアル・バック著、新居格訳**『大地 第 1 部』** -- 第一書房, 1938.・・・・・・・・・・・・・・・・p. 56-57
パアル・バック著、村岡花子訳**『母の生活』** -- 第一書房, 1941.・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 56-57
京都府中央図書館編**『京都府中央図書館報 』58 号** -- 京都府中央図書館, 1940.・・・・・・・・・p. 56-57
国際情報社**『映画情報』17-18 巻** -- 国際情報社, 1952.・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 56-57
毎日新聞社編**『毎日グラフ』** -- 毎日新聞社, 1952.・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 56-57
HEINE, Wilhelm　Passing the Rubicon　-- 1855.
　ハイネ**《ルビコン川を渡る》**石版画 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p. 58

凡例

○本目録は、京都府立図書館と京都外国語大学付属図書館が共催する「自由への羅針盤－アメリカ250年を刻む書物たち：CHRONICLES OF LIBERTY」の展示目録である。
○本目録に掲載した資料は下記のように配列した。
　―編著者：「姓, 名」の順で記載した。
　―出版年：当館所蔵資料の出版年を記載した。
○年代表示は西暦を用いた。
○解説文中の出版年は初版の発行年を記載した。

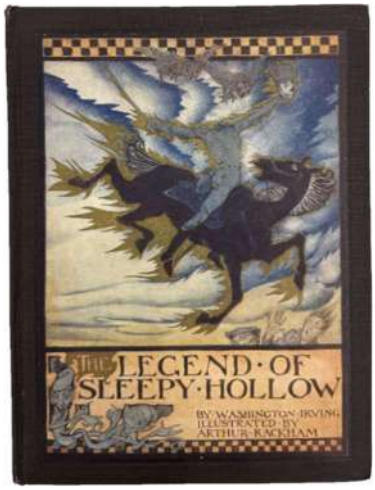


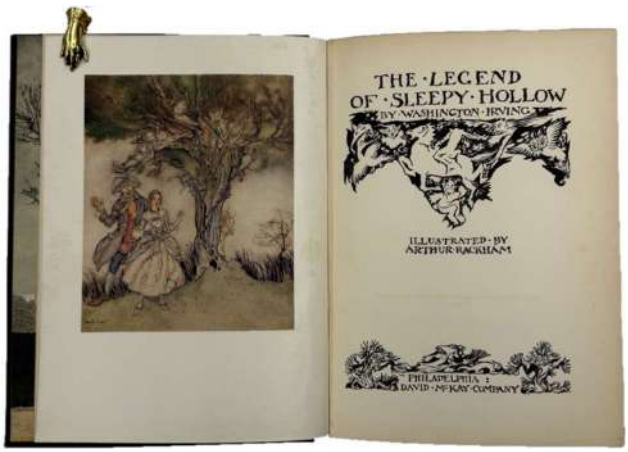
IRVING, Washington
RACKHAM, Arthur (illus.)

The legend of Sleepy Hollow.

Philadelphia, 1928.

アービング『スリーピー・ホロウの伝説』





アービング(1783-1859)は、ニューヨーク生まれの小説家です。若くからヨーロッパ文化に親しみ、アメリカ文学に洗練された文体とユーモアを持ち込みました。

『スリーピー・ホロウの伝説』は、代表作『スケッチ・ブック』(1819-1820)に収録された、人里離れた静かな村が舞台の短編小説です。主人公のイカボッド・クレーンは村に移り住んできた迷信深い教師。地元の裕福な農家の娘カトリーナに惹かれますが、村一番の屈強な青年ブロム・ボーンズが手強い恋敵として立ちはだかります。さらにイカボッドを恐れさせるのが、独立戦争で首を失った騎士の亡霊が夜な夜な馬に乗って彷徨(さまよ)うという「首無し騎士」の伝承。ある真夜中、愛馬で帰宅中のイカボッドは暗い森の中で首のない騎士に遭遇し、恐怖の逃走劇が始まります。

本作でアービングは、ドイツ由来の伝承をアメリカの風土に移し替え、迷信と理性、恐怖と滑稽さを描きました。怪奇物語として知られる一方、当時のアメリカの閉鎖的な田園社会や人間心理を軽妙に風刺した作品としても評価されています。ラッカムによる細かい線描とくすんだ色彩の挿絵は、物語の怪奇性と不穏な詩情を深めています。

アービングは短編小説の創始者ともいわれ、人間の暗い側面の優れた描写はE・A・ポーやN・ホーソン、H・ジェイムズにも影響を与えました。

※アーサー・ラッカム(1867-1939):20世紀初頭の挿絵黄金時代を代表する、イギリスの挿絵画家。『ピーター・パン』(1906)、『不思議の国のアリス』(1907)、『ニーベルングの指環』(1911)など、多くの挿絵を手がけた。

Washington Irving (1783-1859) was a novelist born in New York. Deeply attuned from youth to European culture, he introduced into American literature a prose style distinguished by elegance, irony, and urbane humor.

The Legend of Sleepy Hollow, included in *The Sketch Book of Geoffrey Crayon, Gent* (1819-1820), is a short story set in a secluded village. Its protagonist, Ichabod Crane, is a superstitious schoolteacher who has recently settled there. He becomes enamored of Katrina, the daughter of a prosperous farmer, but faces a formidable rival in Brom Bones, a burly and boisterous young man, while the local legend of the Headless Horseman further unsettles him. The Horseman is said to be the ghost of a soldier who lost his head during the American Revolutionary War and who rides through the night in search of it. One night, Ichabod encounters the Headless Horseman in the dark forest, and a frantic chase ensues.

Adapting a German legend to an American setting, Irving explores superstition and reason, terror and comedy. The tale is celebrated as a classic American ghost story and a light yet incisive satire of rural society and human psychology. Arthur Rackham's finely detailed line work and muted colors heighten the work's uncanny, poetic atmosphere.

Irving is often described as a founder of the American short story, and his penetrating depiction of the darker aspects of human nature exerted influence upon Edgar Allan Poe, Nathaniel Hawthorne, and Henry James.

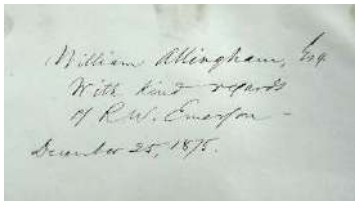
*Arthur Rackham (1867-1939): A leading British illustrator of the Golden Age of Illustration, known for *Peter Pan in Kensington Gardens* (1906), *Alice's Adventures in Wonderland* (1907), and *Der Ring des Nibelungen* (1911).

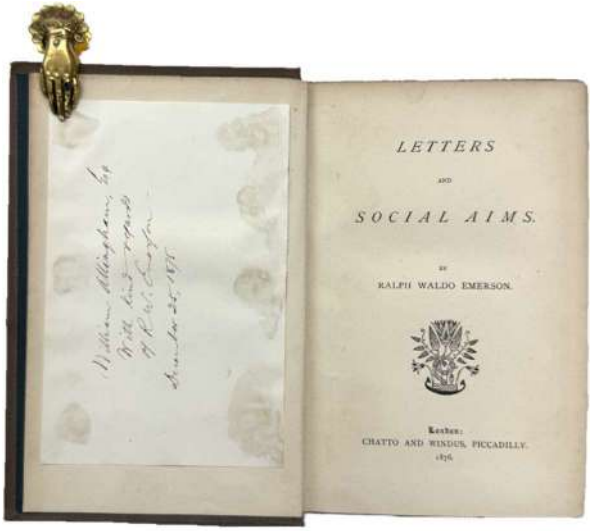
EMERSON, Ralph Waldo

Letters and social aims.

London, 1876.

エマソン『文学と社会的目的』





エマソン(1803-1882)は、ボストン生まれの思想家・詩人で、アメリカ・ルネサンス文学を支えた人物です。大学卒業後は牧師となるも、教義に疑問を抱き辞職。ヨーロッパで思想を深め、帰国後は思想家として活動します。1836 年に『自然論』を発表し、超絶主義を展開しました。

『文学と社会的目的』(1876)は、晩年の随筆集です。原題の「Letters」は、単なる書簡ではなく「学問」や「教養ある精神活動」を指し、人間の内面的な知の探求を象徴。一方で「Social Aims」は、礼儀や雄弁、他者への影響力といった外面的な社会生活における実践に焦点を当てています。若き日のエマソンは「自己信頼」を旗印に掲げ、『エッセー第一集』(1847)などで強い理想主義を説きました。対して本書では、円熟した思索のもと、鍛え上げられた知性がいかに現実社会と調和し、品位ある文化を形成し得るかを問い直しています。アメリカ文壇の精神的支柱として多くの知性を導いた思想家が思索の果てに辿り着いた、個の精神の自立と社会的責任との調和を説く、後進への指標を示した作品ともいえます。

本書にはエマソンと親交のあった詩人、ウィリアム・アリンガム(1824-1889)に宛てて「With kind regards」と添えたエマソン直筆の献辞が貼付されています。

Ralph Waldo Emerson (1803-1882) was a thinker and poet born in Boston and a central figure of the American Renaissance. After graduating from university, he entered the ministry, only to resign soon afterward, troubled by doctrinal doubts. He then traveled to Europe, where he deepened his intellectual horizons, and upon returning to the United States devoted himself to a life of lecturing and writing. In *Nature* (1836), he articulated the principles of Transcendentalism.

Letters and Social Aims (1876) is a collection of essays from his later years. The term “Letters” in the title refers to learning and cultivated intellectual activity and suggests the inward pursuit of knowledge, while “Social Aims” points to the outward practices of social life, such as courtesy, eloquence, and influence upon others. In his youth, Emerson championed “self-reliance” and advanced a vigorous idealism in works such as *Essays: First Series* (1847). In contrast, this later volume, grounded in mature reflection, considers how a disciplined intellect may harmonize with society and contribute to the formation of a refined culture. As a guiding presence in American letters, Emerson here presents a vision of balance between individual independence and social responsibility, offering a lasting model for future generations.

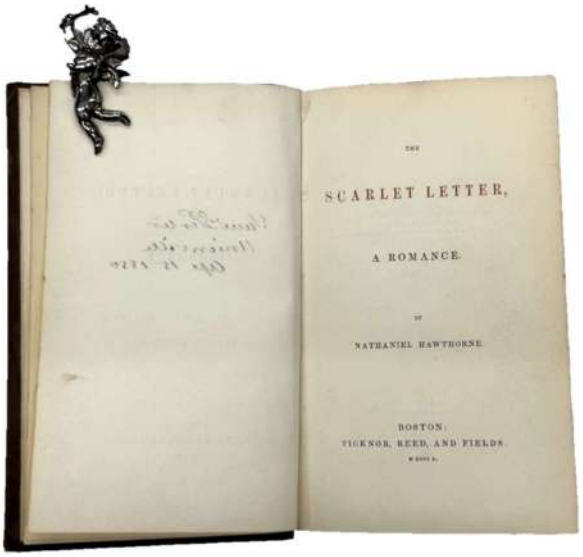
This copy bears an autograph presentation inscription by Ralph Waldo Emerson to his friend, the poet William Allingham (1824-1889), with the words “With kind regards,” affixed on a separate slip of paper.

HAWTHORNE, Nathaniel

The scarlet letter.

Boston, 1850.

ホーソン『緋文字』



ホーソン(1804-1864)は、マサチューセッツ州出身の小説家です。ピューリタンの名門家系に生まれ、大学卒業後は故郷で読書や執筆活動に専念。試行錯誤の末『トワイス・トールド・テイルズ』(1837)を出版し、作家としての第一歩を踏み出しました。

『緋文字』(1850)は、17 世紀のピューリタン社会を舞台にした最初の長編小説です。主人公は、夫の不在中に妊娠・出産をした女性ヘスター。罰として胸に赤い「A」の文字(「Adultery＝姦通」の頭文字)を付けることを強いられて生きています。ヘスターとその子どもが差別に耐え、誠実に生きることで次第に尊敬を得ていく一方、子の父親である牧師は自身の罪を隠したまま苦悩し、復讐に燃えるヘスターの夫により精神を蝕まれていきます。ホーソンは象徴的な表現を通して、人間が清廉潔白であることの難しさや、厳しい道徳がもたらす影の部分を描きました。善と悪、社会と個人の間で揺れる人間を描いた、アメリカ文学を代表する作品です。

なお、ホーソンは『ヤング・グッドマン・ブラウン』(1846)、『七破風の屋敷』(1851)、『大理石の牧神像』(1860)などでも人間の心の闇を追求。一貫して「罪」や「良心」を描きだし、H・ジェイムズらに大きな影響を与えました。

Nathaniel Hawthorne (1804-1864) was a novelist from Massachusetts. Born into a prominent Puritan family, he devoted himself to reading and writing in his hometown following his graduation from college. After years of experimentation, he published *Twice-Told Tales* (1837), marking his emergence as a writer.

The Scarlet Letter (1850), his first full-length novel, is set in seventeenth-century Puritan society. The heroine, Hester Prynne, becomes pregnant and gives birth despite her husband's absence. As punishment, she is forced to wear upon her chest a scarlet letter "A," signifying adultery. While Hester and her child endure discrimination and gradually gain respect through their sincerity and strength, the minister who is the child's father conceals his sin and suffers inward torment. Furthermore, Hester's husband, consumed by revenge, slowly undermines the minister's mind. Through rich symbolism, Hawthorne portrays the difficulty of moral purity and the darker consequences of rigid moral codes. The novel remains one of the defining works of American literature, portraying individuals torn between good and evil, society and the self.

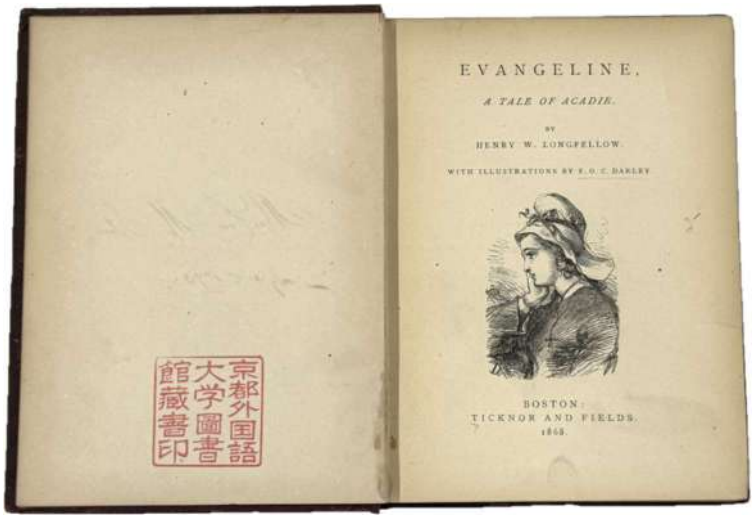
In works such as *Young Goodman Brown* (1846), *The House of the Seven Gables* (1851), and *The Marble Faun* (1860), Hawthorne continued to explore the darkness of the human heart, consistently examining themes of sin and conscience. His writings exerted a profound influence on later authors, including Henry James.

LONGFELLOW, Henry Wadsworth

Evangeline.

Boston, 1868.

ロングフェロー『エヴァンジェリン』



ロングフェロー(1807-1882)は、ポートランド生まれの詩人です。ハーバード大学教授としての経験や、長年のヨーロッパ留学で培った見識を背景に、アメリカ独自の叙事詩を確立しました。

代表作『エヴァンジェリン』(1847)は、18 世紀半ばの「アカディア人追放」という歴史的悲劇を背景に描かれた叙事詩です。主人公は、イギリス軍による強制移住政策によって恋人と引き裂かれた若い女性エヴァンジェリン。恋人を探し求めて北米各地を彷徨(さまよ)い、長い旅の果てに修道女となったエヴァンジェリンは、やがて恋人と予期せぬ再会を遂げます。本作では、分離と放浪という過酷な運命の中でも、希望と信仰、忍耐を失わない女性の姿が描かれました。また、ゲーテの『ヘルマンとドロテーア』(1797)に倣った古典的韻律や、人々の悲劇を民族の歴史として語り上げる手法を用いている一方、広大な自然描写と個人の内面に寄り添う叙情性は、アメリカ文学ならではの独自の広がりを備えています。

さらにロングフェローは、イタリアの文学的至宝といわれる、ダンテ『神曲』の英訳を成し遂げた功績でも知られます。ヨーロッパ古典を継承しつつ、アメリカ文学を築いた詩人といえます。

Henry Wadsworth Longfellow (1807-1882) was a poet born in Portland. Drawing upon his experience as a professor at Harvard University and the insight he gained through many years of study in Europe, he established a distinctly American epic tradition.

His representative work *Evangeline* (1847) is an epic poem based on the historical tragedy known as the Expulsion of the Acadians in the mid-eighteenth century. The heroine, Evangeline, is separated from her beloved as a result of the British policy of forced relocation. She wanders across North America in search of him, and after a long journey becomes a nun. At last, she is reunited with her lover in an unexpected encounter. The poem portrays a woman who does not lose hope, faith, or patience even amid the harsh fate of separation and wandering. Modeled in part on the classical meter of *Hermann und Dorothea* (1797) by Johann Wolfgang von Goethe, the work reflects European influence in its elevated style and its treatment of personal tragedy as part of a people's history. At the same time, its sweeping depictions of the American landscape and its intimate lyricism give it a distinctive place in American literature.

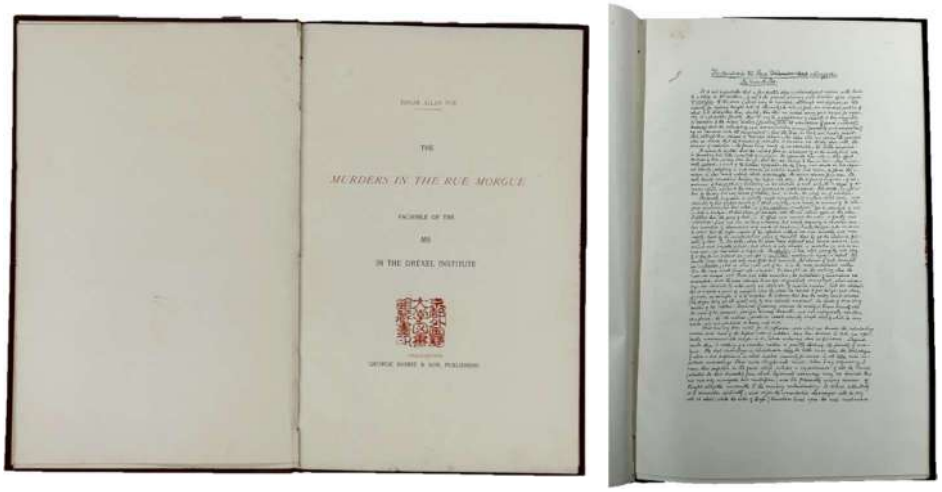
Longfellow is also known for completing an English translation of Dante Alighieri's *La Divina Commedia*, regarded as a masterpiece of Italian literature. He may thus be seen as a poet who inherited the European classical tradition while helping to build American literature.

POE, Edgar Allan

The murders in the Rue Morgue : facsimile of the MS in the Drexel institute.

Philadelphia, 1895.

ポー『モルグ街の殺人』原稿写し



ポー(1809-1849)は、ボストン生まれの作家・ジャーナリストです。幼くして両親を失い、養子として育てられたことによる不安定な家庭環境が、孤独や喪失を主題とした作風に影響を与えたといいます。

『モルグ街の殺人』(1841)は、世界初の本格的な推理小説。舞台はパリのモルグ街で、ある母娘が密室状態の部屋で惨殺される事件が発生します。目撃者たちは、犯人の「声」について、ある者はフランス語だと言い、別の者たちはそれぞれイタリア語、スペイン語、ロシア語、さらにはドイツ語だと証言。共通しているのは「外国人の声だった」という点だけでした。現場には凶器も侵入経路も見当たらず、警察の捜査は難航。そこで素人探偵デュパンが新聞記事と現場の状況を冷静に分析し、常識にとらわれない推理で事件の意外な真相に迫ります。本作は、観察と論理によって真実に迫る「探偵役」を初めて明確に描いた作品であり、のちのシャーロック・ホームズなど多くの探偵小説の原型となりました。

他にもポーは、暗号ミステリの源流的作品とみなされている『黄金虫』(1843)を発表した一方、『黒猫』(1843)や『アッシャー家の崩壊』(1839)などでは人間の狂気や死への恐怖を緻密な心理描写で描き、近代ホラー小説の完成度を高めました。

Edgar Allan Poe (1809-1849) was a writer and journalist born in Boston. Orphaned at a young age and raised in an unstable household, he is often said to have drawn upon these early hardships in shaping the recurring themes of loneliness and loss in his work.

The Murders in the Rue Morgue (1841) is widely regarded as the first modern detective story. Set in Paris on the Rue Morgue, it opens with the brutal murder of a mother and daughter in a locked room. Witnesses offer conflicting accounts of the voice they heard at the scene: one claims it was French, another Italian, Spanish, Russian, or even German. The only point of agreement was that “it sounded like the voice of a foreigner.” With no apparent weapon and no visible means of entry, the police investigation comes to a standstill. C. Auguste Dupin then analyzes newspaper reports and the details of the crime scene, employing unconventional reasoning to reach a startling conclusion. The story established the figure of the analytical detective who uncovers truth through observation and logic, and it became a model for later fictional detectives such as Sherlock Holmes.

Among Poe’s other works, *The Gold-Bug* (1843) is considered a foundational example of the cryptographic mystery. Meanwhile, *The Black Cat* (1843) and *The Fall of the House of Usher* (1839) explore madness and the fear of death through meticulous psychological depiction, helping to refine and elevate the modern tale of horror.

POE, Edgar Allan
Edmund Dulac (illus.)

The bells and other poems.

London, 1912.

ポー『鐘ほか詩集』



ポーは、小説において論理と恐怖を描いた一方で、言葉の響きとリズムを極限まで追求した詩人でもありました。

『鐘』(1849)は、音そのものを言葉で表現した実験的な詩です。物語的な構成で語るというより、様々な鐘の音色の変化を通して、人生の段階と感情の移ろいを描きました。「bells, bells, bells」という反復や擬音語の多用によって、読者はまるで実際に鐘の音を聞いているかのような錯覚を得ます。感覚に直接訴えかけるこの詩は、ポーが掲げた「純粋詩」の理念をよく体現し、音楽的効果を極限まで高めた作品の一つです。同じく収録の『大鴉』(1845)は、音楽性と象徴性を極めたことで詩人としての名声を決定づけた代表作。最愛の女性を失い悲しみに暮れる男の前に鴉が現れ、彼が何を問いかけても鴉は「Nevermore」と繰り返し答えます。その単調な返答は次第に男の心を狂気へと追い詰め、失った愛は決して戻らないという絶望を突きつけます。本書には他にも『アナベル・リー』(1849)、『ウラューム』(1847)など多数の詩が収録され、挿絵を手がけたデュラックの抑制された色彩と繊細な陰影表現が、作品全体の神秘性と哀感をいっそう際立たせています。

ポーはその短い生涯ながら、恐怖や人間の内面心理の精緻な描写、詩的な美の追求を通してW・フォークナーやS・キングなど後世の作家たちに広範な影響を残しました。

※エドマンド・デュラック(1882-1953):フランス出身、イギリスの挿絵画家。装飾性の高い幻想的画風が特徴。『テンペスト』(1908)、『タングルウッド物語』(1918)、『エドマンド・デュラックの妖精の本』(1916)などを手掛けた。

Poe, who explored logic and terror in fiction, was also a poet pursuing the sound and rhythm of language to utmost limits.

The Bells (1849) is an experimental poem that seeks to render sound itself in words. Rather than presenting a conventional narrative, it evokes the stages of life and shifting emotions through the changing tones of different bells. Through the persistent repetition of "bells, bells, bells" and the rich use of onomatopoeia, the poem creates the illusion of audible ringing. Appealing directly to the senses, it exemplifies Poe's ideal of "pure poetry" and stands among his most striking achievements in musical effect. Also included is *The Raven* (1845), a representative work that secured his reputation as a poet through its extraordinary musicality and symbolism. A raven appears before a man grieving the loss of his beloved and repeats the word "Nevermore" in response to every question he asks. Its monotonous reply gradually drives him into madness, forcing him to confront the despairing truth that his beloved will never return. The volume further contains *Annabel Lee* (1849) and *Ulalume* (1847), and others. Illustrations by Edmund Dulac, with their restrained, jewel-like colors and subtle shading, enhance the work's dreamlike atmosphere of mystery and melancholy.

Despite his short life, Poe exerted a lasting influence on later literature through his exploration of horror, psychological depth, and poetic beauty, inspiring writers such as William Faulkner and Stephen King.

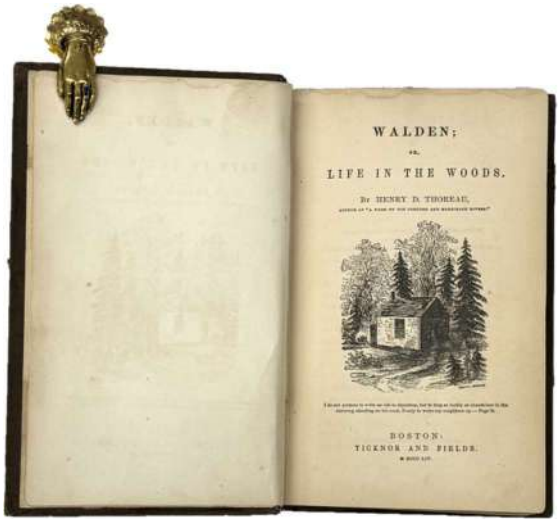
*Edmund Dulac (1882-1953): A French-born British illustrator known for his highly decorative and fantastical style, whose works include *The Tempest* (1908), *Tanglewood Tales* (1918), and *Edmund Dulac's Fairy Book* (1916).

THOREAU, Henry David

Walden : or, life in the woods.

Boston, 1854.

ソロー『ウォールデン：森の生活』



ソロー(1817-1862)は、マサチューセッツ出身の随筆家・詩人です。大学卒業後は家業のほか、教師、測量などに従事しました。エマソンの影響を強く受け、その超絶主義思想を実践するために 2 年以上にわたりウォールデン湖畔で自給自足の生活を送ることになります。

当時を記した『ウォールデン：森の生活』(1854)は、自然の観察を通して、労働・時間・所有・孤独という人間の普遍的なテーマを考察した思想的エッセーです。自然の中で最小限の労働と必要なものだけを求める生活を実践し、物質的な豊かさを追い求める近代社会を批判。そこでは自立・良心・時間の重要性が強調され、自然は単なる背景ではなく、人間の精神を目覚めさせる存在として描かれました。本書は自然観察の記録であると同時に、「真に豊かに生きるとは何か」を問い直す哲学的な探究でもあります。アメリカ超絶主義の思想を体現した作品として、環境思想や市民的不服従の基礎につながる古典です。

なお、ソローは若くから奴隷制に反対し納税を拒み続け、投獄された経験があります。この体験は『市民的不服従』(1849)として出版され、のちにガンジーやキング牧師に愛読されました。

Henry David Thoreau (1817-1862) was an essayist and poet from Massachusetts. After graduating from university, he worked in his family business and was also employed as a teacher and surveyor. Deeply influenced by Ralph Waldo Emerson, he sought to put Transcendentalist principles into practice and lived for more than two years in self-sufficiency at Walden Pond.

Walden; or, Life in the Woods (1854) is a philosophical work that combines close observation of nature with reflections on universal human themes such as labor, time, property, and solitude. Thoreau offered a critique of the growing materialism of modern society. He emphasized independence, conscience, and the value of time, portraying nature not merely as a backdrop but as a presence that awakens and refines the human spirit. The work stands as both a record of natural observation and as a philosophical inquiry into what it means to live richly. As a defining text of American Transcendentalism, it later became foundational for environmental thought and civil disobedience.

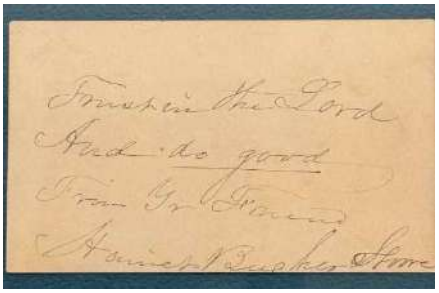
From a young age, Thoreau opposed slavery and refused to pay taxes in protest, an act that led to his brief imprisonment. This experience was later set down in *Civil Disobedience* (1849), a work that was widely read and admired by figures such as Mahatma Gandhi and Martin Luther King Jr.

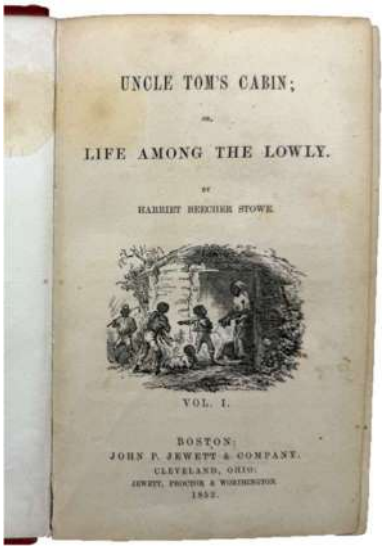
STOWE, Harriet Elizabeth Beecher

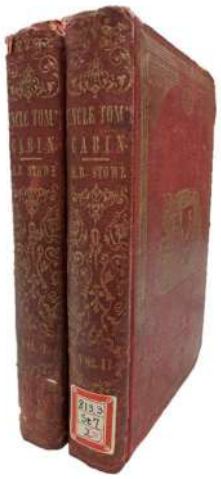
Uncle Tom's cabin : or life among the lowly.

Cleveland, 1852.

ストウ『アンクル・トムの小屋』







ストウ(1811-1896)は、コネティカット州生まれの女流作家です。牧師の父のもと、厳格な家庭で育ちました。女子神学校で男子と同等の教育を受けた末に教師となり、文化人と交流するうちに創作に励むようになります。やがて短編小説『ロトおじさん』(1834)が懸賞に入選して作家デビューを果たしました。

代表作『アンクル・トムの小屋』(1852)は、温和で信仰心の厚い黒人奴隷トムの運命を通して、奴隷制度の非人道性と家族が引き裂かれる悲劇を描いた反奴隷制小説。各地の主人のもとを転々とし、暴力や差別にさらされながらも人間としての尊厳とキリスト教的な慈愛を失わないトムの姿は、読者に強い道徳的な問いを投げかけました。ストウは、善悪の区別が明確な通俗小説の形式をとりながら、奴隷を「所有物」として扱う制度を強く告発したといえます。出版直後から空前の反響を呼んだ本作は、19 世紀において聖書に次ぐベストセラーとなり、奴隷制廃止運動(アボリショニズム)と南北戦争前夜の世論形成に大きな影響を与えました。南北戦争中にストウがリンカーン大統領に謁見した際に、「あなたがこの偉大な戦争を引き起こした小さなご婦人なのですね」と言わしめたという逸話は、本作の社会的影響力を象徴しています。

Harriet Beecher Stowe (1811-1896) was an American author born in Connecticut. Raised in a strict household by her father, a minister, she received an education equal to that of boys at a female seminary and later became a teacher. Through her association with intellectual and cultural figures, she devoted herself to literary pursuits. Her short story *Uncle Lot* (1834) won a prize in a literary competition, marking her debut as a writer.

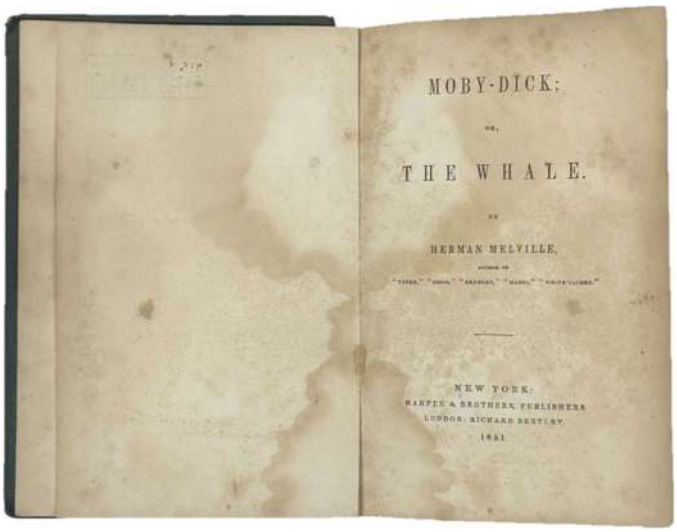
Her best-known work, *Uncle Tom's Cabin; or, Life Among the Lowly* (1852), is an antislavery novel that depicts the inhumanity of slavery and the tragedy of families torn apart through the fate of Tom, a gentle and devout enslaved man. Passed from one master to another, Tom endures violence and discrimination, yet he never relinquishes his dignity and his Christian compassion. Through his story, Stowe posed a powerful moral challenge to her readers. By employing in a popular style with a clear distinction between good and evil, the novel forcefully condemns a system that treats human beings as property. Immediately after its publication, the book provoked an enormous response and became, in the nineteenth century, second only to the Bible in sales. It exerted a profound influence on the abolitionist movement and on public opinion in the years leading up to the American Civil War. An often-repeated anecdote recounts that when Stowe met President Abraham Lincoln during the war, he is said to have greeted her by remarking, “So you’re the little woman who wrote the book that made this great war,” a remark that has come to symbolize the novel’s extraordinary social impact.

MELVILLE, Herman

Moby-Dick, or the whale.

New York, 1851.

メルヴィル『白鯨』


MOBY-DICK;

THE WHALE.

HERMAN MELVILLE,

NEW YORK:
HARPER & BROTHERS, PUBLISHERS
LONDON: RICHARD BENTLEY.
1851

メルヴィル(1819-1891)は、ニューヨーク生まれの詩人・小説家です。父の他界により 12 歳で学校を中退後、事務員や教員など複数の職業を経たのち、捕鯨船で放浪生活を送るようになります。その経験を基にした小説『タイピー』(1846)はベストセラーとなりました。

代表作『白鯨』(1851)は、若きイシュメールが捕鯨船に乗り込む場面から始まります。船を率いるのは、かつて自分の脚を奪った白いクジラ「モビー・ディック」への復讐に取りつかれた船長エイハブ。物語が進むにつれ、その執念は次第に船全体を支配し、航海は不穏な緊張を帯びていきます。やがて航海の果てには白鯨という圧倒的存在と人間が正面から対峙。本作は冒険小説の形をとりながら、クジラの生態や海の知識、神話や哲学的思索までを織り込み、読者を深い思考の海へ誘い、運命・狂気・自然と人間の関係を深く問いかける哲学的な作品です。なお、メルヴィルは本作の執筆中にホーソンと出会い、その作風を単なる冒険譚から哲学・神話的なものへと一変させたといいます。

不運にもメルヴィルは生前にその真価を十分に認められなかったといわれますが、1920 年代には再評価の動きがあり、今やアメリカの代表的な作家として知られています。

Herman Melville (1819-1891) was a poet and novelist born in New York. After his father's death, he left school at the age of twelve and worked in various occupations before embarking on a life at sea aboard whaling vessels. His experiences at sea formed the basis of *Typee* (1846), which became a bestseller.

His masterpiece *Moby-Dick; or, The Whale* (1851) opens with the young narrator Ishmael signing on to a whaling voyage. The ship is commanded by Captain Ahab, who is obsessed with revenge against the white whale that once tore off his leg. As the story unfolds, Ahab's monomaniacal pursuit gradually comes to dominate the entire crew, and the voyage grows increasingly tense and ominous. The narrative culminates in the ship's confrontation with the overwhelming presence of the white whale. Though structured as an adventure tale, the novel weaves together detailed knowledge of whales and the sea with mythological and philosophical reflection. It draws readers into a vast ocean of thought and probes profound questions about fate, madness, and the relationship between humanity and nature. During the writing of this novel, Melville met Nathaniel Hawthorne, an encounter often regarded as having contributed to the novel's shift from a simple adventure narrative to a more philosophical and symbolic mode.

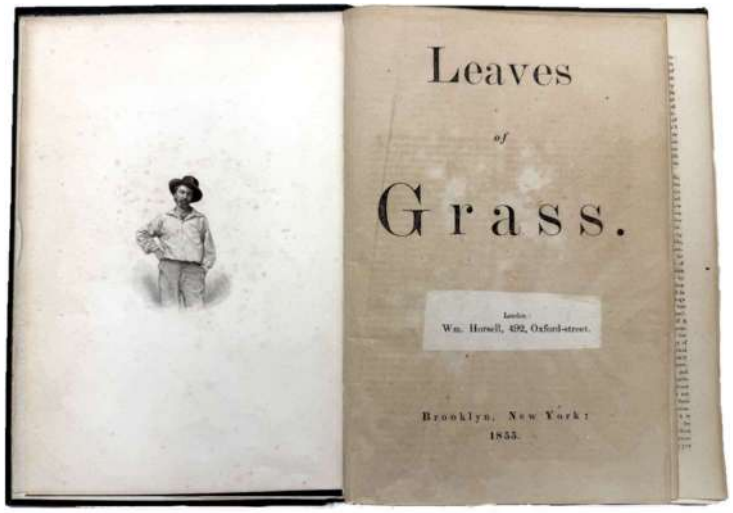
Although Melville's true worth was not fully recognized during his lifetime, a revival of interest in the 1920s led to a major reassessment of his work. Today, he is regarded as one of the central figures of American literature.

WHITMAN, Walt

Leaves of grass.

Brooklyn, 1855.

ホイットマン『草の葉』



ホイットマン(1819-1892)は、ニューヨーク州生まれの、「自由詩の父」とされる国民的詩人です。貧しさのため 11 歳で働きに出て、民主党系の記者などを経験。やがて政治に幻滅して読書にふけり、独自の道を模索します。

12 篇の詩を収録した『草の葉』初版(1855)は、自費で出版した匿名詩集。発行当初は思わしい結果が得られなかったものの、ホイットマンは生涯をこの詩集の増補改訂に捧げ、最終の臨終版(1892)は 293 篇の詩が収録される大作となりました。韻律や定型を用いない自由詩と、日常的で口語的な表現を特徴とし、個人という独立した存在とアメリカ民主主義を讃えました。代表的な詩「自己の歌」では、個人の身体や感覚が社会や宇宙とつながっているという思想が力強いリズムで展開されています。当時としては、生命への賛歌と理想的民主主義は極めて挑発的で、肉体や性愛を率直に描いた点は激しい批判も招きました。

南北戦争に携わった経験がホイットマンの作風に変容をもたらし、『軍鼓のひびき』(1865)では死と喪失、人間同士の共感と鎮魂の思いを描きました。散文『民主主義の展望』(1871)では、戦後社会を省察し、人格の成熟としての民主主義を模索。日本では夏目漱石によって紹介され、民主主義詩人として広く知られました。

Walt Whitman (1819-1892), born in New York State, is regarded as the father of free verse and as a national poet of the United States. Because of his family's poverty, he began working at the age of eleven and later gained experience as a journalist for Democratic newspapers. Disillusioned with politics, he devoted himself to reading and sought an independent literary path.

The first edition of *Leaves of Grass* (1855), containing twelve poems, was published anonymously at his own expense. Although it received little favorable response at first, Whitman devoted his life to expanding and revising the collection. The deathbed edition of 1892 had grown into a monumental work containing 293 poems. Its distinctive features include free verse without fixed meter or rhyme and a direct, colloquial style. He celebrated the individual self and the democratic vitality of America. In the representative poem *Song of Myself*, he develops in powerful rhythms the idea that the individual body and senses are intimately connected to society and the cosmos. At the time, his celebration of life and his democratic ideal was highly provocative, and his frank treatment of the body and sexuality drew severe criticism.

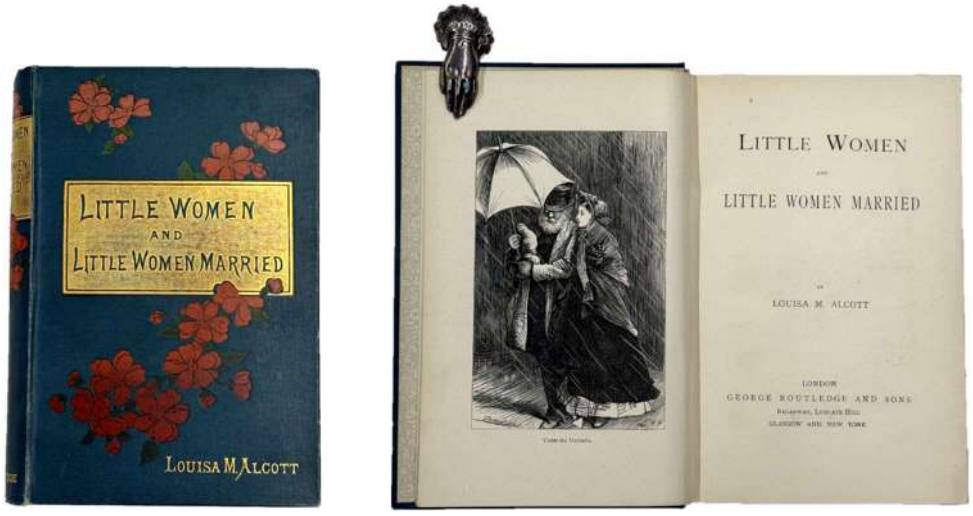
His experiences during the American Civil War profoundly shaped his later work. In *Drum-Taps* (1865), he portrayed death, loss, human sympathy, and mourning. In the prose work *Democratic Vistas* (1871), he reflected on postwar society and explored democracy as a process of moral and personal maturation. In Japan, he was introduced by Soseki Natsume and came to be known as a poet of democracy.

ALCOTT, Louisa May

Little women and Little women married.

London, [1889?].

オルコット『若草物語 第１部・第２部』



オルコット(1832-1888)はペンシルバニア州ジャーマンタウン生まれの女流作家です。父は超絶主義者で教育者のエイモス・ブロンソン・オルコットで、4 姉妹の次女として育ちました。父の学校経営の失敗などにより経済的には恵まれませんでしたが、父の思想的影響に加え、エマソンやソローといった思想家から薫陶を受け成長しました。16歳のときに執筆した処女作『花の寓話集』(1855)は、エマソンの娘のために書いた物語をもとに刊行された作品です。また、南北戦争中には従軍看護師として働き、その体験をもとに『病院のスケッチ』(1863)を著しました。

『若草物語』(1868-1869)は、南北戦争を背景に、作者自身と姉妹をモデルにした自伝的家庭小説で、2 部構成で刊行されました。マーチ家の理想的な母親を中心に、メグ、ジョー、ベス、エミーの 4 姉妹が織りなす日常の喜びや葛藤、成長の姿が温かく描かれています。刊行と同時に大きな成功を収め、オルコットは児童文学作家としての名声を確立しました。本作は第 4 部まで続編が刊行され、各国語に翻訳されて、現在に至るまで世代を超えて読み継がれています。

Louisa May Alcott (1832-1888) was an American author born in Germantown, Pennsylvania. Her father was the Transcendentalist and educator Amos Bronson Alcott, and she grew up as the second of four sisters. Although her family often struggled financially due to her father's failed educational ventures, she was richly influenced by his ideals and by leading thinkers such as Ralph Waldo Emerson and Henry David Thoreau. Her first book, *Flower Fables* (1855), written at the age of sixteen, was based on stories she had originally composed for Emerson's daughter. During the American Civil War, she worked as a nurse, and her experiences formed the basis of *Hospital Sketches* (1863).

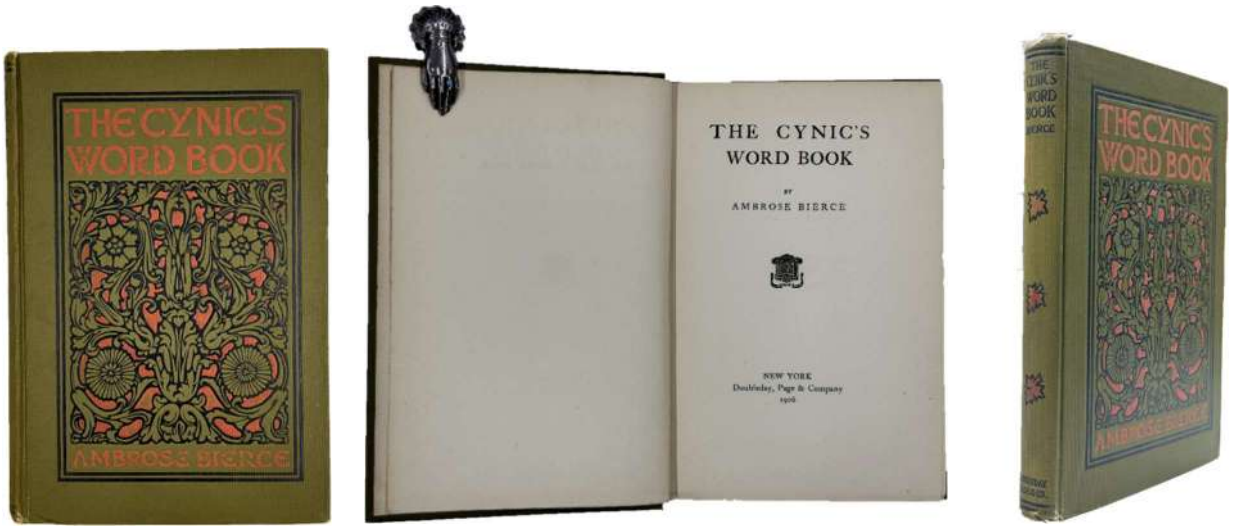
Little Women (1868-1869), published in two parts, is an autobiographical domestic novel set against the background of the Civil War and modeled on Alcott and her sisters. Centered on the devoted mother of the March family, the story warmly portrays the daily joys, struggles, and growth of the four sisters, Meg, Jo, Beth, and Amy. The novel achieved immediate success upon publication and established Alcott's reputation as a children's author. It was followed by three sequels, translated into many languages, and continues to be read across generations to this day.

BIERCE, Ambrose

The cynic's word book.

New York, 1906.

ビアス『冷笑派用語集』



ビアス(1842-1914?)は、オハイオ州生まれのジャーナリスト・作家です。貧しい家に生まれ、様々な職業を経た後に南北戦争を経験しました。退役後はジャーナリストとなり、新聞や雑誌で皮肉に富んだ風刺文を展開。その辛辣さから「毒舌のビアス」として知られるようになります。

『冷笑派用語集』(1906)は辞書の形式で書かれており、内容はブラックユーモアに満ちています。たとえば「愛(Love)」を「結婚するか発症の原因から本人を遠ざければ治る、一時的な狂気」とし、「平和(Peace)」を「二つの戦争の間にある、欺きの期間」と定義。身近な語に常識を裏返すような定義を与えることで、人間の利己心や権力欲、自己欺瞞をあぶり出しました。もとは新聞コラムのシリーズとして始まり、初版にはAからLまでの語を収録。M以降を増補した完全版はのちに『悪魔の辞典』(1911)と題して出版され、広く知られるようになりました。

晩年のビアスは私生活の不幸などにより人間や文明社会そのものに絶望し、1913 年にメキシコへ旅立ち消息を絶ったとされますが、南北戦争を背景に死の諸相を描いた『いのちの半ばに』(1892)や、現実と幻想の境界を探る後年の怪奇的・超自然的な作品によって、アメリカ文学史上優れた短編の名手の一人として知られています。日本では芥川龍之介が絶賛し、両者の作風には複数の共通点が見られます。

Ambrose Bierce (1842-1914?) was a journalist and writer born in Ohio. Raised in poverty, he worked in various occupations before serving in the American Civil War. After the war he became a journalist and became known for his sharply ironic and satirical prose, earning the nickname “Bitter Bierce.”

The Cynic’s Word Book (1906) is a satirical work arranged in dictionary form and filled with caustic humor. For example, he defines “Love” as “a temporary insanity curable by marriage or by removal of the patient from the influences under which he incurred the disorder,” and “Peace” as “a period of cheating between two periods of fighting.” By assigning startling and paradoxical definitions to familiar words, Bierce exposed human selfishness, the pursuit of power, and self-deception. The work began as a series of newspaper columns, and the first edition contained entries from A to L. A later expanded edition, including entries from M onward, was published under the title *The Devil’s Dictionary* (1911), under which it soon became widely known.

In his later years, disillusioned by personal misfortunes and by society itself, Bierce traveled to Mexico in 1913 and disappeared without a trace. He is nevertheless remembered as a master of the short story in works such as *In the Midst of Life* (1892), which portrays various aspects of death against the backdrop of the Civil War, and in his later supernatural tales that explore the boundaries between reality and illusion. In Japan, he was highly praised by Ryunosuke Akutagawa, whose own work suggests an affinity with Bierce’s themes and techniques.

TWAIN, Mark

The adventures of Tom Sawyer.

Hartford, 1876.

トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』



トウェイン(1835-1910、本名：Samuel Langhorne Clemens)は、ミズーリ州フロリダ生まれの小説家です。父を失い 12 歳で働き始め、その後は蒸気船の水先案内人としてミシシッピ川を行き来しました。ペンネームは職業的専門用語「By the mark twain!(水深二尋！)」という掛け声に由来します。

『トム・ソーヤーの冒険』(1876)は、ミシシッピ川沿いの町を舞台に、いたずら好きな少年トムの日常と成長を描いた物語。大人が押し付ける厳しい規則をきらって自由を愛するトムは、学校をさぼったり、機転をきかせて面倒な仕事をうまく遊びに変えたりしながら、次第に町で評判の少年となっていきます。親友であるハックとの冒険、初恋、宝探しなど、様々な出来事を通して少年時代の楽しさを生き生きと描き、同時に自由と社会規律の間で揺れる童心をユーモラスに伝えています。

姉妹作『ハックルベリー・フィンの冒険』(1885)では、語り手がトムの親友ハックに代わります。トムの冒険が少年時代の夢と遊びの物語だとすれば、ハックの冒険は奴隷制度や人種差別、良心と社会の規範の葛藤などに直面し、アメリカ社会を深く見つめる物語。E・ヘミングウェイに「すべての現代アメリカ文学はハックルベリー・フィンから始まる」と言わしめるなど、多くの作家に影響を与えました。

Mark Twain (born Samuel Langhorne Clemens, 1835-1910) was a novelist born in Florida, Missouri. After losing his father, he began working at the age of twelve and later became a steamboat pilot on the Mississippi River. His pen name was derived from the riverboat term “By the mark twain!”, a call indicating safe water depth.

The Adventures of Tom Sawyer (1876) is set in a town along the Mississippi River and portrays the daily life and growth of a mischievous boy named Tom. Disliking the strict rules imposed by adults and loving freedom, Tom skips school and cleverly turns troublesome chores into games, gradually becoming the talk of the town. Through adventures with his friend Huck, experiences of first love, and the excitement of treasure hunting, the novel vividly captures the joys of boyhood while humorously expressing the tension between freedom and social norms.

A companion novel, *The Adventures of Huckleberry Finn* (1884), shifts the narrator to Tom’s friend Huck. While Tom’s story centers on youthful dreams and play, Huck’s journey confronts issues such as slavery, racial prejudice, and the conflict between personal conscience and social norms, offering a deeper reflection on American society. Ernest Hemingway famously remarked that “All modern American literature comes from Huckleberry Finn,” a statement that attests to the novel’s lasting influence on later writers.

TWAIN, Mark

A tramp abroad.

Hartford, 1880.

トウェイン『ヨーロッパ放浪記』



『ヨーロッパ放浪記』(1880)は、トウェインのヨーロッパを巡る旅を基にした紀行文学です。「旅は偏見や独善、心の狭さを完膚なきまでに打ち砕く」という彼の言葉通り、その旅は既存の価値観を疑い、自らの目と言葉で世界を定義し直す試みでした。

原題の「tramp」は「徒歩でさすらう旅人」という意味。トウェインはアメリカ人の視点から、ヨーロッパの観光地や芸術を軽やかに観察します。とりわけドイツには強い関心を寄せ、ハイデルベルクや黒い森の風景を詩的に描く一方、付録エッセー「恐るべきドイツ語」では、ドイツ語文法の難解さを分析し、学習者としての苦闘をユーモラスに描いています。その根底にあるのは、言語が持つ構造や文化的な壁に対する真摯な姿勢と鋭い言語感覚。本書は、異文化との出会いを通して人間を描いた作品であり、トウェインの国際的な視野と風刺精神がよく表れた作品です。

なお、晩年のトウェインは事業失敗を経験しつつも講演旅行で借金を完済。その体験は『赤道に沿って』(1897)と題して刊行されました。ユーモアと批評の融合、フロンティア精神とアメリカ的アイデンティティの形成によって「アメリカ文学の父」と称された、最も偉大な作家の一人です。

A Tramp Abroad (1880) is a work of travel literature based on Mark Twain's journey through Europe. True to his famous words, "Travel is fatal to prejudice, bigotry, and narrow-mindedness," the book represents an attempt to question established values and to redefine the world through his own eyes and words.

The word "tramp" means "to wander on foot." With wit and independence, Twain observes celebrated tourist sites and great works of art from a distinctly American perspective. He shows particular interest in Germany, offering poetic descriptions of Heidelberg and the Black Forest. At the same time, in the appended essay *The Awful German Language*, he humorously analyzes the complexity of German grammar and recounts his struggles as a learner. Beneath the humor lies a serious engagement with the structural and cultural barriers embedded in language, as well as a keen linguistic sensitivity. The book portrays human nature through encounters with different cultures and vividly reveals Twain's international outlook and satirical spirit.

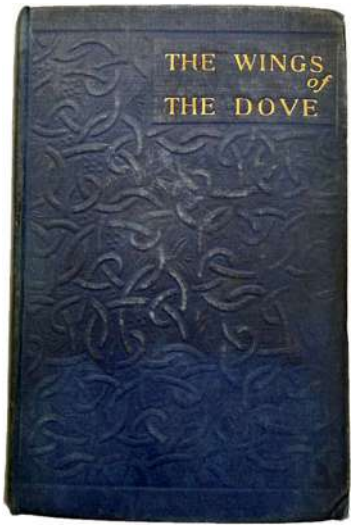
In his later years, despite suffering financial ruin from failed business ventures, Twain repaid his debts through extensive lecture tours. That experience was later published as *Following the Equator* (1897). Through his fusion of humor and criticism, his frontier spirit, and his role in shaping a distinctly American identity, Twain came to be regarded as one of the greatest writers and is often called the father of American literature.

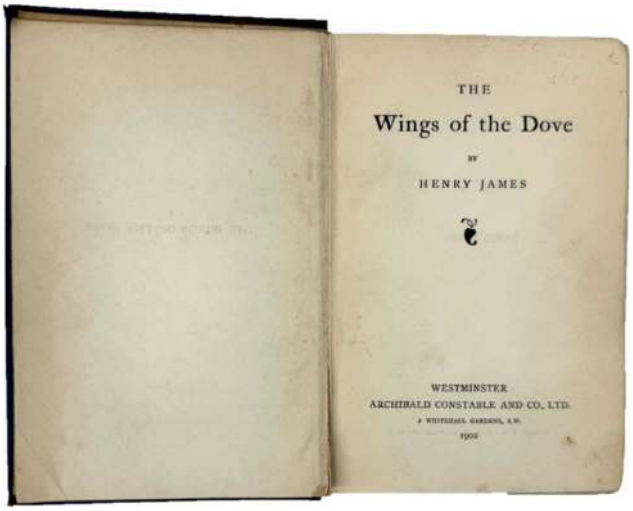
JAMES, Henry

The wings of the dove.

Westminster, 1902.

ジェイムズ『鳩の翼』





ヘンリー・ジェイムズ(1843-1916)は、ニューヨーク生まれの小説家です。大学中退後はヨーロッパへ徐々に拠点を移して小説作法を学び、1915 年にイギリスに帰化。多くの作品でアメリカとヨーロッパの対比を描きました。

『鳩の翼』(1902)は、愛・道徳・金銭が複雑に絡み合う人間関係を描いた心理小説です。物語はロンドンとヴェネツィアを舞台に、貧しい新聞記者デンシャーとその恋人ケイト、そして莫大な財産を相続する病弱なアメリカ人女性ミリーの 3 人を中心に展開。ミリーのデンシャーに対する好意を利用して財産を得ようと策略を練るケイト、道徳的葛藤に揺れ動くデンシャー。全体を通して、「愛は救いとなるのか、それとも破壊をもたらすのか」、「幸福と犠牲は両立しうるのか」という問いを読者に突きつけました。題名は、無垢なミリーの愛と犠牲を、純潔や自己犠牲を象徴する鳩になぞらえたもので、その「翼」は他者を包み良心を目覚めさせる力を象徴しています。

なお、本作と『使者たち』(1903)、『黄金の盃』(1904)を合わせた後期の 3 作は、登場人物の内面意識・微妙な感情を徹底的に描いたジェイムズの心理リアリズム最高峰とされます。また、ジェイムズは自らが強く影響を受けた N・ホーソンについて研究し、『ホーソン』(1879)として評論を記しました。

Henry James (1843-1916) was a novelist born in New York. After a brief period of study, he eventually settled in Europe to refine his art of fiction and became a British citizen in 1915. In many of his works, he explored the contrast between America and Europe, examining differences in culture, morality, and sensibility.

The Wings of the Dove (1902) is a psychological novel that portrays intricate relationships shaped by love, morality, and money. Set in London and Venice, the novel centers on three figures whose lives become intricately entwined: the impoverished journalist Merton Densher, his lover Kate Croy, and Milly Theale, a fragile yet immensely wealthy American heiress. Kate devises a scheme to secure Milly's fortune by exploiting Milly's affection for Densher, while Densher struggles with profound moral conflict. Throughout the novel, James poses unsettling questions: Can love be redemptive, or can it be destructive? Can happiness coexist with sacrifice? The title evokes the image of the dove as a symbol of Milly's innocence and self-sacrifice, and its wings suggest a spiritual power that embraces others and awakens conscience.

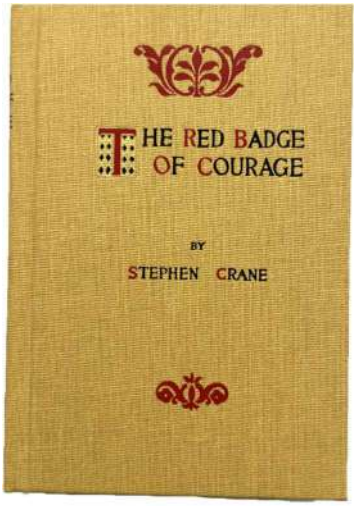
Together with *The Ambassadors* (1903) and *The Golden Bowl* (1904), this novel is regarded as one of the highest achievements of James's psychological realism. He was also deeply influenced by Nathaniel Hawthorne and wrote a critical study titled *Hawthorne* (1879), reflecting an engagement with his predecessor's moral and symbolic art.

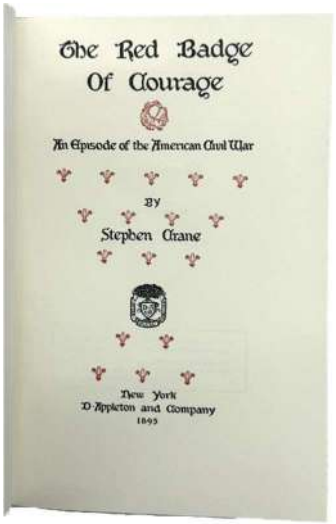
CRANE, Stephen

The red badge of courage.

Shelton, [19--].

クレイン『赤い武勲章』





クレイン(1871-1900)はニュージャージー州ニューアーク生まれの小説家です。早くから執筆活動を始め、処女作『街の女マギー』(1893)を自費出版し、清純な少女が劣悪な都市環境によって転落していく姿を描きました。その主題は自然主義文学に連なるものとして当時出版業界で影響力を持っていたハムリン・ガーランドに高く評価されましたが、商業的成功には恵まれませんでした。またクレインの文体は、色彩や感覚、瞬間的な心理を強調する印象主義的特徴を備えており、後のＥ・ヘミングウェイらに影響を与えました。

『赤い武勲章』(1895)はクレインに名声をもたらした代表作です。南北戦争を舞台に、北軍に志願した平凡な一兵士ヘンリー・フレミングの視点で物語は展開します。彼は初陣で恐怖にかられて逃亡しますが、偶然負った傷が皮肉にも名誉の戦傷と誤解されます。その結果、周囲から称賛を受け、臆病さを隠せた安堵と英雄視されることへの高揚感との間で揺れる内面が浮き彫りになります。本作は戦争の英雄性を否定し、戦場の混乱や恐怖、不条理を描き出しています。

執筆当時、クレインに戦争体験はなく、想像力だけで書き上げたことも特筆されます。のちに従軍記者として戦争を実体験し、波乱に富んだ人生を送りましたが、結核のため 28 歳で早逝しました。

Stephen Crane (1871-1900) was a novelist born in Newark, New Jersey. He began writing at an early age and self-published his first novel, *Maggie: A Girl of the Streets* (1893), which depicts the downfall of an innocent young woman destroyed by a harsh urban environment. Its naturalistic theme was highly praised by Hamlin Garland, an influential literary figure of the time, though the book did not achieve commercial success. Crane's style is marked by an impressionistic emphasis on color, sensation, and fleeting psychological states, and it later influenced writers such as Ernest Hemingway.

The Red Badge of Courage (1895) brought Crane widespread recognition. Set during the American Civil War, the novel unfolds from the perspective of Henry Fleming, an ordinary young soldier who volunteers for the Union Army. Overcome by fear in his first battle, he flees the field, yet a wound he receives by chance is ironically mistaken for a mark of heroic bravery. Praised by others, Henry experiences a complex inner conflict between relief at concealing his cowardice and exhilaration at the false appearance of heroism. The novel rejects romanticized notions of warfare and instead portrays the confusion, terror, and absurdity of the battlefield.

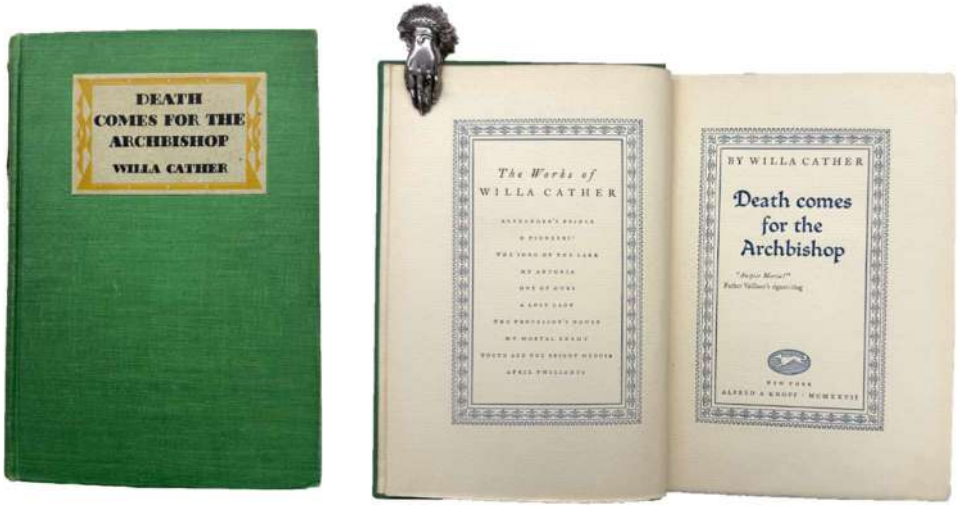
Remarkably, Crane had no personal experience of war when he wrote the novel and relied entirely on his imagination. He later became a war correspondent and led a turbulent life, but died of tuberculosis at the age of twenty-eight.

CATHER, Willa Sibert

Death comes for the Archbishop.

New York, 1927.

キャザー『大司教に死は来たる』



キャザー(1873-1947)は、ヴァージニア州生まれの女流作家です。農場を営む家庭に生まれて移住を経験し、大学卒業後は記者や教師を務めながら、創作を始めました。

『大司教に死は来たる』(1927)は、19 世紀のニューメキシコを舞台に、宣教活動に生涯を捧げたフランス人司祭を描いた物語。司教ラトゥールと親友ヴァイアン神父は共にフランスから派遣され、新設された教区の整備にあたります。荒涼とした土地でメキシコ系住民や先住民と向き合いながら、2 人は信仰と秩序を育てていきます。劇的な事件やクライマックスを中心に展開するのではなく、司祭として各地を巡る旅、出会い、沈黙の時間を積み重ねる構成が特徴。なお、本作において「死」は、神のもとへ帰る自然な帰結・人生と信仰の完成として描かれています。万人に訪れる恐怖の象徴であった死を、キャザーは荒野に信仰を根づかせた人物の生涯を通して、「長い旅路の終わりに訪れる穏やかな訪問者」へと昇華させました。

キャザーは多くの小説の構造面で工夫を凝らし、中でも『迷える夫人』(1923)における若い語り手の間接的な叙述を通して時代の理想の衰退を示す構成は、S・フィッツジェラルドの名作『グレート・ギャツビー』(1925)に深い影響を与えたといいます。

Willa Cather (1873-1947) was an American author born in Virginia. After graduating from university, she worked as a journalist and teacher while beginning her literary career.

Death Comes for the Archbishop (1927) is set in nineteenth century New Mexico and portrays the life of a French priest devoted to missionary work. The protagonist, Bishop Jean Marie Latour, and his close friend Father Vaillant are sent from France to rebuild a newly established diocese. Confronting the harsh landscape and engaging with Mexican American and Native communities, the two men patiently cultivate faith and order in a remote region. Rather than unfolding through dramatic incidents or climactic scenes, the novel is structured around a series of journeys, encounters, and quiet intervals of reflection. In this work, death is depicted not as terror but as a natural culmination, a return to God and the fulfillment of a life of faith. Through the story of a man who brought faith to the wilderness, Cather transforms death into a gentle visitor arriving at the end of a long journey.

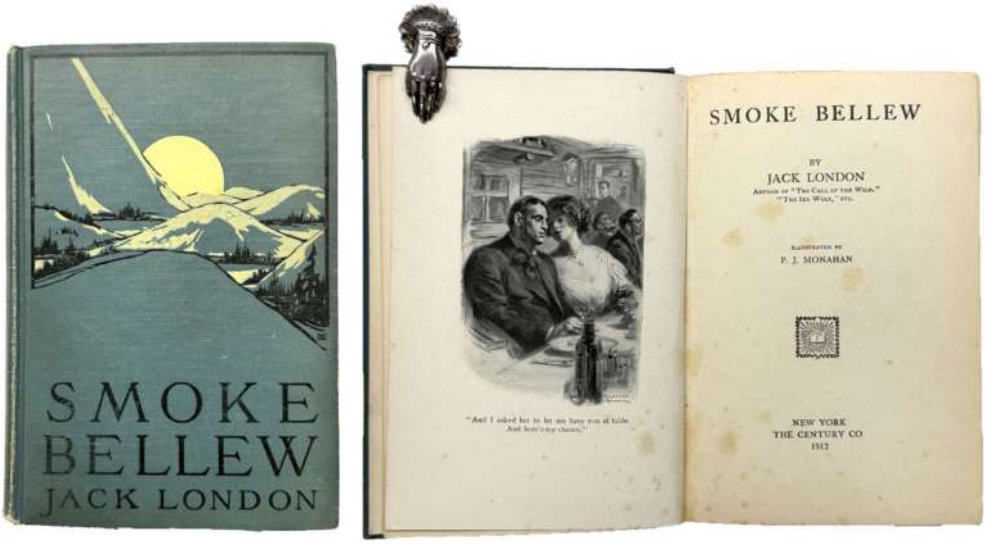
Cather was known for her structural ingenuity. In *A Lost Lady* (1923), she employed an indirect narrative voice through a young observer to suggest the decline of an earlier era's ideals. This technique is said to have deeply influenced F. Scott Fitzgerald's *The Great Gatsby* (1925).

LONDON, Jack

Smoke Bellew.

New York, 1912.

ロンドン『スモーク・ベルー』



ジャック・ロンドン(1876-1916)は、サンフランシスコ生まれの小説家です。貧しさのため 14 歳で家計を支えるようになり、様々な職業に従事。経験に基づく『狼の息子』(1900)で頭角を現し、犬や狼の視点から「文明」と「野生」の葛藤を描いた『荒野の呼び声』(1903)、『白い牙』(1906)で作家としての名声を不動のものとします。

『スモーク・ベルー』(1912)は、クロンダイク・ゴールドラッシュでの金鉱発掘の体験を基に書いた連作短編集です。主人公のクリストファー・ベルー、通称スモークは、都会育ちの知性ある新聞記者。軽い気持ちで金鉱発掘へ乗り出すも、自然の猛威と人間の欲望が渦巻く極北の地で試練に直面します。それまで知力や理屈に頼っていたスモークは、やがて身体感覚、迅速な判断、仲間との連帯こそが生存の鍵であると学んでいきます。物語全体を通して、都会・文明的知性が荒野・実践的知恵へと鍛えられていく成長の構図が描かれました。

なお、ロンドンは 1890 年代に漁船の船員として横浜に滞在し、さらに日露戦争中はジャーナリストとして日本軍に同行した経験があります。『お春』(1897)など、ロンドン初期の短編小説には日本を舞台にしたものがあり、日米関係史の一端を示す存在ともいえます。

Jack London (1876-1916) was a novelist born in San Francisco. Forced by poverty to support his family from the age of fourteen, he worked in a wide range of occupations. Drawing on these experiences, he emerged as a promising writer with *The Son of the Wolf* (1900). He secured lasting fame with *The Call of the Wild* (1903) and *White Fang* (1906), works that depict the conflict between civilization and the wild through the perspectives of dogs and wolves.

Smoke Bellew (1912) is a series of interconnected short stories based on London's own experiences during the Klondike Gold Rush. The protagonist, Christopher Bellew, nicknamed Smoke, is an urbane and intelligent newspaper reporter. Setting out lightly for the gold fields, he soon confronts the harsh forces of nature and the swirl of human greed in the Far North. Gradually, Smoke learns that survival depends not on intellect alone but on physical instinct, quick judgment, and solidarity with companions. Throughout the work, London portrays a process of growth in which urban, civilized intellect is transformed into the practical wisdom of the wilderness.

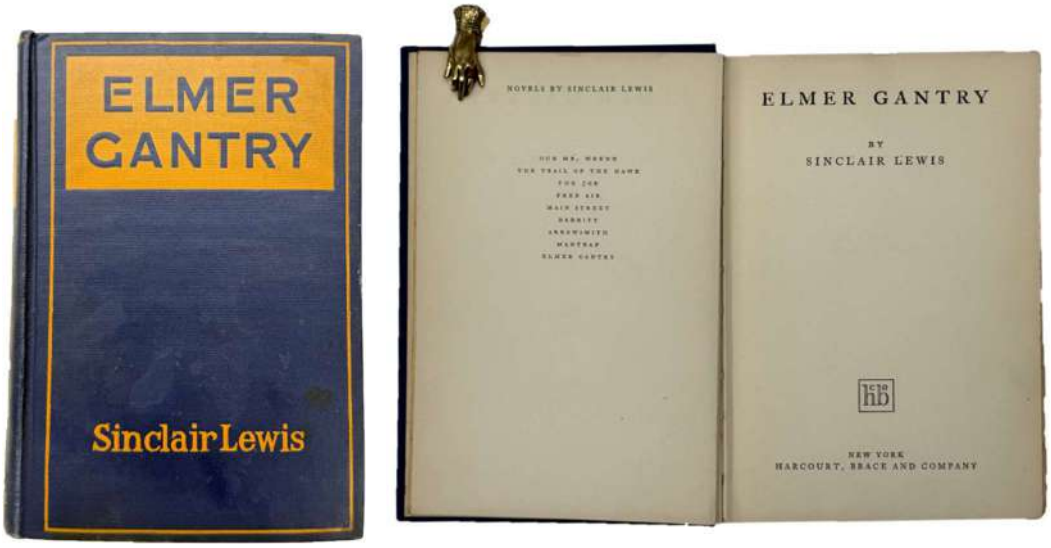
London had significant connections with Japan. In the early 1890s, he stayed in Yokohama as a crew member on a sealing vessel, and during the Russo-Japanese War he accompanied the Japanese army as a war correspondent. Some of his early short stories, such as *O Haru* (1897), are set in Japan, making him a noteworthy literary figure in the history of relations between Japan and the United States.

LEWIS, Harry Sinclair

Elmer Gantry.

New York, 1927.

ルイス『エルマー・ガントリー』



シンクレア・ルイス(1885-1951)は、ミネソタ州生まれの小説家です。地方都市と中産階級社会で育った体験を創作の基盤とし、大学卒業後は新聞記者や編集者として働きながら執筆を続けました。

『エルマー・ガントリー』(1927)は、アメリカの宗教界を痛烈に風刺した代表作です。主人公エルマーは、信仰よりも名声と成功を渇望する野心家。私生活では酒や女性に溺れながらも、壇上では巧みな弁舌で大衆心理を操作し、人気伝道師へと上り詰めます。宗教を自己実現や商業主義の道具として利用して地位を築いていくその姿を通し、ルイスは信仰そのものではなく、それを取り巻く人間と社会の腐敗を告発しました。本作は発表当時、「冒涜的」として一部で発禁処分を受けるなど大論争を呼びましたが、現在は宗教と権力の危うい関係を問う先駆的な作品として高く評価されています。

他の代表作『本町通り』(1920)、『バビット』(1922)、『アロースミス』(1925)は、いずれもアメリカ中産階級社会を舞台に、個人の理想が世俗的成功や同調圧力によって抑圧される姿を描いた作品です。ルイスは、アメリカ社会の偽善性・俗物性を描いた功績により、1930 年にアメリカ人として初めてノーベル文学賞を受賞しました。

Sinclair Lewis (1885-1951) was a novelist born in Minnesota. Raised in a small town within a middle-class environment, he drew deeply on these experiences in his fiction. After graduating from university, he worked as a newspaper reporter and editor while continuing to write.

Elmer Gantry (1927) is one of his most celebrated works and a scathing satire of organized religion in the United States. The protagonist, Elmer, is an ambitious man who craves fame and success more than faith. Though privately given to wine and women, he skillfully manipulates mass psychology from the pulpit and rises to prominence as a popular evangelist. Through Elmer's ascent, which is built on using religion as a means of self-advancement and commercial gain, Lewis indicts not faith itself but the corruption of the individuals and social institutions surrounding it. Upon publication, the novel provoked fierce controversy and was banned in some places as blasphemous. Today, it is regarded as a pioneering work that questions the uneasy relationship between religion and power.

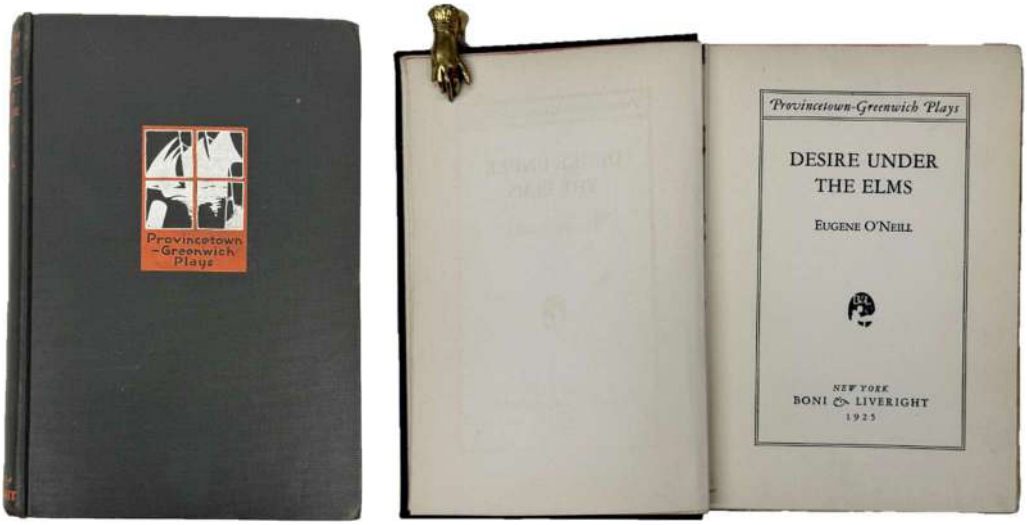
His other major works, *Main Street* (1920), *Babbitt* (1922), and *Arrowsmith* (1925), also depict American middle-class society and portray how individual ideals are often stifled by materialistic success and social conformity. In recognition of his sharp exposure of American hypocrisy and philistinism, Lewis became in 1930 the first American to receive the Nobel Prize in Literature.

O'NEILL, Eugene Gladstone

Desire under the elms.

New York, 1925.

オニール『楡（にれ）の木陰の欲望』



オニール(1888-1953)は、ニューヨーク生まれの劇作家です。大学中退後に患った肺結核の療養生活を機に、劇作家になる決意を固めたといいます。

『楡の木陰の欲望』(1924)は、ニューイングランドの農場を舞台に、人間の欲望と罪、家族の対立を描いた代表作です。物語は、厳格で支配的な父エフライムと、その息子たちの確執を軸に展開します。父が若い後妻アビーを家に迎えたことで、家族の関係は一気に緊張。農場を自分のものと信じる末子エベンと、愛と財産を求めるアビーとの間に生まれる激しい感情が絡み、やがて物語は悲劇的な方向へと進んでいきます。題名の「楡の木」は、家を覆う重苦しい運命や抑圧の象徴。父子対立や禁忌の愛といったギリシア悲劇の構図を下敷きにしながら、厳しい自然と閉鎖的な家族関係の中で、人間の本能を赤裸々に描いた作品です。

なお、オニールはアメリカ演劇を心理的・文学的に大きく深化させた功績から、1936 年にノーベル文学賞を受賞しました。「アメリカ演劇の父」ともいわれ、特に『氷人来る』(1939)、『夜への長い旅路』(1941)は幻想の崩壊と家族・人間の内面の闇を徹底的に描いた傑作と評価されています。

Eugene O'Neill (1888-1953) was a playwright born in New York. After leaving university, he contracted tuberculosis, and during his period of recuperation he resolved to become a dramatist.

Desire Under the Elms (1924) is one of his major works, set on a New England farm and exploring human desire, guilt, and familial conflict. The drama centers on the stern and domineering father Ephraim Cabot and his sons. When Ephraim brings home a young new wife, Abbie, tensions within the household intensify. Eben, the youngest son, who believes the farm rightfully belongs to him, develops an intense and troubled bond with Abbie, who seeks both love and property. The elms that overshadow the house symbolize the oppressive weight of fate and repression. Drawing on patterns reminiscent of Greek tragedy, including father and son conflict and forbidden love, O'Neill presents a stark portrayal of instinctual desire and sin within the harsh natural and emotional landscape of a closed family world.

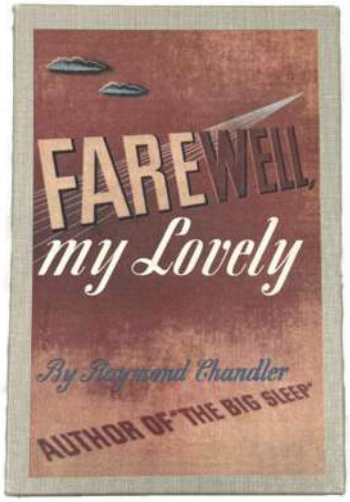
In recognition of his profound psychological and literary transformation of American drama, O'Neill was awarded the Nobel Prize in Literature in 1936. Often called the father of American drama, he is also renowned for *The Iceman Cometh* (1939) and *Long Day's Journey into Night* (1941), masterpieces that relentlessly probe the collapse of illusion and the darkness within family life and the human soul.

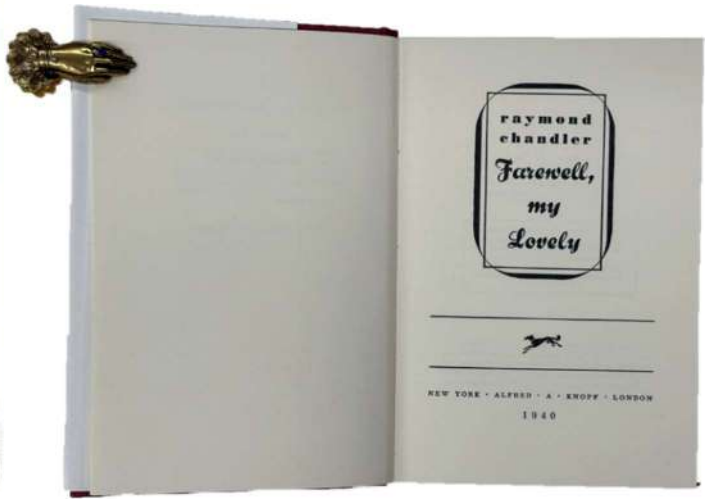
CHANDLER, Raymond Thornton

Farewell, my lovely.

Shelton, 1967.

チャンドラー『さらば愛しき女(ひと)よ』





チャンドラー(1888-1959)はハードボイルド推理小説を代表する小説家です。イリノイ州シカゴに生まれましたが、父親が家族を捨てたため、7 歳のときに母親と共にイギリスに渡り、ロンドンで教育を受けました。この英国的教養は、のちの洗練された文体に影響を与えています。

第一次世界大戦では従軍し、終戦後にアメリカへ帰国。その後は記者や会計士として働きますが、40 歳半ばにして作家への転身を決意し、1933 年頃から「ブラック・マスク」誌などのパルプ・マガジンに短編を掲載し始めます。1939 年には長編第 1 作となる『大いなる眠り』を発表し、短編を通して練り上げてきた私立探偵フィリップ・マーロウの人物像を確立させ、成功を収めました。

『さらば愛しき女よ』(1940)は、マーロウ・シリーズ第 2 作にあたる長編です。刑務所から出所したばかりの大男マロイの恋人ヴェルマを捜すことをきっかけに、物語はロサンゼルスの裏社会へと展開していきます。複雑に絡み合う事件の背後には人間の孤独や執着、暴力が描かれ、冷笑的でありながらも弱者を切り捨てることのできないマーロウの人物像が示されています。

Raymond Chandler (1888-1959) was a leading writer of hardboiled detective fiction. He was born in Chicago, Illinois, but after his father abandoned the family, he moved to England with his mother at the age of seven and received his education in London. This British upbringing later influenced his refined prose style.

He served during the First World War and returned to the United States after the war. He worked as a reporter and an accountant before deciding to become a writer. Around 1933 he began publishing short stories in pulp magazines such as *Black Mask*. In 1939 he published his first novel, *The Big Sleep*, finally establishing the character of the private detective Philip Marlowe, whom he had developed in his short fiction, and achieving considerable success.

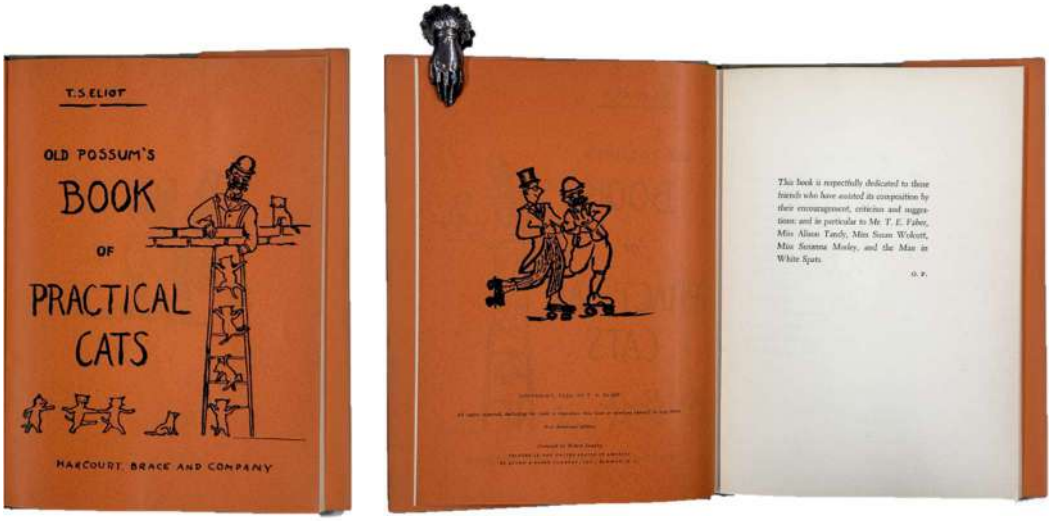
Farewell, My Lovely (1940) is the second novel in the Marlowe series. The story begins when Marlowe is drawn into a search for Velma, the lover of a hulking man recently released from prison, a case that leads him into the underworld of Los Angeles. Beneath the intricately intertwined events lie themes of loneliness, obsession, and violence, revealing Marlowe as a cynical yet principled figure who cannot turn his back on the vulnerable.

ELIOT, Thomas Stearns

Old Possum's book of practical cats.

New York, 1939.

エリオット『ポッサムおじさんの実用猫百科』



エリオット(1888-1965)は、ミズーリ州生まれの批評家・作家です。大学卒業後にヨーロッパ留学を経てロンドンに定住し、1927 年にはイギリス国籍を取得しました。

『ポッサムおじさんの実用猫百科』(1939)は、ミュージカル「キャッツ」の原作として知られるユーモラスな詩集です。語り手の「ポッサムおじさん」はエリオット自身の愛称で、その語りは軽妙で遊び心に満ちています。犯罪王マキャヴィティや黒猫ミストフェリーズ、気まぐれなラム・タム・タガーなど、個性豊かな猫たちがリズミカルな韻律と言葉遊びによって活き活きと描かれ、エリオットの言語感覚の豊かさと、音楽的リズムへの鋭い感性が楽しめる作品です。本作は 1981 年にミュージカル化されるとロングランの大ヒットとなり、現在も世界中で愛されています。

一方で詩人エリオットの本領は、断片的な引用や多声的構成を用い、計算された構成と緻密なイメージによって読者に思索を促す、知的で密度の高い詩風にありました。長編詩『荒地』(1922)や『四つの四重奏』(1943)によってエリオットはモダニズム詩を代表する存在となり、20 世紀詩の革新者として国際的評価を確立。1948 年、ノーベル文学賞を受賞しました。

T. S. Eliot (1888-1965) was a critic and writer born in Missouri. After graduating from university, he pursued further studies in Europe and eventually settled in London. In 1927 he acquired British citizenship.

Old Possum's Book of Practical Cats (1939) is a humorous collection of poems known as the original basis for ~~of~~ the musical *Cats*. The narrator, "Old Possum," was Eliot's own nickname, and the poems are marked by a light and playful tone. Memorable feline characters such as Macavity the Mystery Cat, Mr. Mistoffelees, and the whimsical Rum Tum Tugger are vividly portrayed through rhythmic verse and inventive wordplay, allowing readers to appreciate Eliot's rich linguistic flair and a keen ear for musical cadence. Adapted into a musical in 1981, the work became a long-running international success and remains beloved around the world.

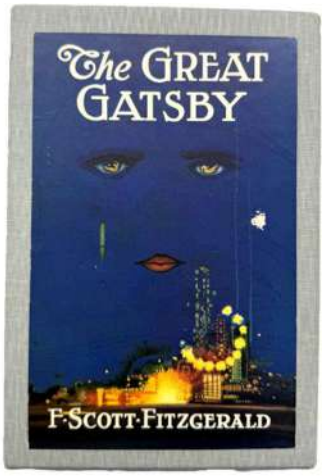
Eliot's principal achievement, however, lay in his intellectually rigorous and densely textured poetry, which employed fragmentary quotation and polyphonic structure to invite reflection through carefully constructed form and intricate imagery. With long poems such as *The Waste Land* (1922) and *Four Quartets* (1943), he became a central figure of modernist poetry and established an international reputation as a major innovator of twentieth century verse. He was awarded the Nobel Prize in Literature in 1948.

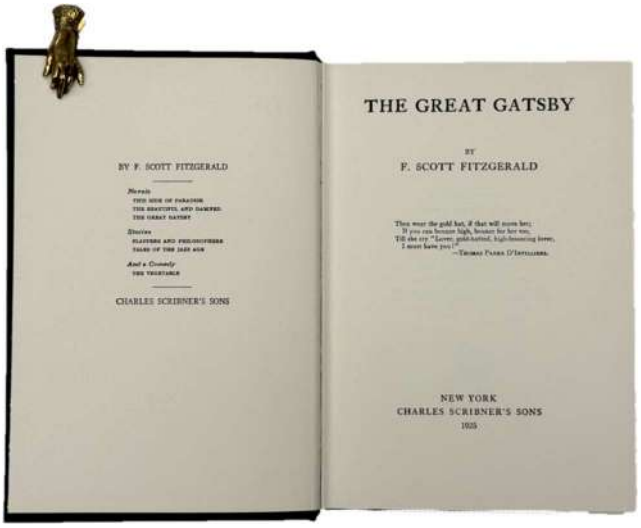
FITZGERALD, Francis Scott Key

The great Gatsby.

New York, 1953.

フィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』





フィッツジェラルド(1896-1940)はミネソタ州セントポール生まれの小説家です。第一次世界大戦時に陸軍に入隊したものの、派遣直前に終戦を迎えたため実際に戦地に赴くことはなく、作品では、戦後アメリカの社会風俗を描いた点に特徴があります。1920 年代には南仏やパリを転々とし、ヘミングウェイら同時代の作家たちと交流しました。デビュー作『楽園のこちら側』(1920)で成功を収めますが、華美な生活による浪費から、生活費を補うために雑誌向け短編小説の執筆に追われる生涯を送りました。

代表作の『グレート・ギャツビー』(1925)は、第一次世界大戦後のアメリカを舞台に、青年富豪ギャツビーの栄光と破滅を、隣家の青年ニックの視点で描いた作品です。貧しい出自のギャツビーは、戦時中に恋仲だったデイジーを忘れられず、密輸によって富を築き、別の男と結婚した彼女の対岸に豪邸を構えます。一度は願いが成就したかにみえましたが、ギャツビーはデイジーのエゴイズムの犠牲となって孤独な死を迎えます。本作は 1920 年代のアメリカにおいて、「アメリカン・ドリーム」がいかに歪められ崩壊していくかを描いた作品として評価されています。

F. Scott Fitzgerald (1896-1940) was a novelist born in St. Paul, Minnesota. He enlisted in the United States Army during the First World War, but the war ended before he could be deployed overseas, with his work later coming to be distinguished by its portrayal of American society and manners in the postwar era. In the 1920s he lived intermittently in the south of France and in Paris, associating with contemporaries such as Ernest Hemingway. He achieved early success with his debut novel *This Side of Paradise* (1920). However, because of extravagant living and financial difficulties, he spent much of his life writing short stories for magazines to supplement his income.

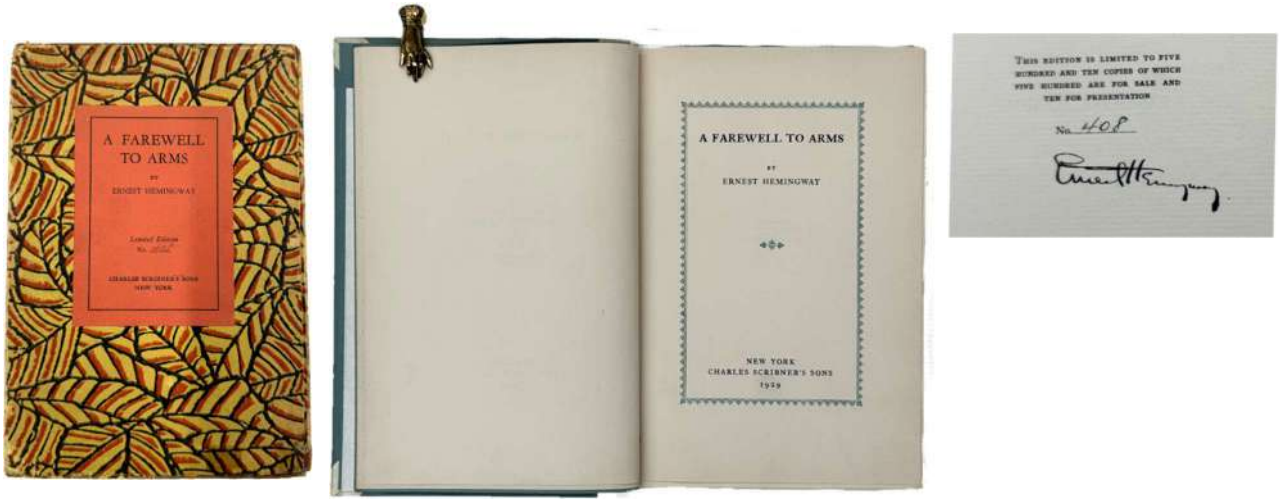
His best-known work, *The Great Gatsby* (1925), is set in the United States after the First World War and depicts the rise and fall of the young millionaire Jay Gatsby through the perspective of his neighbor, Nick Carraway. Born into poverty, Gatsby cannot forget Daisy, with whom he fell in love during the war. He amasses wealth through bootlegging and purchases a mansion across the bay from her home, though she has married another man. For a brief time, his dream appears within reach, yet he ultimately becomes a victim of Daisy's selfishness and meets a lonely death. The novel is widely regarded as a powerful portrayal of the distortion and collapse of the American Dream in the 1920s.

HEMINGWAY, Ernest Miller

A farewell to arms.

New York, 1929.

ヘミングウェイ『武器よさらば』



ヘミングウェイ(1899-1961)はイリノイ州オークパークに生まれた小説家です。医師である父のもとで釣りや狩猟に親しみ、音楽や絵画を愛した母の影響を受けて育ちました。高校卒業後、大新聞「カンザスシティ・スター」紙の記者となり、この時期に培われた簡潔で無駄のない文体は後年の特色となりました

1918 年には赤十字要員としてイタリア戦線に参加しますが、このときヘミングウェイは重傷を負い、人生観を大きく変える死の体験をします。加えて、入院先のミラノの病院で看護師アグネス・フォン・クロウスキーとの恋愛を経験し、これらを題材として『武器よさらば』(1929)を執筆しました。物語は、第一次世界大戦時のイタリアとスイスを背景に、イタリア軍の衛生輸送隊に志願したアメリカ青年フレデリック・ヘンリーと、イギリス人看護師キャサリン・バークリーとの悲恋を中心に展開され、「現代版ロミオとジュリエット」とも称されます。感傷を抑えたハードボイルドな文体で戦争の不条理と人間の孤独を描き、戦争文学の傑作として評価され、本作によってヘミングウェイは確固たる作家的地位を築きました。

本書は 510 部の限定版で、ヘミングウェイの署名入りであり、背表紙には羊皮紙が使われています。

Ernest Hemingway (1899-1961) was a novelist born in Oak Park, Illinois. Raised by a physician father who introduced him to fishing and hunting, and a mother who loved music and painting, he grew up amid both outdoor pursuits and artistic influences. After graduating from high school, he became a reporter for the *Kansas City Star*, where he developed the concise and spare prose style that later became his hallmark.

In 1918 he joined the Italian front as a Red Cross ambulance driver. Severely wounded, he underwent a near-death experience that profoundly shaped his outlook on life. During his hospitalization in Milan, he fell in love with the nurse Agnes von Kurowsky. These experiences later formed the basis of *A Farewell to Arms* (1929). Set in Italy and Switzerland during the First World War, the novel centers on the tragic love between Frederic Henry, an American who volunteers for the Italian army ambulance corps, and Catherine Barkley, a British nurse. Often described as a modern *Romeo and Juliet*, the work portrays the absurdity of war and the solitude of the individual in a restrained and unsentimental style. Widely regarded as a masterpiece of war literature, it established Hemingway's reputation as a major writer.

This edition is one of 510 limited copies, signed by the author, and features a vellum spine.

HEMINGWAY, Ernest Miller

For whom the bell tolls.

New York, 1940.

ヘミングウェイ『誰がために鐘は鳴る』



『誰がために鐘は鳴る』は 1940 年に発表されたヘミングウェイの代表的な長編小説の一つで、スペイン内乱を背景に、アメリカ青年の英雄的な死と灼熱的な恋を描いた作品です。政府軍(反ファシスト軍)に参加するアメリカ人青年ロバート・ジョーダンは、戦略上重要な橋梁爆破という任務を与えられ、山中で活動するゲリラに協力を求めます。そこでジョーダンは、ファシストに両親を殺され、自身も深い傷を負った過去を持つマリアと出会い、わずか 3 日間の激しい恋に落ちます。しかし、連絡の不備によって作戦が無駄になったのを知りながらジョーダンは爆破を決行し、重傷を負いながらマリアと仲間を逃がして自らは死に臨みます。

本作では全体のために個人を犠牲にする行為を称揚し、ヘミングウェイの個人主義的な従来の作風からの変化を示しています。題名はイギリスの詩人・聖職者であるジョン・ダンの説教に由来し、「個人は人類の一部であり、他の人の弔鐘はあなたのためにも鳴っている」という意味を有しています。

For Whom the Bell Tolls (1940) is one of Ernest Hemingway's best-known novels. Set against the background of the Spanish Civil War, it portrays the heroic death and passionate love of a young American. Robert Jordan, an American who joins the Republican forces, is assigned the strategically vital mission of blowing up a bridge and seeks the cooperation of a guerrilla band operating in the mountains. There he meets Maria, whose parents were killed by Fascists and who herself bears deep emotional scars. During the brief span of three days, they fall intensely in love. Although Jordan learns that the operation has been rendered futile by failures in communication, he nevertheless carries out the mission. Gravely wounded, he enables Maria and his comrades to escape while he himself prepares for his final stand.

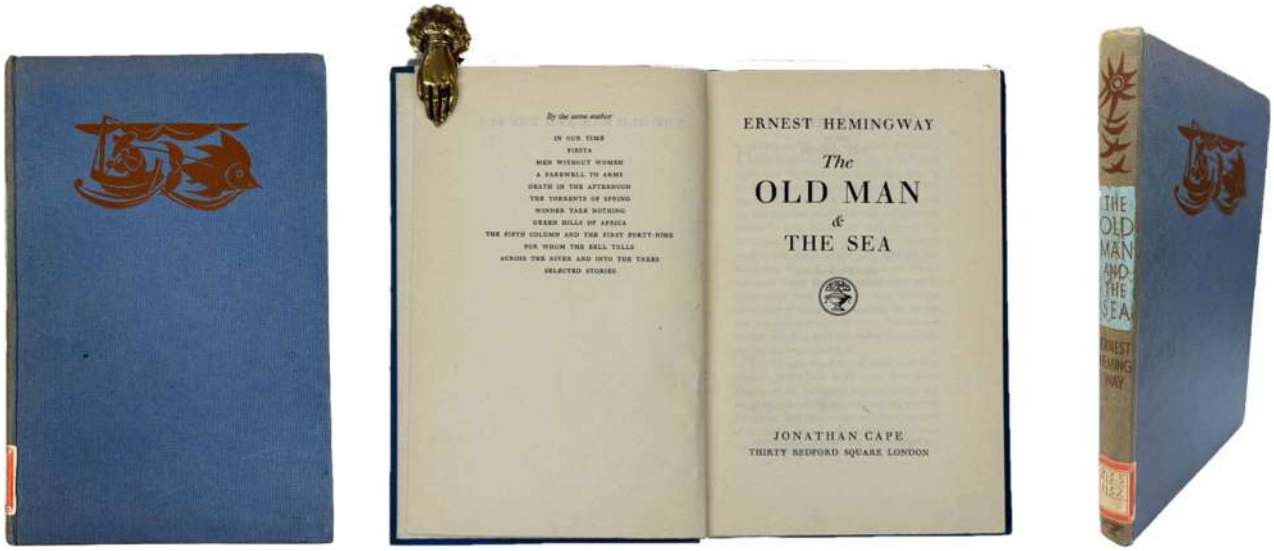
In this work, the sacrifice of the individual for the sake of the whole is affirmed, marking a shift from Hemingway's earlier emphasis on individualism. The title derives from a sermon by the English poet and cleric John Donne and expresses the idea that each person is part of humanity, and that the funeral bell tolling for another also tolls for oneself.

HEMINGWAY, Ernest Miller

The old man and the sea.

London, 1952.

ヘミングウェイ『老人と海』



『老人と海』は、1952 年に刊行されたヘミングウェイの後期の中編小説です。1 匹も釣れない日が 84 日間も続き、不運と見なされていたキューバの老漁夫サンチャゴは、ただひとり小舟でメキシコ湾流へ漕ぎ出します。やがて巨大なマカジキを釣り針に掛けますが、大魚は姿を見せぬまま船を引き回し、老人は知力と体力を尽くして闘ううちに大魚に敬意と友愛を抱くようになります。3 日 2 晩の死闘の末に仕留めて帰途につくものの、船縁に縛り付けた大魚は次々とサメに襲われ、港に着いた時には骨だけが残っていました。この絶望的な闘いのなかで老人は「打ちのめされても敗れない」人間の尊厳を見せており、辺境の大自然と闘う孤独な男の姿はアメリカ文学における英雄像を象徴しています。

ヘミングウェイは 1950 年に発表した前作『河を渡って木立の中へ』では不評を買いましたが、本作によって作家としての力量をあらためて世に示し、ついには 1954 年にノーベル文学賞を受賞するに至りました。

The Old Man and the Sea is a novella by Ernest Hemingway, published in 1952. Santiago, an aged Cuban fisherman regarded as unlucky after eighty-four consecutive days without a catch, sets out alone in a small skiff into the Gulf Stream. He soon hooks an enormous marlin, which tows the boat far out to sea without revealing itself. As he struggles with all his strength and skill, the old man comes to feel respect and even fellowship for the great fish. After a relentless battle lasting three days and two nights, he finally subdues and secures the fish and turns homeward. Yet the marlin, lashed to the side of the boat, is repeatedly attacked by sharks, leaving only its skeleton by the time Santiago reaches the harbor. In this desperate struggle, the old man embodies the dignity of one who “may be destroyed but not defeated,” and his solitary contest with the vast forces of nature has come to symbolize the heroic ideal in American literature.

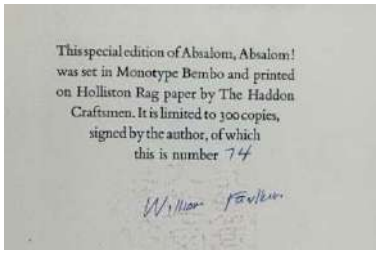
Hemingway’s previous novel, *Across the River and Into the Trees* (1950), had received a largely unfavorable reception. With *The Old Man and the Sea*, however, he reaffirmed his stature as a writer, and in 1954 he was awarded the Nobel Prize in Literature.

FAULKNER, William Cuthbert

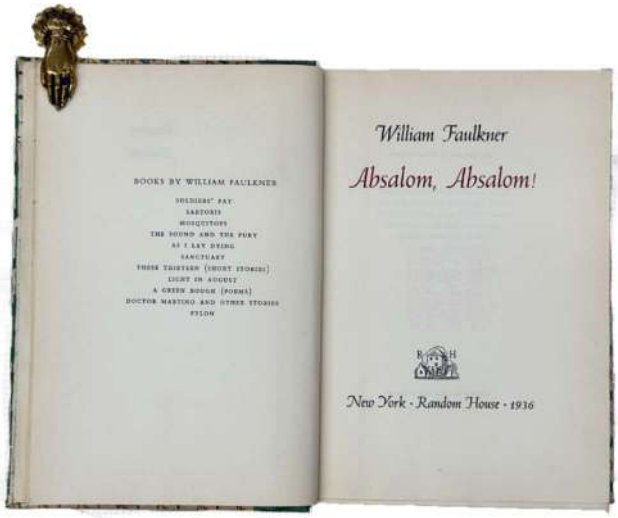
Absalom, Absalom!

New York, 1936.

フォークナー『アブサロム、アブサロム！』


This special edition of Absalom, Absalom!
was set in Monotype Bembo and printed
on Holliston Rag paper by The Haddon
Craftsmen. It is limited to 300 copies,
signed by the author, of which
this is number 74

William Faulkner


BOOKS BY WILLIAM FAULKNER

SOLDIERS' PAY
SARTORIS
MOSQUITOES
THE SOUND AND THE FURY
AS I LAY DYING
SANCTUARY
THESE THIRTEEN (SHORT STORIES)
LIGHT IN AUGUST
A GREEN BOUGH (POEMS)
DOCTOR MARTINO AND OTHER STORIES
PYLON

William Faulkner

Absalom, Absalom!

New York · Random House · 1936



フォークナー(1897-1962)は、ミシシッピ州生まれの小説家です。高校を中退するも文学に傾倒し、第一次世界大戦後は、創作に専念します。

『アブサロム、アブサロム！』(1936)は、アメリカ南部の歴史と罪を描いた悲劇小説です。物語の中心人物は、貧しい出自から名門当主へと成り上がったトマス・サトペン。南部に移住し築いた大農園で王朝的家系を作ろうとしますが、その野心は人種差別、血統への執着などによって内面から崩壊していきます。物語は複数の語り手によって断片的に再構成され、事実が曖昧なまま提示されるのが特徴。読者は錯綜した過去・現在の断片をつなぎ合わせながら、奴隷制と人種差別について考えさせられます。なお、題名は旧約聖書のアブサロム(父ダビデに反逆した息子)に由来し、父と子、血統と反逆、破滅の宿命を象徴しています。

他にフォークナーは『響きと怒り』(1929)、『八月の光』(1932)などで人間の葛藤や道徳的苦悩を掘り下げ、地域的素材を普遍的悲劇へと高めました。アメリカ文学への貢献が評価され、1949 年にノーベル文学賞を受賞。国民的な作家として知られます。

本書は限定 300 部のうちの 74 番で、フォークナーによる自筆署名入りです。

William Faulkner (1897-1962) was a novelist born in Mississippi. Although he left high school, he remained devoted to literature. After the First World War, he dedicated himself to writing.

Absalom, Absalom! (1936) is a tragic novel depicting the history and guilt of the American South. The central figure is Thomas Sutpen, who rises from poverty to become the patriarch of a prominent family. After settling in the South, he seeks to establish a dynastic lineage on his vast plantation, yet his ambition ultimately collapses from within, undermined by racism and an obsessive fixation on bloodline. The narrative is characterized by the absence of a single authoritative voice; instead, multiple narrators reconstruct the story in fragmentary form, presenting events with deliberate ambiguity. As readers piece together the intertwined fragments of past and present, they are compelled to confront the legacy of slavery and racial discrimination. The title derives from Absalom in the Old Testament, the son who rebelled against his father David, symbolizing themes of father and son, lineage and rebellion, and an inescapable destiny of ruin.

In other major works such as *The Sound and the Fury* (1929) and *Light in August* (1932), Faulkner likewise explored human conflict and moral anguish, elevating regional subjects into universal tragedy. In recognition of his contribution to American literature, he was awarded the Nobel Prize in Literature in 1949 and is regarded as a major national writer.

This volume is number 74 of a limited edition of 300 copies and bears Faulkner's autograph.

MITCHELL, Margaret

Gone with the wind.

New York, 1936.

ミッチェル『風と共に去りぬ』



ミッチェル(1900-1949)はジョージア州アトランタ生まれの女流作家で、幼少期から親族が語る南北戦争の歴史に関心を寄せていたといわれます。医師を志して大学に進学しますが、母の急逝により退学。その後「アトランタ・ジャーナル」紙の新聞記者として働くも、足を痛めたことを機に辞職し、創作活動を始めました。

『風と共に去りぬ』は、ミッチェルが10年をかけて執筆し、1936年に発表した長編小説です。南北戦争前後のジョージア州アトランタを舞台に、勝ち気で強い意志を持つヒロイン、スカーレット・オハラの生き様を描いています。南部の大農園に生まれ育った彼女は、戦争による社会の崩壊や没落、夫との死別といった数々の苦難に直面しながらも、たくましく生き抜いていく姿を見せます。本作は出版当年に100万部を超える大ベストセラーとなり、さらに映画化によって世界的名作として知られるようになりました。題名は、南北戦争という「風」と共に、栄華を誇った南部白人社会の文化や価値観が失われたことを象徴しています。

なお、ミッチェルが世に発表した作品は本作のみで、1949年に交通事故でこの世を去りました。しかし、1995年に未発表作品『ロスト・レイセン』(1916)が、知人宅から発見されたことが明らかとなりました。

Margaret Mitchell (1900-1949) was a writer born in Atlanta, Georgia. From an early age she developed an interest in the history of the American Civil War through stories told by her relatives. She entered college intending to become a physician but withdrew following the sudden death of her mother. She later worked as a reporter for the *Atlanta Journal*, resigning due to an ankle injury and subsequently turning to fiction.

Gone with the Wind (1936) is a novel that Mitchell spent ten years writing. Set in Atlanta, Georgia, before and after the Civil War, it portrays the life of the strong-willed and determined heroine Scarlett O'Hara. Born and raised on a Southern plantation, she confronts numerous hardships, including the collapse of society brought about by war, the decline of her family's fortunes, and the death of her husband, yet she survives with remarkable resilience. The novel became an extraordinary bestseller in the year of its publication, exceeding one million copies in sales, and later achieved worldwide renown through its film adaptation. The title symbolizes the passing of the culture and values of the once prosperous white Southern society, swept away like the wind by the Civil War.

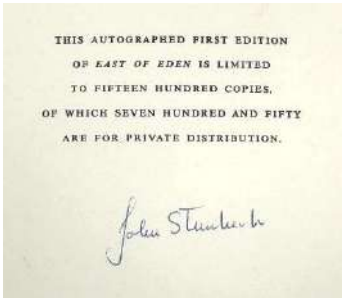
The only work Mitchell published during her lifetime was this novel. She died in 1949 as the result of a traffic accident. In 1995, however, an unpublished work, *Lost Laysen* (1916), was discovered in the home of an acquaintance.

STEINBECK, John Ernst

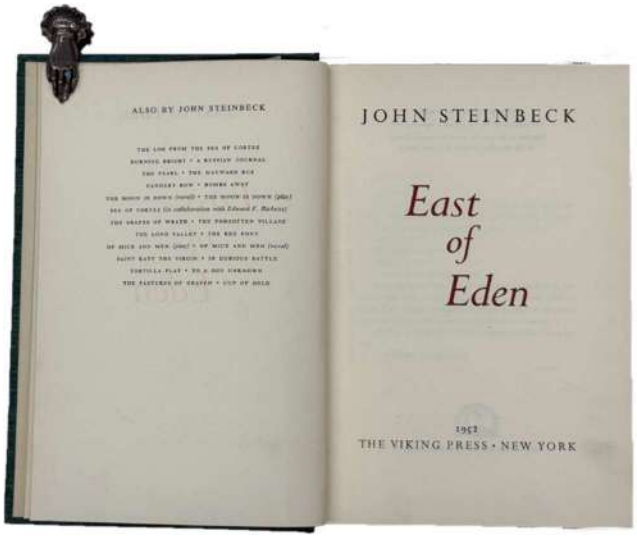
East of Eden.

New York, 1952.

スタインベック『エデンの東』


THIS AUTOGRAPHED FIRST EDITION
OF *EAST OF EDEN* IS LIMITED
TO FIFTEEN HUNDRED COPIES,
OF WHICH SEVEN HUNDRED AND FIFTY
ARE FOR PRIVATE DISTRIBUTION.

John Steinbeck


ALSO BY JOHN STEINBECK

JOHN STEINBECK

East of Eden

1952
THE VIKING PRESS · NEW YORK



スタインベック(1902-1968)はカリフォルニア州サリーナス生まれの小説家です。スタンフォード大学を在学 5 年で中退した後、記者やレンガ運びなど、様々な仕事を経験しながら執筆活動を始めました。アーサー王物語を下敷きにしてカリフォルニアのパイサーノと呼ばれるメキシコ系の人々の生活を描いた『トーティヤ平』(1935)で注目を集め、1930 年代の不況を背景に貧農の苦難を描いた『怒りの葡萄』(1939)ではベストセラーを記録しました。1962 年にはノーベル文学賞を受賞しています。

『エデンの東』(1952)は、南北戦争後から第一次世界大戦までのカリフォルニアを舞台に、トラスク家とハミルトン家という 2 つの家族の 3 代にわたる歴史を描いた長編小説です。旧約聖書『創世記』のカインとアベルの物語をモチーフとし、善と悪、罪と救いというテーマに向き合っています。本作では人間が生まれながらに背負っている「原罪」を運命とするのではなく、人間には自由意志があり、自ら善を選び取る力があるという新解釈を示しています。その人間観は多くの読者の共感を呼び、エリア・カザンによって映画化もされました。

本書はスタインベックの署名入りです。

John Steinbeck (1902-1968) was a novelist born in Salinas, California. Having left Stanford University after five years of study, he began writing while supporting himself through various occupations, including work as a reporter and a bricklayer. He first gained attention with *Tortilla Flat* (1935), a novel that draws on Arthurian legend to portray the lives of paisanos of Mexican descent in California. *The Grapes of Wrath* (1939), set against the background of the Great Depression and depicting the hardships of impoverished farmers, became a bestseller. He was awarded the Nobel Prize in Literature in 1962.

East of Eden (1952) is a novel set in California from the period after the Civil War to the First World War, tracing three generations of two families, the Trasks and the Hamiltons. Inspired by the story of Cain and Abel in the Book of Genesis, it confronts themes of good and evil, sin and redemption. The novel does not present original sin as an inescapable fate but instead offers a new interpretation, affirming that human beings possess free will and the capacity to choose good for themselves. This view of humanity resonated with many readers, and the work was later adapted into a film by Elia Kazan.

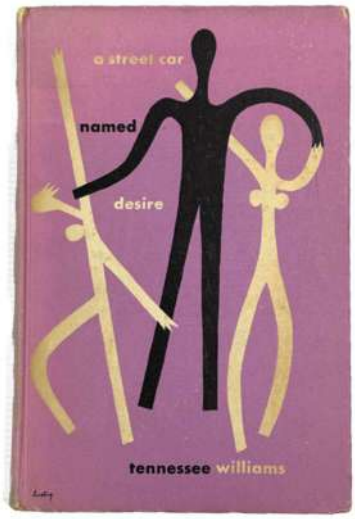
This copy bears Steinbeck's signature.

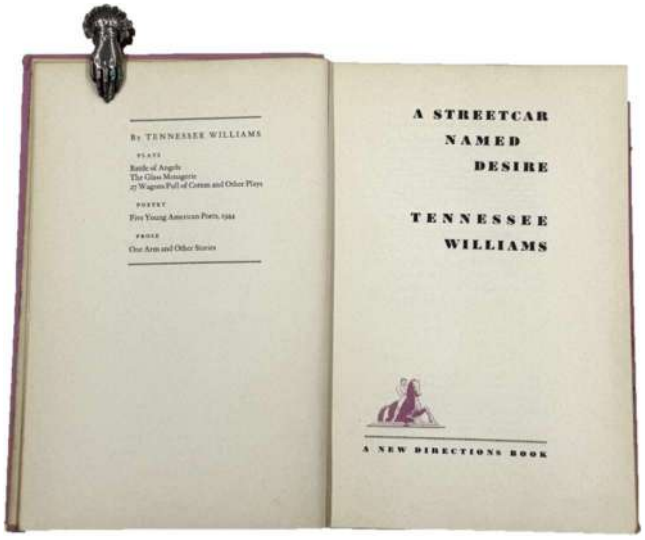
WILLIAMS, Tennessee

A streetcar named Desire.

New York, 1947.

ウィリアムズ『欲望という名の電車』





ウィリアムズ(1911-1983)はミシシッピ州コロンバスに生まれた、第二次世界大戦後のアメリカ演劇を代表する劇作家です。7 歳の時にミズーリ州セントルイスへ移住し、南部の特権的な生活から北部の中流以下の生活へと移ったこの経験は、彼の作品における没落や喪失の主題に深く影響しました。

不況時のセントルイスを舞台に家庭崩壊を描いた『ガラスの動物園』(1945)で高い評価を受け、続く『欲望という名の電車』(1947)によって劇作家の地位を確立しました。

本作は、アメリカ南部の没落した名家の娘ブランチが、妹夫婦の住むニューオーリンズを訪れ、粗野で現実主義的な義弟スタンリーとの対立の中で精神を崩壊させていく過程を描いています。題名は実在したニューオーリンズの路面電車に由来しており、作中でブランチは「欲望」という名の電車に乗り、「墓場」という電車に乗り換え、六つ目の角の「極楽」で下車して妹の家にたどり着きます。この経路は、人間が欲望に突き動かされ、破滅を経て行き着く運命を象徴しています。

Tennessee Williams (1911-1983) was a playwright born in Columbus, Mississippi, and a leading figure in American drama after the Second World War. At the age of seven he moved to St. Louis, Missouri. The transition from a privileged Southern upbringing to a lower middle-class life in the North profoundly influenced the recurring themes of decline and loss in his works. He achieved critical acclaim with *The Glass Menagerie* (1945), which depicts the disintegration of a family set in Depression-era St. Louis. He subsequently established his reputation as a major dramatist with *A Streetcar Named Desire* (1947).

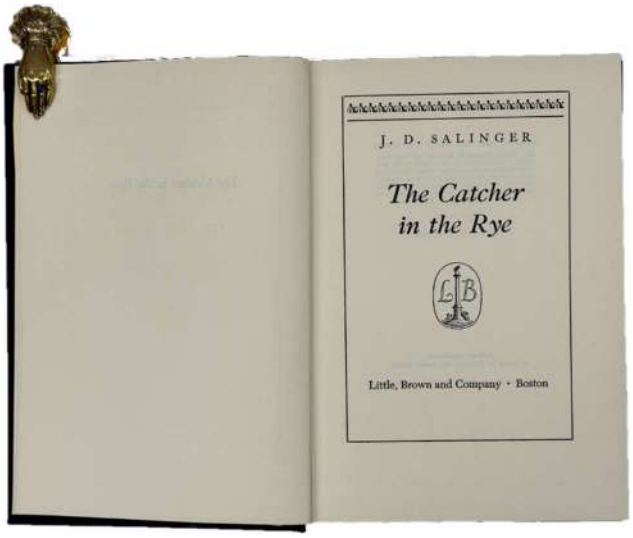
The play centers on Blanche DuBois, the daughter of a faded Southern family in decline. During her stay with her sister and brother-in-law in New Orleans, her conflict with the coarse and pragmatic Stanley Kowalski leads to her gradual mental breakdown. The title derives from an actual streetcar line in New Orleans. In the play, Blanche rides a streetcar named Desire, transfers to one called Cemeteries, and arrives at Elysian Fields (meaning Paradise), where her sister lives. This route symbolizes the course by which human beings, driven by desire, pass through destruction toward their inevitable doom.

SALINGER, Jerome David

The catcher in the rye.

Boston, 1951.

サリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』



サリンジャー(1919-2010)はニューヨーク生まれの小説家です。第二次世界大戦では志願兵として従軍しながら創作活動を行い、いくつかの雑誌で短編を発表しました。終戦後は主に「ニューヨーカー」誌で作品を発表し、1951 年刊行の中編小説『ライ麦畑でつかまえて』によって一躍注目を集めました。

本作は、成績不調で退学処分を受けた 16 歳のホールデンが、故郷ニューヨークをさまよう数日間を一人称で描いた物語です。彼は出会う大人たちの多くが偽善的な「インチキ(phony)」に染まっていると感じ、強い孤独と嫌悪を抱きます。しかし一方で、心の拠り所である妹フィービーに「ライ麦畑で遊んでいて崖から落ちそうになる子供たちをつかまえる存在になりたい」と語る姿には、純粋さを守ろうとする切実な願いがにじみます。思春期の不安や純粋さへの希求が率直な語り口で描かれた本作は、当時の若者の共感を呼び、戦後アメリカ文学を代表する青春小説となりました。

サリンジャーは本作で注目を集めたものの、1953 年にニューヨークを離れて公の場から退き、1965 年に発表した『ハプワース 16　1924』以降は新作を公表しないまま、隠遁生活を送りました。

J. D. Salinger (1919-2010) was a novelist born in New York. During the Second World War he served as a soldier while continuing to write, publishing several short stories in magazines. After the war he contributed primarily to *The New Yorker*, and in 1951 he rose to prominence with the publication of the novel *The Catcher in the Rye.*

The novel is narrated in the first person by Holden Caulfield, a sixteen-year-old boy. After being expelled for poor academic performance, he wanders through New York for several days. Perceiving many of the adults he encounters as hypocritical and “phony,” he is filled with profound loneliness and disgust. Yet in his confession to his beloved sister Phoebe that he wishes to stand in a field of rye and catch children before they fall from a cliff, one senses his earnest desire to preserve innocence. With its candid portrayal of adolescent anxiety and longing for purity, the novel resonated deeply with young readers and came to be regarded as a defining coming-of-age work of postwar American literature.

Although Salinger achieved immediate fame with this work, he left New York in 1953 and withdrew from public life. After publishing *Hapworth 16, 1924* (1965), he released no further works and lived in seclusion thereafter.

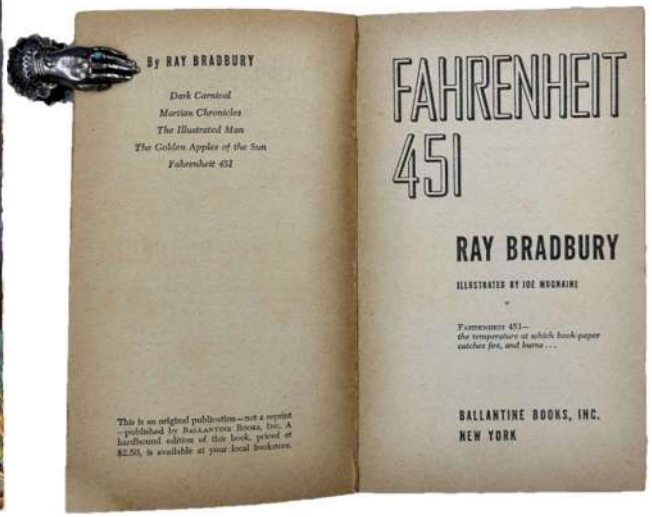
BRADBURY, Ray

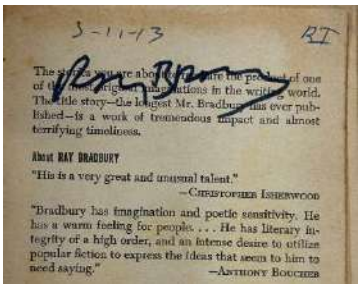
Fahrenheit 451.

New York, 1953.

ブラッドベリ『華氏 451 度』







ブラッドベリ(1920-2012)はイリノイ州出身の作家です。読書家として育ち、高校卒業後は金銭的事情で大学進学はしなかったものの、公共図書館に通って作家としての素養を深めました。

代表作『華氏 451 度』(1953)は、本が禁止された社会を描いた近未来小説です。題名は紙が自然発火する温度に由来します。主人公は「ファイアマン」ガイ・モンターグで、その職務は火を消すことではなく、発見された本を焼き払うこと。この社会で、人々はテレビやラジオが流す刺激的で空虚な「幸福」を享受しており、知性の象徴である本は社会の安寧を乱す有害なものとして禁止されていました。職務に忠実だったモンターグですが、隣人との出会いや本と共に焼死を選んだ老女の姿をきっかけに、自身の使命と体制に深い疑念を抱き始めます。本作では、大戦下の焚書や冷戦下の検閲・全体主義への批判、そして大衆が思考を放棄し、娯楽に溺れることで知性が自滅していく「内なる危機」が描かれました。現代の情報過多や思考停止への警鐘としても色褪せない作品です。

ブラッドベリは他に『火星年代記』(1950)などを書き、アメリカ SF 小説の先駆者である一方、詩や劇作も執筆。H・メルヴィル原作の『白鯨』1952 年版映画の脚本でも知られます。

本書はブラッドベリによる署名入りです。

Ray Bradbury (1920-2012) was a writer from Illinois. He did not attend university for financial reasons but instead educated himself through public libraries after graduating from high school.

His best-known work, *Fahrenheit 451* (1953), is a novel set in the near future that depicts a society in which books are banned. The title refers to the temperature at which paper ignites spontaneously. The protagonist, Guy Montag, is a "fireman" whose duty is not to extinguish fires but to burn confiscated books. In this society, people are immersed in the stimulating yet hollow "happiness" broadcast by television and radio, while books, as symbols of intellect, are prohibited as threats to social order. Though initially loyal to his profession, Montag begins to question his mission and the system itself after meeting a young neighbor and witnessing an old woman who chooses to die with her books, sharing their fate. The novel reflects the book burnings of the Second World War and the censorship and totalitarianism of the Cold War. At the same time, it portrays an internal crisis in which critical thought gradually declines as the masses abandon reflection and surrender to entertainment. The work remains a powerful warning against information overload and a culture of passive entertainment.

Bradbury also authored works such as *The Martian Chronicles* (1950), establishing himself as a pioneer of American science fiction, while writing poetry and plays. He is known as the screenwriter of the 1956 film adaptation of *Moby Dick*.

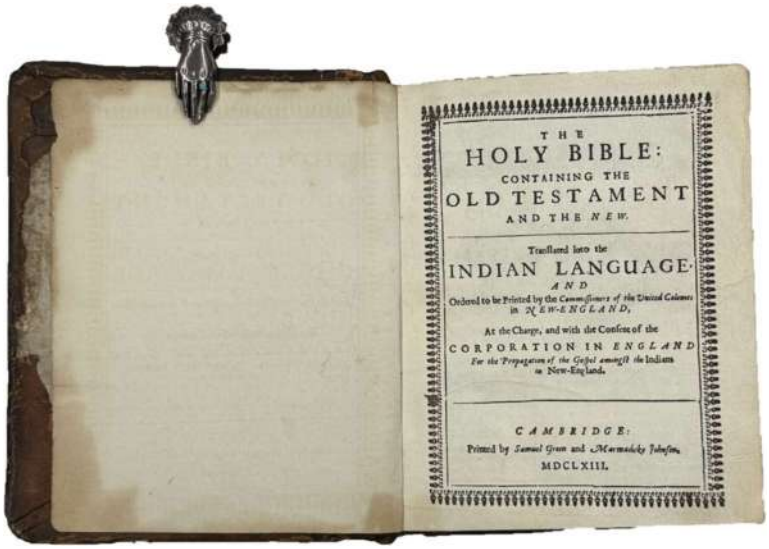
This copy bears Bradbury's autograph signature.

ELIOT, John

The Holy Bible : containing the Old Testament and the New.

Cambridge, 1663.

エリオット『聖書』


THE
HOLY BIBLE:
CONTAINING THE
OLD TESTAMENT
AND THE NEW.

Translated into the
INDIAN LANGUAGE.
AND
Ordered to be Printed by the Commissioners of the United Colonies in NEW-ENGLAND,

At the Charge, and with the Consent of the
CORPORATION IN ENGLAND
For the Propagation of the Gospel amongst the Indians in New-England.

CAMBRIDGE:
Printed by Samuel Green and Marmaduke Johnson,
MDCLXIII.

*"The Holy Bible : Containing the Old Testament and the New."*は、イングランド出身のピューリタン系宣教師ジョン・エリオット(1604-1690)が、ニューイングランドで先住民へのキリスト教布教を目的として 1663 年に翻訳、刊行した聖書で、一般に『エリオット・インディアン聖書』と呼ばれています。エリオットは英語のジュネーヴ聖書を底本に、アルゴンキン語系マサチューセッツ語へと翻訳しました。印刷は植民地期アメリカの印刷拠点であったマサチューセッツ植民地ケンブリッジで行われ、北米において最初に印刷された完全聖書として知られています。

本書は先住民社会における宣教の歴史を物語る資料であり、植民地期アメリカの印刷史および言語史の双方においても、重要な意義を有しています。なお、このように布教のために作られた聖書は完本で残っているものは少なく、本書は完本ではありますが、かなりの損傷が見られます。

The Holy Bible: Containing the Old Testament and the New (1663) is translated by the English-born Puritan missionary John Eliot (1604-1690) for the purpose of spreading Christianity among Indigenous peoples in New England. It is commonly known as the Eliot Indian Bible. Eliot used the English Geneva Bible as his source text and translated it into the Massachusetts language, which belongs to the Algonquian family. The printing was carried out in Cambridge in the Massachusetts Bay Colony, a major printing center during the colonial period, and the work is recognized as the first complete Bible printed in North America.

This volume stands as a historical record of missionary activity among Indigenous communities and holds notable significance in the history of printing as well as the linguistic history of colonial America. Bibles produced for missionary purposes such as this rarely survive in complete form. This copy, while showing signs of wear, retains all of its pages.

SMITH, John

The generall historie of Virginia, New=England, and the Summer Isles.

London, 1632.

スミス『ヴァージニア史』



『ヴァージニア史』(1624)はイングランド出身の軍人・探検家のスミス(1579 or 1580-1631)が著した、初期北米植民活動の記録です。スミスは 1607 年にヴァージニア植民地へ渡り、同年設立された最初の恒久的入植地ジェームズタウンで 1609 年まで指導者を務め、入植者の統率や先住民との交渉にあたりました。

本書には、ヴァージニアやニューイングランド、バミューダ諸島(サマー・アイルズ)における探検と入植の経過が書かれています。植民地生活の実情や飢餓・対立といった困難、現地の地理・気候・動植物の状況などが報告されるとともに、ポーハタン族をはじめとする先住民社会の構造、交易の実態、言語や風習についても記されています。これらの記述は、当時ヨーロッパにおいて具体像が十分に把握されていなかった北米東部の姿を伝えるものでした。中でも、スミスが先住民に捕らえられ、酋長(しゅうちょう)ポーハタンの娘ポカホンタスに助けられたとする逸話は広く知られています。しかし、この話は十数年後になって初めて詳述されたものであり、同時代の他資料にも裏付けが乏しいため、その史実性については現在も議論が続いています。

John Smith (1579 or 1580-1631), an English soldier and explorer, authored *The Generall Historie of Virginia, New=England, and the Summer Isles* (1624), a seminal record of early English colonization in North America. In 1607, Smith sailed to the Virginia colony and served as a leader at Jamestown, the first permanent English settlement, overseeing settlers and negotiating with Indigenous peoples.

The work describes the exploration and settlement of Virginia, New England, and the Bermuda (the Summer Isles), documenting the hardships of colonial life, the region's geography, climate, flora, and fauna, and Indigenous societies, including the Powhatan people's social structure, trade, language, and customs. These accounts offered readers in Europe one of the earliest concrete images of eastern North America. Among the most widely known episodes described in the work is Smith's capture by Indigenous people and his subsequent rescue by Pocahontas, the daughter of Powhatan. Because the story was first described in detail more than a decade after the alleged event and is supported by few other contemporary sources, the historical accuracy of this episode remains a subject of debate.

LEWIS, Meriwether
CLARK, William

Travels to the source of the Missouri River and across the American Continent to the Pacific Ocean.

London, 1814.

ルイス、クラーク『探検記』



『探検記』は 19 世紀初頭に実施されたアメリカ合衆国初の大陸横断遠征の公式記録で、1814 年に刊行されました。1803 年、第 3 代大統領トーマス・ジェファソン(1743-1826)は、ルイジアナ買収によって獲得した広大な西部領土の実態を調査することを目的に探検隊を組織します。隊長には陸軍大尉ルイス(1774-1809)が任命され、彼の要請で共同指揮官として少尉クラーク(1770-1838)も参加。探検隊は 1804 年から 1806 年にかけてミズーリ川を遡り、ロッキー山脈を越えて太平洋岸へ到達しました。

本書はその遠征の成果をまとめたもので、行程の詳細に加え、各地の地形や河川の流路、動植物の分布、気候条件などを具体的に記録しています。また、遭遇した先住諸部族の生活様式や交易関係、言語や風習についても記述されており、当時ほとんど知られていなかった北米西部の実情を伝えました。この遠征は学術的知見の拡大に寄与するとともに、その後の地図作製や西部開拓政策を進める契機となりました。

Travels to the source of the Missouri River and across the American Continent to the Pacific Ocean (1814) is the official account of the United States' first transcontinental expedition, undertaken in the early nineteenth century. In 1803, President Thomas Jefferson organized the expedition to explore the vast western territories acquired through the Louisiana Purchase. Captain Meriwether Lewis of the U.S. Army was appointed to lead the expedition, and at his request Lieutenant William Clark joined as co-commander. From 1804 to 1806 the party traveled up the Missouri River, crossed the Rocky Mountains, and ultimately reached the Pacific coast.

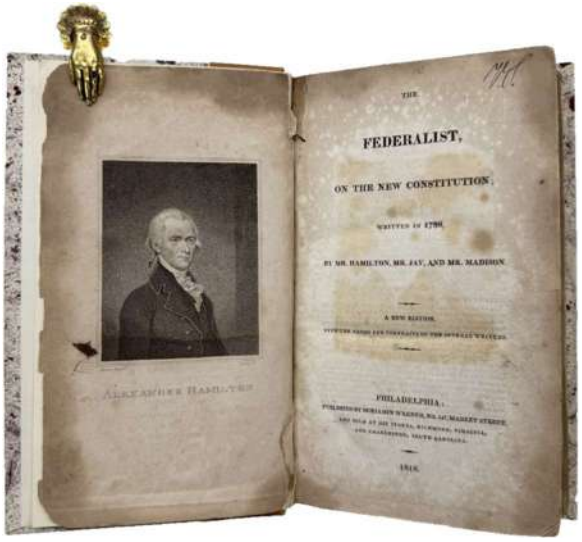
The volume presents the results of that expedition, describing not only the details of the journey but also observations on topography of the regions explored, courses of rivers, the distribution of flora and fauna, and climatic conditions. It also records the lifeways, trade relations, languages, and customs of the Indigenous tribes encountered along the way. Thus, it conveyed valuable information about the western regions of North America, which were then largely unknown. The expedition contributed to the expansion of scientific knowledge and later served as an important foundation for the mapping of the region and the development of policies for westward expansion.

HAMILTON, Alexander [and others]

The federalist, on the new Constitution.

Philadelphia, 1818.

ハミルトンほか『ザ・フェデラリスト』



『ザ・フェデラリスト』は、1787 年から 1788 年にかけて、アメリカ合衆国憲法の批准を促すために執筆された、全 85 篇の政治論文集です。著者は後に初代財務長官となるアレクサンダー・ハミルトン(1755 or 1757-1804)、第 4 代大統領となるジェームズ・マディソン(1751-1836)、初代最高裁判所長官となるジョン・ジェイ(1745-1829)の 3 名で、古代ローマの政治家にちなむ「パブリウス(Publius)」の筆名でニューヨークの新聞に発表しました。

独立直後のアメリカでは、合衆国憲法制定前の憲法である連合規約の下、中央政府の権限が弱く、徴税や軍の編成が困難で州間紛争や経済混乱が生じ、国内反乱も発生していました。そのため、より強固な連邦政府を樹立する必要があるとして、新憲法の構想が打ち出されました。本書では、連邦制の必要性、権力分立と抑制均衡、派閥の問題などが理論的に論じられ、新憲法が自由と秩序をいかに両立させようとしたかが示されています。

単なる批准運動のための論説を超え、近代立憲主義を体系的に論じた古典として高く評価されており、今日に至るまでアメリカ合衆国憲法の解釈や研究における重要な理論的基盤となっています。

The Federalist Papers, originally published under the title *The Federalist*, on the New Constitution, is a collection of eighty-five political essays written between 1787 and 1788 to promote the ratification of the United States Constitution. The authors were Alexander Hamilton, later the first Secretary of the Treasury; James Madison, who later the fourth President of the United States; and John Jay, who later served as the first Chief Justice of the Supreme Court. Publishing under the pseudonym “Publius,” after a statesman of ancient Rome, the essays appeared in newspapers in New York City.

Immediately following the American Revolution, the United States operated under the Articles of Confederation, which granted only limited authority to the central government. As a result, the government struggled to levy taxes, organize a national army, and maintain order, while interstate disputes, economic instability, and domestic uprisings arose. In response, a new constitution was proposed to establish a stronger federal government. In these essays, the authors present theoretical arguments concerning the necessity of federalism, the separation of powers and system of checks and balances, and the problem of factions, demonstrating how the Constitution sought to reconcile liberty with political order.

Valued not merely as advocacy for ratification, *The Federalist* has been long recognized as a classic exposition of modern constitutionalism. It continues to serve as a central theoretical foundation for the interpretation and study of the United States Constitution.

SPARKS, Jared

The writings of George Washington.

Boston, 1834.

スパークス『ジョージ・ワシントン著作集』





スパークス(1789-1866)はアメリカの歴史家で、アメリカにおける歴史学の基盤を築いた人物です。1849 年から1853 年にかけてハーバード大学の学長も務めました。彼が編集した『ジョージ・ワシントン著作集』(1834-1837)は、アメリカ合衆国初代大統領ジョージ・ワシントン(1732-1799)の手紙や通信文、演説文章、メッセージ、さらに公私にわたる文書を収め、ワシントンの没後 35 年を経て刊行されたものです。加えて、スパークスによるワシントンの伝記やポートレート、地図なども収録され、全12 巻から成ります。

なお、スパークスは原文の一部を削除・修正しており、後世の実証的歴史学からは史料改変との批判も受けていますが、それでも本書は 19 世紀アメリカにおけるワシントン像の形成に大きな影響を与え、アメリカ史研究の出発点の一つとされています。

Sparks (1789-1866) was an American historian who played a foundational role in establishing historical scholarship in the United States. From 1849 to 1853, he also served as president of Harvard University.

The work he edited, *The Writings of George Washington* (1834-1837), was published thirty-five years after the death of George Washington (1732-1799), the first President of the United States. Issued in twelve volumes, the edition collects Washington's letters, speeches, messages, and other documents from both his public and private life. It also includes a biography of Washington written by Sparks, together with portraits and maps.

Sparks altered or omitted portions of the original texts, and later scholars have criticized these interventions as alterations of historical sources from the standpoint of modern empirical historiography. Nevertheless, the collection exerted a profound influence on the nineteenth-century American perception of Washington and remains regarded as one of the foundational works of American historical research.

HAWKS, Francis Lister

Narrative of the expedition of an American squadron to the China Seas and Japan.

Washington, 1856.

ホークス『日本遠征記』



本書は、アメリカ海軍軍人ペリー(1794-1858)の２度にわたる日本来航後、議会の要請を受けて刊行された、全３巻から成る公式報告書です。牧師にして教会の歴史書の著者として評判の高かったホークス(1798-1866)が編纂し、ペリーが監修にあたりました。

第１巻は、ペリーの日記をもとにした浦賀までの航海記で、香港や広東、マカオ、上海、琉球などの状況がハイネの挿絵と共に記載されています。またペリーは外交成果だけでなく、既存の日本研究を上回る学術的成果をあげることを意図して、遠征に多くの学者や研究者を随行させました。第２巻はこの学術的成果で構成されており、マローが記述した琉球の地形と農業をはじめ、グリーンによる日本と中国の農業、ジョーンズによる函館付近における鉱山資源、ボイルによる北海道誌、アボットによる日本列島や琉球の観察と通商予測などが記載され、日米和親条約の締結文と関係海域の地図が添付されています。続く第３巻には、海軍従軍牧師かつ天文学者であったジョーンズが調査した天体観測の結果が掲載されています。

Narrative of the expedition of an American squadron to the China Seas and Japan is the official report of the American expedition to Japan led by U.S. Navy officer Matthew C. Perry (1794-1858). Following Perry's two expeditions to Japan, it was published at the request of the United States Congress and issued in three volumes. The work was compiled by Francis Lister Hawks (1798-1866), a clergyman well-known as the author of ecclesiastical histories, while Perry himself supervised the publication.

The first volume presents an account of the voyage to Uraga based on Perry's journals and includes descriptions of Hong Kong, Canton, Macao, Shanghai, and the Ryukyu Islands, accompanied by illustrations by Wilhelm Heine. In addition to diplomatic objectives, Perry sought to achieve scholarly results surpassing earlier studies of Japan and therefore brought numerous scholars and researchers with the expedition. The second volume contains these academic reports, including accounts of the topography and agriculture of the Ryukyu Islands by James Morrow, studies of agriculture in Japan and China by Daniel S. Green, surveys of mineral resources near Hakodate by George Jones, a description of Hokkaido by Junius J. Boyle, and observations on the Japanese archipelago and the Ryukyu Islands together with forecasts concerning trade by Joel Abbot. The volume also includes the text of the Convention of Kanagawa and maps of the surrounding seas. The third volume presents the results of astronomical observations conducted during the expedition by Jones, who served as a naval chaplain and astronomer.

HEINE, Wilhelm

Reise um die Erde nach Japan an Bord der Expeditions-Escadre unter Commodore Matthew Calbraith Perry in den Jahren 1853, 1854, 1855.

Leipzig, 1856.

ハイネ『世界周航 日本への旅：ペリー提督の遠征艦隊に搭乗して』



ハイネ(1827-1885)はドイツのドレスデンで生まれた画家です。ドレスデンの宮廷劇場画家として働いていましたが、1848 年に音楽家リヒャルト・ワーグナーらと共に計画した革命が制圧され、アメリカに亡命しました。アメリカでは速筆のスケッチ画を描く才能が認められて海軍に入り、ペリーの日本遠征に随行することになりました。当時は遠征先の様子を伝える手段としてスケッチ画が重宝されていた時代であり、ハイネが描いたスケッチ画の大部分はペリーの『日本遠征記』の重要な部分を飾って臨場感を盛り上げています。

本書は、ハイネがアメリカへ帰国後、艦内で書いていた手記と『日本遠征記』で採用されなかった絵をもとに、ドイツへ原稿を送りライプツィヒで出版したものです。ハイネは絵だけでなく文章の筆の速さにも定評があり、日本人については終始好意的に「活気に満ちた知性豊かな民族」、「儀式と作法とが生活の重要な部分を占める民族」などと述べ、さらに日本人の態度については「忠実」、「勤勉」という表現を多用しています。

このように、ハイネの日本に寄せる関心は強く、後にドイツに赴きプロイセン政府による日本を含む東アジア遠征にも参加しました。旅行ライターとして 8 冊の著作を残し、そのうち 6 冊は日本に関するものです。

Wilhelm Heine (1827-1885) was a painter born in Dresden, Germany. He worked as a court theatre artist in the city, but after taking part in a revolutionary uprising with Richard Wagner and others in 1848, he fled to the United States when the revolt was suppressed. In America his talent for producing rapid sketch drawings was recognized, and he entered the U.S. Navy, eventually accompanying Matthew C. Perry on the expedition to Japan. At that time sketch drawings were an important means of conveying scenes from distant expeditions, and most of Heine's sketches were used to illustrate Perry's Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan, adding a sense of immediacy to the account.

After returning to the United States, Heine prepared this work from his shipboard diary and from drawings omitted from the official report. The manuscript was sent to Germany and published in Leipzig. Heine was known not only for the speed of his sketches but also for the fluency of his writing. Throughout the work he expressed a favorable impression of the Japanese, describing them as "a lively and intelligent people" and as "a nation in which ceremony and etiquette form an important part of life," and he frequently characterized them as "faithful" and "diligent."

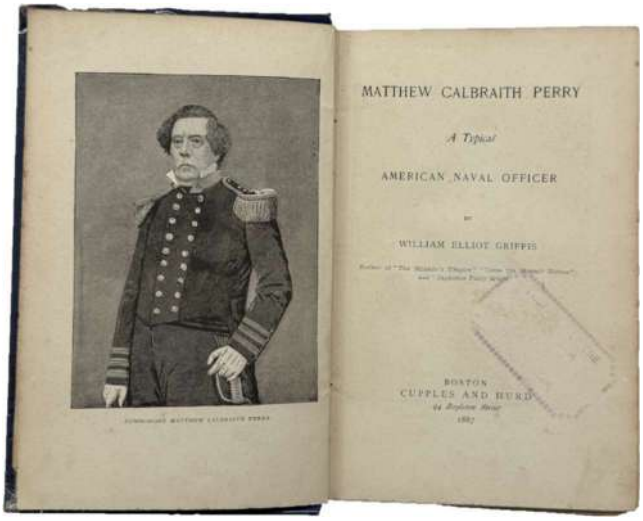
These remarks reflect Heine's strong interest in Japan. He later returned to Germany and participated in an East Asian expedition organized by the Kingdom of Prussia that also included Japan. As a travel writer he produced eight books, six of which concern Japan.

GRIFFIS, William Elliot

Matthew Calbraith Perry.

Boston, 1887.

グリフィス『マシュー・カルブレイス・ペリー』



グリフィス(1843-1928)はペンシルバニア州フィラデルフィアで生まれた人物で、1870 年にアメリカから来日し、福井藩校の明新館で理化学を教えた後、大学南校(のちの東京大学)で教鞭を執りました。帰国後は牧師をしながら作家活動を行い、『皇国』(1876)などの日本研究書を残しています。

本書はペリーが幼少の頃からの記述から始まり、海軍での任務、人柄と業績などを綴った伝記です。序文では、「来日して多くの人達からペリーの業績について尋ねられた。しかし、アメリカ国内では、ペリーの実兄で海軍軍人であったオリバー・ハザード・ペリーの伝記は出版されていたものの、マシュー・ペリーの伝記は書かれておらず、日本人の知的欲求を満たす意味からも伝記の必要性を感じて本書の執筆に着手した」と述べています。グリフィスは、ペリーが日本で行った交渉の様子を『日本遠征記』などで調べ、さらに実際に海軍関係者に会って情報収集し、ペリーを「月並みではなく、アメリカ海軍将校を象徴する人物」であったと称えています。

また、グリフィスの言葉を信じれば、ペリーの没後 29 年を経て初めて書かれた伝記です。これは、ペリーが帰国した時期が、南北戦争に向かう混沌とした世相であったことから、ペリーについての研究が遅れていたものと考えられます。

William Elliot Griffis (1843-1928) was born in Philadelphia, Pennsylvania. Coming to Japan from the United States in 1870, he taught physics and chemistry at Meishinkan, the domain school of the Fukui domain, and later taught at the Daigaku Nankō, the predecessor of the University of Tokyo. After returning to the United States, he served as a clergyman while pursuing a career as a writer, and produced works on Japan such as *The Mikado's Empire* (1876).

This volume is a biography that begins with an account of the childhood of Matthew C. Perry and proceeds to describe his naval career, character, and achievements. In the preface, Griffis explains that during his stay in Japan he was frequently asked about Perry's accomplishments. Yet while a biography of Perry's elder brother, the naval officer Oliver Hazard Perry, had already been published in the United States, no biography of Matthew Perry existed. For this reason, and in order to satisfy the interest of Japanese readers, he undertook the writing of the present work. Griffis consulted sources such as *Narrative of the expedition of an American squadron to the China Seas and Japan* and gathered additional information through interviews with individuals connected to the navy, ultimately portraying Perry not as an ordinary figure but as a typical officer of the United States Navy.

According to Griffis, this work was the first biography of Perry, written twenty-nine years after his death. The delay may be related to the fact that Perry returned to the United States during the turbulent years leading to the American Civil War, when little attention was paid to his career.

Japan expedition press : U. S. steam-frigate "Powhaten".

Shimoda, 1854.

「ジャパン・エクスペディション・プレス」



この片面刷りの新聞は、ペリーが開国交渉のために再び日本に訪れた 1854 年に、9 隻からなる艦隊のうち旗艦「ポーハタン号」の艦内で、乗組員に配布することを目的として印刷されたものです。同年 5 月 1 日、下田に停泊中のときに印刷されたもので、アメリカのフィルモア大統領から皇帝(将軍を指す)に宛てた親書と、オランダ語と英語訳による皇帝から大統領への返書が含まれています。

内容としては、大統領から皇帝に宛てて開国と通商条約の締結を提案し、難破船とその乗組員の保護や、石炭・食糧・水の補給を求めるものでした。それに対し皇帝は、法律で禁じられているため全ての要望には応えられないとしながらも、難破船の保護や石炭等の供給には応じると返答しています。

このような新聞は、残存しているものは極めて少ないと思われますが、当時の艦内機能の多様さや乗組員への情報提供という配慮を物語っています。

This single-sheet newspaper was printed in 1854, when Matthew C. Perry returned to Japan to conduct negotiations for opening Japan to foreign trade. Produced aboard the flagship USS *Powhatan*, one of the nine vessels of the expeditionary fleet, it was distributed among the crew. The sheet was printed on May 1 of that year while the ship was anchored at Shimoda. It contains a letter from Millard Fillmore, President of the United States, addressed to the Tokugawa Shogun, together with the reply from the Emperor to the President, presented in Dutch and in English translation.

In the letter, the President proposes the opening of Japan to foreign trade and the conclusion of a commercial treaty, requesting the protection of shipwrecked vessels and their crews as well as the provision of coal, food, and water. In response, the Shogun states that not all of these requests can be granted because they are prohibited by law, yet agrees to provide protection for shipwrecked sailors and to supply coal and other necessities.

Although only a few examples survive today, this item provides valuable evidence of the wide range of activities carried out aboard the expeditionary vessels and the care taken to keep the crew informed.

『亜国渡来一件記』
Akoku torai ikkenki

[18--].



『亜国渡来一件記』は、1856 年に着任して日米修好通商条約締結の交渉にあたった初代合衆国駐日総領事タウンゼント・ハリス(1804-1878)と幕府が、1857 年から 1858 年にかけて交渉を行った記録が収められたものです。詳しくは、水戸家をはじめ諸大名の幕府宛建白書やハリス一行の接待・交渉の記、京都における中山忠能や諸公卿の建白書、江戸―京都間の連絡折衝、江戸町触から伊勢神宮への祈祷文等が記されています。編者は不明で、また成立年代も明確ではありませんが、1858 年以降に筆写編集されたものと推測ができます。

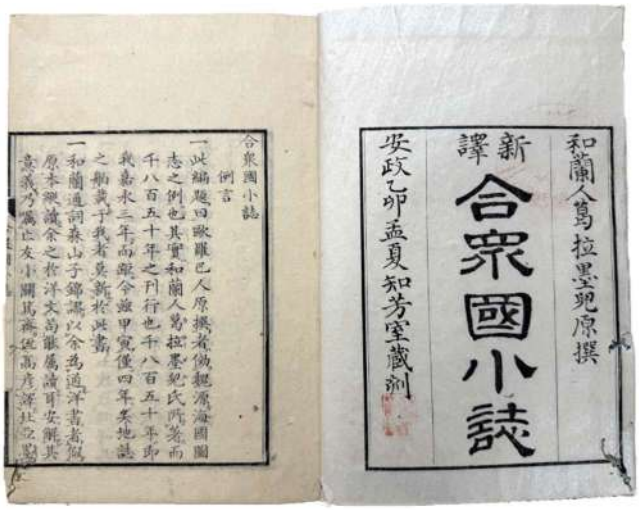
また、世間で歌われた戯歌(ざれうた)なども収録されており、特に「日本を茶かしに来たか蒸気船たつた四はいて夜るも寝さゝす」は、ペリー来航時に詠まれたとされる狂歌の一つとして有名な「泰平の眠りを覚ます上喜撰(じょうきせん)たつた四杯で夜も寝られず」と同じ趣向の歌と考えられます。「4 杯の上喜撰(お茶)」と「4 隻の蒸気船(黒船)」を掛けた歌で、当時の庶民が蒸気船の出現に抱いた驚きや不安をよく伝えています。

Akoku Torai Ikkenki is a record of the negotiations conducted between the Tokugawa shogunate and Townsend Harris (1804-1878), the first United States Consul General to Japan. Harris arrived in 1856 and later negotiated the Treaty of Amity and Commerce between Japan and the United States, known as the Harris Treaty. The volume records discussions held between 1857 and 1858. The work records petitions submitted to the shogunate by the Mito domain and other daimyō, accounts of the reception and negotiations with Harris and his party, memorials presented in Kyoto by Nakayama Tadayasu and other court nobles, communications and negotiations between Edo and Kyoto, and documents ranging from official notices issued in Edo to prayers offered at the Ise Grand Shrine. Although neither the editor nor the exact date of compilation is known, the volume is thought to have been copied and compiled sometime after 1858.

Among its contents are satirical verses that circulated among the populace. One such poem reads: “Have the jōkisens (steamships) come to mock Japan? With only four, they keep us from sleeping at night.” This verse appears to echo the well-known satirical poem said to have been composed at the time of the arrival of Matthew C. Perry: “Jōkisen (tea) awakens us from peaceful slumber; with only four cups, they keep us from sleeping at night.” The poem plays on a pun between jōkisen (上喜撰, “Jōkisen tea”) and jōkisen (蒸気船, “steamships”), and through this wordplay vividly conveys the surprise and anxiety felt by ordinary people at the sudden appearance of steam-powered ships.

カラーメル原撰
小関高彦訳

『新譯合衆國小誌』
Shin'yaku Gasshuhkoku shohshi
東京, 1855.



『新譯合衆國小誌』は、幕末期に編まれたアメリカ合衆国紹介書です。オランダの学者カラーメル(KRAMERS, Jacob, 1802-1869)が 1850 年に刊行した"*Geographisch Statistisch Historisch Handboek*"を原著としており、その内のアメリカ合衆国の部だけを小関高彦が翻訳し、仙台藩の儒者・砲術家であった大槻磐渓(1801-1878)が補訂を施しました。

本書は 2 冊から成り、上巻はアメリカ合衆国全体の地理や歴史、政治等についての総論で、下巻では各州の記述があります。部分訳とはいえ原著が出版されたわずか 4 年後の 1854 年に完成し、翌 1855 年に出版されました。大槻磐渓も冒頭の「例言」において、我が国にもたらされた最新の地誌の翻訳であると言及しています。

また、当時の国内においては、1853 年と 1854 年のペリー来航によって、アメリカに対する関心が大変な高まりを見せていたと思われます。

Shinyaku Gasshūkoku Shoshi (1855), compiled in the late Edo period, is a Japanese introduction to the United States based on Geographisch Statistisch Historisch Handboek (1850) by the Dutch scholar Jacob Kramers (1802-1869). The section concerning the United States was selected and translated by Koseki Takahiko, and the text was revised and supplemented by Ōtsuki Bankei (1801-1878), a Confucian scholar and artillery specialist of the Sendai domain.

The work consists of two volumes: The first volume presents a general account of the geography, history, and political system of the United States as a whole, while the second volume contains descriptions of the individual states. Completed in 1854, merely four years after the publication of the original, the work was published the following year, in 1855. In the preface, Ōtsuki Bankei himself notes that the book represents a translation of the most recent geographical work to have reached Japan.

At the time, domestic interest in the United States had increased greatly in the wake of the arrival of Perry's fleet in 1853 and 1854. The publication of this work reflects the growing interest in the United States within Japan during the final years of the Tokugawa shogunate.

「大日本へ献上貢物品々」墨摺版画
Dainippon e kenjoh mitsugimono shinajina
[1854].



『大日本へ献上貢物品々』は、ペリー(1794-1858)がミラード・フィルモア大統領(1800-1874)に命じられ日本へ持参した品物を記録した版画図です。フィルモア大統領は親書の末尾において、「陛下が幾つかの贈り物を受け取られることを願う。それほど価値のある物ではないが、幾つかは合衆国で作られたものの見本になるものである。また、それらの品々を私たちからの誠実で敬愛をこめた友情のしるしとしたい」という趣旨の文章を記述しています。

この図には、織物類、皮類、酒類、武器類、鏡類、望遠鏡、船の模型さらには生きた鳥類などが描かれていますが、実際には機関車や客車の模型やレール、電信機、柱時計なども持参し、皇帝(将軍を指す)から、和親条約締結のために働いた幕府の役人たちにまで配られるように準備されていたようです。

ホークス(1798-1866)による『日本遠征記』には、「彼ら(役人や労働者たち)は、何時でも持っている書き物をする材料、すなわち桑樹皮製の紙と墨及び毛筆を絶えず取り出して筆記をし、スケッチをした」と記されており、本図はそうした絵が版画化されたものと思われます。

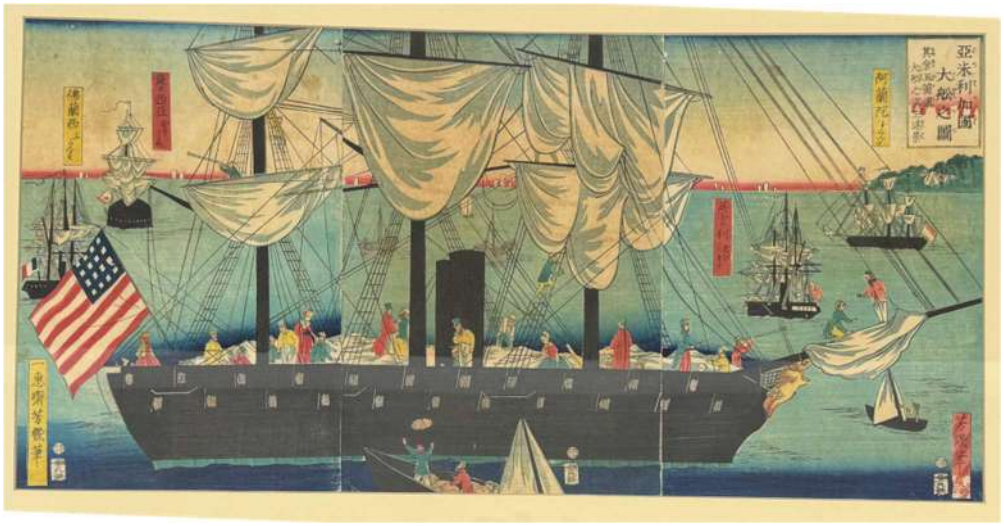
Dainippon e kenjoh mitsugimono shinajina is a monochrome woodblock print recording the gifts brought to Japan by Matthew C. Perry under the direction of Millard Fillmore, President of the United States. In his letter to the Tokugawa shogunate, Fillmore wrote that he hoped His Majesty would accept several presents which, although not of great value, would serve as examples of articles produced in the United States and as tokens of sincere friendship and respect.

The print illustrates a variety of items including textiles, leather goods, wine and spirits, weapons, mirrors, telescopes, ship models, and even live birds. Additional objects were also brought, such as a model locomotive and passenger car with rails, telegraph apparatuses, and clocks. These items were intended not only for the Tokugawa Shogun, but also to be distributed among officials of the Tokugawa shogunate involved in negotiating the Convention of Kanagawa.

In the *Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan*, compiled by Francis L. Hawks, it is noted that Japanese officials and workers frequently took out their writing materials, namely paper made from mulberry bark together with ink and brushes, and continually made notes and sketches. The present print is thought to have been produced as a woodblock reproduction of such drawings.

一惠斎芳幾

「亜米利加国大船之図 其余五箇国大船之写生遠景」
Amerikakoku taisen no zu sonohoka gokakoku taisen no shasei enkei
東京, 1861.



※京都外国語大学会場でのみ展示

本図は、幕末に活躍した浮世絵師・一惠斎芳幾(1833-1904)による 3 枚続の錦絵です。画面中央には星条旗を掲げたアメリカの大型蒸気軍艦を大きく配置し、その周囲の遠景にイギリス・フランス・ロシア・オランダの艦船を描いています。横長の画面を活かした構図は、海上に展開する外国艦隊の威厳を強調し、開国後の国際情勢に対する当時の緊張と関心を視覚的に示しています。題名に「写生遠景」とありますが、厳密な実景記録というよりも、出来事の迫力や象徴性を前面に出した時事錦絵としての性格が強い作品です。

芳幾は歌川国芳(1798-1861)の門人として出発し、師譲りの劇的な構図と誇張的な描写を特色としました。同門には月岡芳年(1839-1892)がおり、ともに国芳門下を代表する存在として幕末浮世絵を支えました。芳幾は武者絵や時事的主題において力量を発揮し、のちには無残絵や新聞錦絵の分野でも活躍しました。

Amerikakoku taisen no zu sonohoka gokakoku taisen no shasei enkei (1861) is a triptych nishiki-e woodblock print designed by the ukiyo-e artist Ikkeisai Yoshiiku (1833-1904), who was active in the late Edo period. Featuring a large American steam warship flying the Stars and Stripes at the center of the composition, the print depicts ships from the United Kingdom, France, Russia, and the Netherlands in the distant background. The horizontally extended format emphasizes the imposing presence of the foreign fleet on the sea and visually conveys the tension and heightened interest in international affairs in Japan following the opening of the country. Although the title includes the phrase “shasei enkei” (literally “sketched distant view”), the print functions less as a strictly realistic record than as a topical nishiki-e highlighting the dramatic and symbolic aspects of the event.

Yoshiiku began his career as a pupil of the renowned ukiyo-e master Utagawa Kuniyoshi (1798-1861) and inherited from his teacher a taste for dramatic compositions and exaggerated visual effects. Another pupil of Kuniyoshi was Tsukioka Yoshitoshi (1839-1892), and both artists became leading representatives of the Kuniyoshi school in the final years of Edo-period ukiyo-e. Yoshiiku excelled particularly in warrior prints and topical subjects, and later became active in genres such as sensational muzan-e, or “cruelty prints,” and illustrated newspaper prints known as shinbun nishiki-e.

AUDUBON, John James

The birds of America.

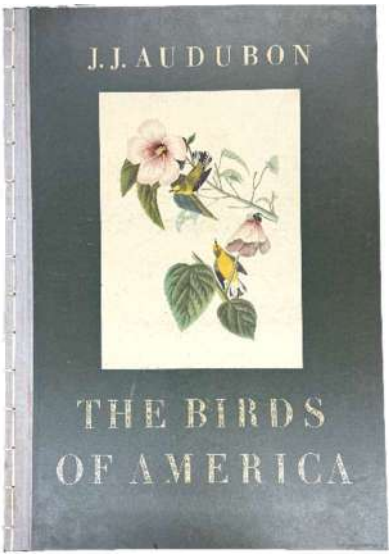
Leipzig, 1972.

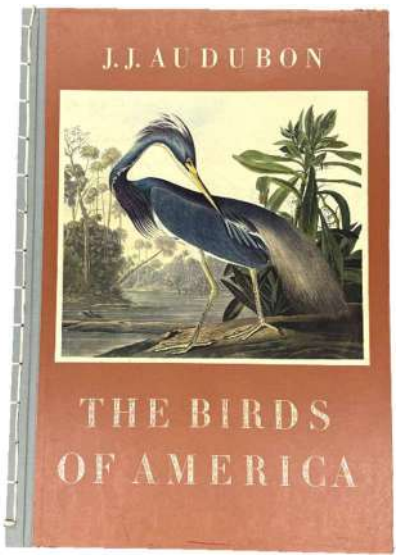
オーデュボン『アメリカの鳥類』





※京都外国語大学会場でのみ展示





『アメリカの鳥類』は、19 世紀アメリカを代表する博物画家・博物学者オーデュボン(1785-1851)によって制作された、鳥類図譜です。1827 年から 1838 年の 12 年にかけて 4 冊から成る分冊形式で刊行された本書は、北米に生息する鳥類をほぼ網羅的に取り上げ、実物大に近い迫力ある姿で描いた点が大きな特徴。「ダブル・エレファント・フォリオ」と呼ばれる大型判で制作され、大きさは約 100×66cm と、書物としては最大級の規模です。現在、完全な形で残る原本は世界的にも数が少なく、その希少性と芸術的価値から、世界で最も高価な書物のうちの一つとしても知られています。

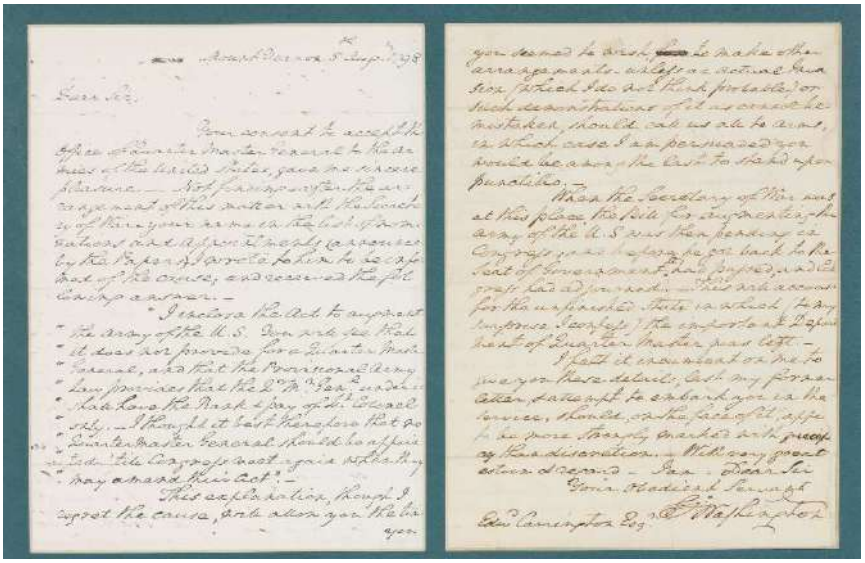
本学が所蔵している『アメリカの鳥類』は 1972 年および 1973 年にドイツ(当時の東ドイツ)で出版されたコロタイプ印刷による選集形式の復刻版です。原本全 4 巻をそのまま復刻したものではなく、計 400 以上ある図版から選定して原版の大きさを再現して 1 冊に収録したもので、1972 年版と 1973 年版では収録されている図版と表紙が異なっています。各版限定 1000 部で、そのうち 500 部は日本の和綴じ式の本として刊行されました。

The Birds of America is an illustrated ornithological work created by John James Audubon (1785-1851), a natural history painter and naturalist who represents nineteenth-century America. Issued in parts between 1827 and 1838 over a period of twelve years and ultimately comprising four volumes, the work is distinguished by its nearly comprehensive treatment of birds inhabiting North America and by its powerful depictions rendered at nearly life size. It was produced in the monumental “double elephant folio” format, measuring approximately 100 by 66 cm, one of the largest formats ever used in bookmaking. Today, only a small number of complete original sets survive worldwide, and because of their rarity and exceptional artistic value they are regarded as among the most expensive books in the world.

This present copy is a selected facsimile published in 1972 and 1973 in East Germany using the collotype printing process. Rather than reproducing the original four-volume set in its entirety, this edition selects from more than four hundred plates and reproduces them in a single volume at approximately the original size. The 1972 and 1973 editions differ in the plates included and in the design of the binding. Each edition was limited to one thousand copies, of which five hundred were issued in traditional Japanese-style stab binding.

WASHINGTON, George

ワシントン
盟友・キャリントンへ宛てた人事の書簡
1798.



ジョージ・ワシントンが盟友キャリントンに宛てて書いたものです。当時、大統領職を退いたワシントンは隠居生活を送っていましたが、アメリカはフランスとの関係悪化により、いわゆる「準戦争」の状態にありました。そのため、当時のアダムズ大統領の任命により、ワシントンは軍制整備や人事に助言する陸軍総司令官として復帰。信頼するキャリントンを陸軍の需品総監に起用する構想を持っていたとみられます。

文中で、その職を引き受けることを事前に承諾してくれたキャリントンの好意を喜びつつも、結果的には起用が議会の制度上の事情で見送られた経緯を丁寧に説明しています。ワシントンは「(フランスからの)本格的な侵略が起こったとしても、あなたは決して形式や体裁にこだわって行動を遅らせるような人ではない」と述べ、キャリントンの忠誠心と覚悟に信頼を寄せています。自ら陸軍長官へ確認した内容を引用して説明するなど、ワシントンの誠実で義理堅い人物像と、国防に対する当時の姿勢を伝える、貴重な資料です。筆跡については、下向きの線に自然な濃淡があるなど羽根ペン特有の強弱が表れ、にじみが少ないことから上質な紙とインクが用いられたと考えられます。

※エドワード・キャリントン(1748-1810)：ヴァージニア州出身の軍人・政治家。独立戦争中にワシントンと知り合い、親友となる。1789 年にワシントンからヴァージニア州の初代連邦保安官に任命され、1791 年まで在職。

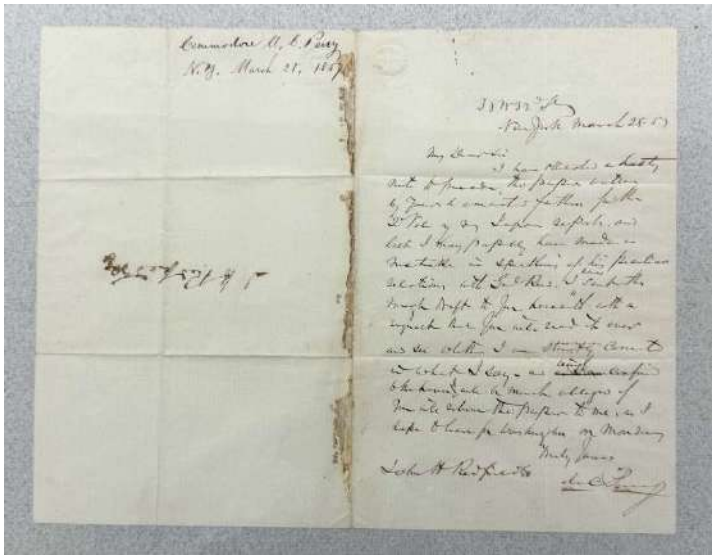
This letter was written by George Washington to his close associate Edward Carrington during the period of the “Quasi-War” with France, following Washington’s retirement from the presidency. Upon being appointed by President John Adams, he resumed public service as Commander-in-Chief of the Army, offering guidance on military organization and appointments. It appears that he contemplated Carrington’s appointment as Quartermaster General.

In the letter, Washington expresses his appreciation for Carrington’s willingness to serve, while explaining that the appointment was set aside owing to congressional circumstances. He nevertheless affirms his confidence in Carrington’s character, writing: “Unless an actual invasion, or such demonstrations of it as cannot be mistaken, should call us all to arms ... I am persuaded you would be among the last to stand upon punctilio.” The remark underscores his conviction that Carrington would not allow considerations of rank or ceremony to delay decisive action in the face of genuine national danger. By referring to his inquiry to the Secretary of War, Washington further demonstrates both his integrity and his strong sense of public duty, while also illuminating contemporary attitudes toward national defense. This document thus stands as a significant historical record. From a material perspective, the handwriting, with its quill-like gradation and minimal ink bleed, suggests materials of superior quality.

*Edward Carrington (1748-1810): A Virginia officer and politician who served in the American Revolutionary War and became a close associate of Washington. Appointed the first United States Marshal for Virginia in 1789, he held the post until 1791.

PERRY, Matthew Calbraith

ペリー
協力者・レッドフィールドの子息へ宛てた書簡
1857.



ペリーが、親交のあった著名な気象学者W・レッドフィールドの息子・ジョンに宛てて書いたものです。ペリーは日本への遠征から帰国後、ホークス編『日本遠征記』(1856)の監修のため、東インド艦隊の航海日誌や気象観測記録・米英船舶の報告を基に、レッドフィールドに学術論文の執筆を依頼していました。それを受けたレッドフィールドは「西太平洋の熱帯性低気圧に関する観測結果」と題する論文を1856年12月に提出するも、翌年2月に急逝。ペリーはその提出された論文を『日本遠征記』第2巻に掲載し、自ら序文を執筆します。その中に故レッドフィールドとその親友・リード海軍少将との交友関係に言及する箇所がありました。記述の正確性を確保するため、1857年3月28日、序文草稿をジョンに送り、内容の確認と訂正を依頼。本文では、病気のため外出できない事情を述べつつ、同封の下書きを厳密に確認のうえ返送してほしいと丁寧に依頼しており、ペリーの誠実さと故人への敬意がうかがえます。なお、線が細くややかすれ気味でインクの濃淡に変化があることから、比較的速い筆致で書かれたとみられますが、行間や字間は一定で乱れは少なく、自制心と優雅さを感じさせます。

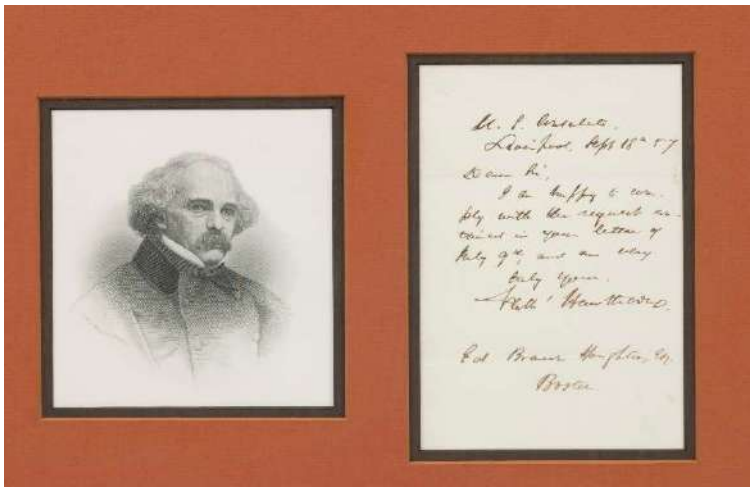
※ウィリアム・レッドフィールド（1789-1857）：1821年に「暴風の回転運動と進行の法則」を発見した、アメリカの先鋭的な気象学者。ハリケーンの被害パターンを観察し、嵐が中心軸の周りを回転するという説を提唱。この理論は現代の気象学の基礎を築いた。

This letter was written by Matthew C. Perry to John, the son of the meteorologist William C. Redfield, who was a close associate of Perry. Following his return from the Japan expedition, Perry supervised the publication of *Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan* (1856), prepared by Francis Hawks, and invited Redfield to contribute a scholarly essay based on naval logbooks and meteorological observations. Although Redfield submitted "Observations on the Typhoons of the Western Pacific" in 1856, he died unexpectedly the following year. Perry subsequently incorporated the essay into Volume II and composed its preface himself. Within the preface, he referred to Redfield's friendship with Rear Admiral Samuel Chester Reid. In order to ensure the accuracy of these remarks, Perry transmitted a draft to John on March 28, 1857, requesting its careful examination and correction. The letter's measured tone reflects both a scrupulous sense of responsibility and a profound respect for his late colleague. The handwriting, which is characterized by fine, slightly faded strokes and subtle variations in ink density, exhibits consistent spacing and composure, suggesting disciplined restraint and quiet refinement.

*William C. Redfield (1789-1857): A pioneering American meteorologist who discovered the "law of the rotational motion and progression of storms" in 1821. His theory of rotating hurricanes laid the foundation for modern meteorology.

HAWTHORNE, Nathaniel

ホーソン
アメリカ領事在任中の公的書簡
1857.



ホーソンがボストン在住のエドワード・B・ホートンという人物に宛てたものです。この時期のホーソンは、『緋文字』(1850)で文学的名声を確立した後、友人であるフランクリン・ピアース大統領の任命により、一時期(1853-1858)イギリスのリヴァプールにてアメリカ領事を務めていました。リヴァプールは当時、米英間の貿易の要所であり、領事の仕事は非常に多忙でした。ホーソン自身はこのような官僚的業務を好まず、創作活動から遠ざかっていることに不満を抱いていたとも伝えられています。

文面は簡潔で、先方の７月９日付書簡に対して「ご依頼に喜んでお応えします」と丁寧に述べ、署名には当時よく使っていた略式の「Nathl. Hawthorne」を用いています。文体は公文書的であり、文学的な表現は抑えられています。

在任中は、ホーソンにとっては文学活動よりも公的職務が優先された期間でしたが、日常的な公務経験は後の作品『アワー・オールド・ホーム』(1863)にも反映されています。ホーソンの公的かつ礼儀正しい文体、筆圧の安定した筆遣いを通して、作家としての顔とは別の、領事としての一面を垣間見ることができます。

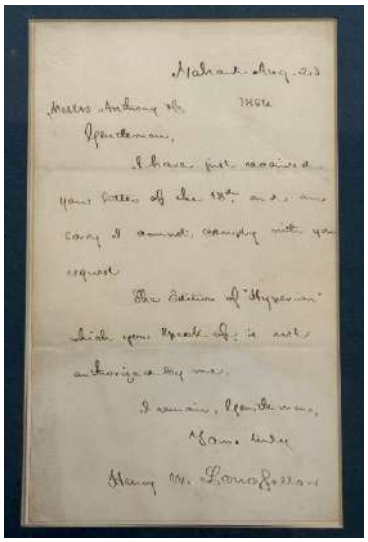
This letter was written by Nathaniel Hawthorne to Edward B. Houghton of Boston. By this period, Hawthorne had firmly established his literary reputation with *The Scarlet Letter* (1850). Appointed by his friend President Franklin Pierce, he served as United States Consul in Liverpool from 1853 to 1858. Liverpool was at that time a principal center of Anglo-American trade; the duties of the consulship were consequently exacting and extensive. Under such circumstances, Hawthorne is known to have found such bureaucratic obligations uncongenial and to have felt keenly the interruption of his literary work.

The letter itself is notably concise. In reply to an earlier letter, he writes: “I am happy to comply with the request contained in your letter of July 9th,” and signs in the abbreviated form “Nathl. Hawthorne,” which he frequently employed during this period. The tone is formal and official, and his characteristic literary expressiveness is deliberately restrained.

Although these years of service required him to subordinate literary activity to public duty, the experience later found expression in *Our Old Home* (1863). Through the document’s dignified and measured language, as well as the steady pressure and controlled execution of the hand, one perceives not only the imaginative author but also the conscientious and disciplined consul.

LONGFELLOW, Henry Wadsworth

ロングフェロー
出版社へ宛てた謝絶の書簡
1864.



ロングフェローが、ニューヨークの出版社・アンソニー商会に宛てた自筆書簡です。当時のロングフェローは既に『エヴァンジェリン』(1847)や『ハイアワサの歌』(1855)などで名声を確立し、国民的詩人として確固たる地位にあった一方、私生活では 1861 年に最愛の妻フランシスを失い、深い悲しみを抱え続けていた時期でもありました。

手紙の中で、ロングフェローは同社から依頼を受けた『ハイペリオン』(1839)の出版計画について「自分が許可した版ではない」と述べ、要望に応じられないことを丁重に伝えています。『ハイペリオン』はロングフェローのヨーロッパ体験をもとにした散文作品。当時広く読まれていたため、原作者であるロングフェローの関与なしに再版や特装版が作られることも少なくありませんでした。さらに、19 世紀半ばのアメリカでは著作権の制度が十分に整っておらず、作家が自作の出版を完全に管理することは困難であったといわれています。安定した筆跡からは、大学教授として活躍していた理知的な一面が感じられます。本書簡は、ロングフェローが作家として自著の正統性を守ろうとする姿勢と、当時のアメリカにおける出版事情を伝える資料です。

This letter was written by Wadsworth Longfellow to the New York publishing firm Anthony & Co. By this stage in his career, Longfellow had already firmly established his reputation through works such as *Evangeline* (1847) and *The Song of Hiawatha* (1855), securing an unassailable position as a national poet. Meanwhile, in his private life, he was enduring profound sorrow, having lost his beloved wife Frances in 1861.

In the letter, Longfellow addresses a proposed publication of *Hyperion* (1839), which the firm had sought to undertake. He states that the edition was “not authorized by me,” thereby declining the request. *Hyperion*, the prose work derived from his European travels, had enjoyed wide readership, and editions or special issues were not infrequently issued without his direct involvement. Since copyright protections were not yet fully established in mid-nineteenth-century America, authors often found it difficult to exercise complete control over the publication of their works. The steady character of his handwriting conveys an impression of intellectual discipline, befitting a scholar who had distinguished himself as a university professor. This letter thus offers insight into both Longfellow’s efforts to protect the integrity of his works and the broader realities of nineteenth-century American publishing.

WHITMAN, Walt

ホイットマン
晩年の詩「夕食と歓談の後」原稿
[1887?].



ホイットマンが晩年に書いた詩「夕食と歓談の後」の自筆原稿です。当時のホイットマンはニュージャージー州の家でほぼ隠居の生活を送っていました。老衰により外出は難しく、詩作や訪問者との会話が数少ない社会とのつながりであったといわれています。

「夕食と歓談の後」は、『草の葉』最終版(1891-92)・「七十歳の砂」の章に収められた、事実上、詩人としての生涯の集大成に位置づけられる作品です。夕食と語らいが終わり、客人が名残を惜しみながら帰っていく瞬間の、友人たちとの握手、繰り返される去り際の挨拶、離れがたい気持ちで別れを引き延ばそうとする仕草が、切実に描かれています。また、この詩は一時的な別れだけでなく、晩年のホイットマンの「人生からの別れ」を象徴しているともいわれています。かつて「人民の詩人」として活躍するも、公的な舞台を退き、友人や読者との別れを惜しみながら日々を過ごしていたホイットマンの姿を伝える原稿です。

本作は 1885 年に出版社に送られましたが、1887 年に別の雑誌で発表されました。原稿上部の表題下に「詩集の巻末に付け加える数篇の最初に置く」とメモがあることから、執筆当初は雑誌に発表する意図はなかったとみられます。

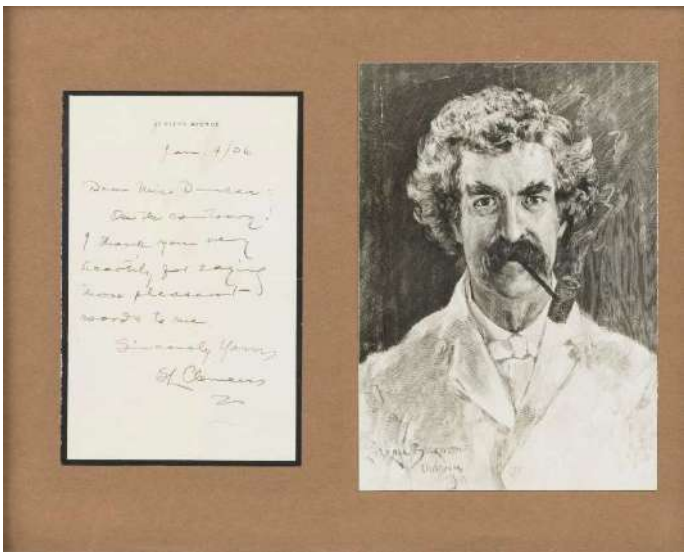
This autograph manuscript of *After the Supper and Talk* was composed by Walt Whitman in the closing years of his life. During this period, Whitman lived in relative seclusion at his home in New Jersey. Physical frailty made travel difficult, and the composition of poetry, together with conversations with visitors, constituted one of his few remaining ties to society.

Included in the deathbed edition of *Leaves of Grass* (1892), in the cluster entitled “Sands at Seventy,” the poem stands as a culminating expression of the poet’s life and art. It portrays the moment when supper and conversation have ended and guests depart with lingering reluctance: handshakes among friends, repeated words of farewell, and gestures that seek to prolong the inevitable parting, all rendered with poignant immediacy. At a deeper level, the poem has been understood to signify not only a temporary leave-taking but Whitman’s own valediction to life. Once celebrated as the “poet of the people,” he had largely withdrawn from the public life, devoting his days to the company of friends and readers even as he sensed their gradual parting. The present manuscript thus conveys an intimate image of Whitman in his final years.

Although the poem was sent to a publisher in 1885, it ultimately appeared in another periodical in 1887. A note beneath the title, “preceding some added poems at end of a volume,” suggests that Whitman did not initially intend it for magazine publication.

TWAIN, Mark

トウェイン
友人・ダンカンに宛てた礼状
1906.



晩年のトウェインが書いた礼状です。宛先の「ミス・ダンカン」は、当時革新的な舞踊芸術で注目を集めていたイザドラ・ダンカンと考えられます。トウェインは 1904 年に最愛の妻を亡くし、私生活では深い喪失感を抱えていました。一方で世界的作家としての名声は衰えず、講演や社交を通じて多くの芸術家や文化人と交流していました。

手紙には、相手から贈られた賛辞に対して「とんでもありません！嬉しいお言葉に心から感謝します」と簡潔ながら温かく応じる言葉が記されています。上部にはトウェインが晩年まで社交サロン的生活を送っていたニューヨーク 5 番街 21 番地の住所が記載され、署名にはペンネームではなく、本名の S.L.クレメンズを使用。その流れるような筆致と伸びやかな曲線からは、自然体の温かさが感じられます。わずか数行ながら、老境にあっても他者の言葉に誠実に応答するトウェインの人柄と、当時の文化的交友関係を伝える貴重な資料です。

※イサドラ・ダンカン（1877-1927）:「モダン・ダンスの母」と称される舞踊家。欧米の芸術界で注目を集め、ニューヨークでは作家や知識人とも交流を持った。晩年のトウェインは、若い世代の新しい芸術や自由な精神に関心を寄せており、ダンカンの革新的姿勢に共感を示したと考えられる。

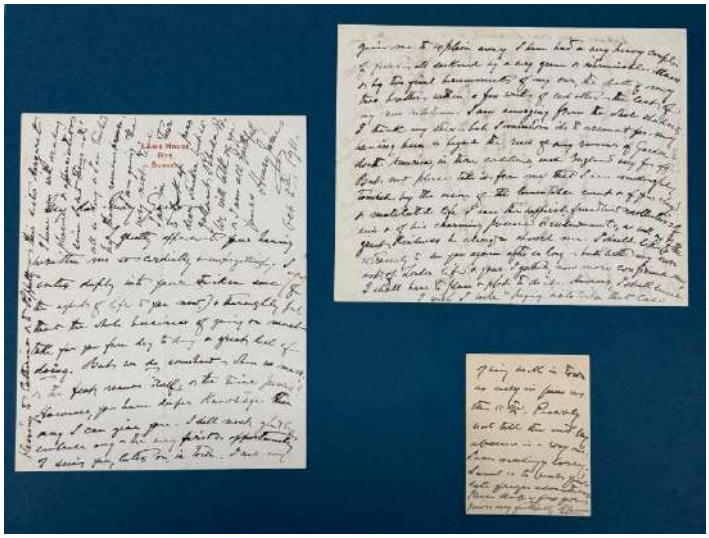
This autograph letter of thanks was written by Mark Twain in the later years of his life. The addressee, “Miss Duncan,” is believed to be Isadora Duncan, who was then attracting wide attention for her innovative approach to dance as an art form. At the time, Twain was living with a profound sense of loss in his private life, having lost his beloved wife in 1904. On the other hand, his international reputation as an author remained undiminished, and he continued to engage with numerous artists and cultural figures through his lectures and social circles.

In the letter, he responds to the praise he had received with the concise yet gracious words: “On the contrary! I thank you very heartily for saying those pleasant words to me.” At the top appears the address 21 Fifth Avenue, New York, where Twain maintained an active social life in his later years, and the signature employs his real name, S. L. Clemens. The flowing hand and expansive curves of the script convey a sense of unaffected warmth. Though consisting of only a few lines, this document reveals Twain’s graciousness in acknowledging the words of others, even in his twilight years, and offers insight into the cultural networks that surrounded him at the time.

*Isadora Duncan (1877-1927): A pioneering dancer widely regarded as the “mother of modern dance.” She gained prominence in transatlantic artistic circles and maintained connections with writers and intellectuals in New York. In his later years, Twain expressed interest in the new artistic movements and spirit of youth, and he is believed to have been sympathetic to Duncan’s innovative ideals.

JAMES, Henry

ジェイムズ
知人・ゴードンに宛てた晩年の書簡
1910-1911.



ヘンリー・ジェイムズが親しい知人、メイ・ゴードンに宛てて書いた私的な書簡３通です。うち２通は 1910-1911 年のもので、当時 60 代後半のジェイムズは創作の最盛期を過ぎてもなお、交友や知的交流を大切にしていました。

２通の書簡には、夫を亡くしたゴードンへの深い哀悼と共感が綴られています。「日々を生き続けること自体が、あなたにとって大きな努力を要するに違いない」、「しかし、そうせざるを得ない時には、人は何とかしてやってのけるものだ」という言葉には、喪失を知る者ならではの励ましと、生への強靭な意志が表れています。ジェイムズ自身も 1910 年に二人の兄弟を相次いで失っており、「私もここ数年は耐えがたい時期を過ごしていた」と打ち明けています。

もう１通の、ジェイムズが療養していたボーンマスから送られたカードは軽やかな日常連絡で、「あなたの最近の海外での冒険譚を、ぜひともお聞きしたい」と記されています。ゴードンの夫が健在で、喪失の悲しみが訪れる前の穏やかな時期の交流を伝えていると考えられます。

紙面を埋め尽くすように書き込まれた文字と、やや揺らぎのある筆致は、思考・感情が筆を追い越すほどであったことを物語っています。3 通を通して、作家・ジェイムズとしての内省的な人生観と、一個人としての温かく人間らしい感情とが滲む、貴重な晩年の資料です。

These private letters were written by Henry James to his close acquaintance May Gordon. Two of the letters are dated 1910 and 1911, when James was in his late sixties. Although he had passed the zenith of his creative powers, he continued to value personal friendships and intellectual exchange.

In these two letters, James expresses profound sympathy and condolence for Gordon upon the death of her husband. His words, “the whole business of going on must take for you from day to day a great deal of doing,” and “we do somehow – when we must,” reveal both the encouragement of one acquainted with grief and a resilient determination toward life. Having himself lost two brothers in close succession in 1910, he confides, “I have had a very heavy couple of years.”

In these two letters, James expresses profound sympathy and condolence for Gordon upon the death of her husband. The third item, a card sent from Bournemouth while James was convalescing, conveys a lighter and more casual tone. In it he writes, “I want so to hear your late foreign adventures.” This suggests an earlier and more tranquil period of exchange, dating from a time when Gordon’s husband was still living and before the shadow of bereavement had fallen upon their correspondence.

The closely written lines that fill the page, together with the slightly wavering hand, suggest thoughts and emotions pressing forward faster than the pen could fully command. Taken together, these three letters form a valuable record of James’s later years, revealing both the introspective vision of the author and the warmth and humanity of the man himself.

■本と旧館建築金物

『Cassell's popular science』[1]はカッセル社が刊行した、大衆向きに解説された科学書です。縦 27 ㎝、576 頁という大部な 1 冊で、当時最先端の科学への興味を喚起するようにカラー図版を交えながら、3 色刷り技術の確かさも見せています。カメラやレントゲンをはじめ幅広い分野が解説されており、産業革命以降、大きく発展した欧米の技術や日常生活が窺い知れます。

本書を当館では 1905(明治 38)年、洋書を商う大黒屋から購入しました。見返しに貼付された書店のシールと標題紙に手書きで記された日付は、かつての受入れ業務が想起される足跡であり、選書と利用者をも想像させます。

産業革命は、鍵の技術も発展させました。

1909(明治 42)年に新築された当館の貴賓室には、アメリカの Yale 社から輸入したドアノブやシリンダーなどの建築金物が採用されました。展示品であるこの錠前には、「Y&T」の刻印があることから、1868 年にアメリカで設立された Yale & Towne(エール&タウン)社の製品であり、今の Yale ブランドに続くものであることが判明しました。

明治期の建築では、まだその分野は国内生産が出来ず、輸入に頼っていた背景がありますが、舶来物による威光が貴賓室に求められた時代背景も窺えます。

明治大正期の府立図書館を訪れた人々は、この「MADE IN U.S.A.」の鍵や書物を通し、遥か遠く離れた外国の文化に触れていたことになります。

■Books and Architectural Fittings from the Former Library Building

Cassell's Popular Science1 is a popular science work published by Cassell & Co. Measuring 27 centimeters in height and comprising 576 pages, it forms a substantial volume. It was intended to stimulate interest in the most advanced scientific developments of its day and incorporates color plates, showcasing the precision of contemporary three-color printing technology. Covering a wide range of subjects, including photography and X-ray technology, the book offers a window onto the technological progress and everyday life of Europe and the United States in the decades following the Industrial Revolution.

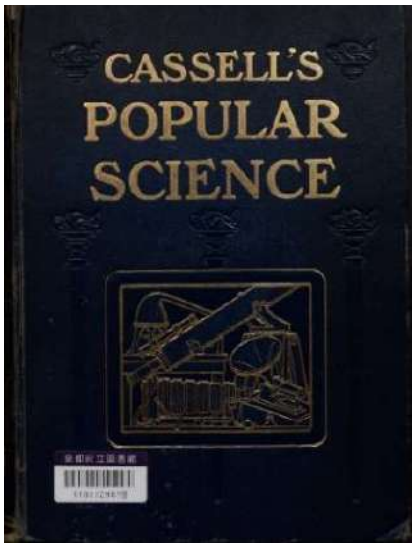
The Kyoto Prefectural Library acquired this volume in 1905 (Meiji 38) from Daikokuya, a bookseller specializing in Western publications. The bookseller's label affixed to the endpaper and the handwritten date on the title page remain as tangible traces of the library's early acquisition practices, inviting us to imagine the process of selection and the readers who once consulted the book.

The Industrial Revolution also fostered significant advances in lock technology.

When the present library building was newly constructed in 1909 (Meiji 42), architectural hardware, including doorknobs and cylinders, was imported from the American firm Yale & Towne. The lock on display bears the "Y & T" stamp, identifying it as a product of the company founded in 1868 and a predecessor of the present-day Yale brand.

During the Meiji period, such architectural hardware could not yet be manufactured domestically in Japan and was therefore dependent on imports. The reception room also reflects a historical context in which the prestige of imported goods was highly valued.

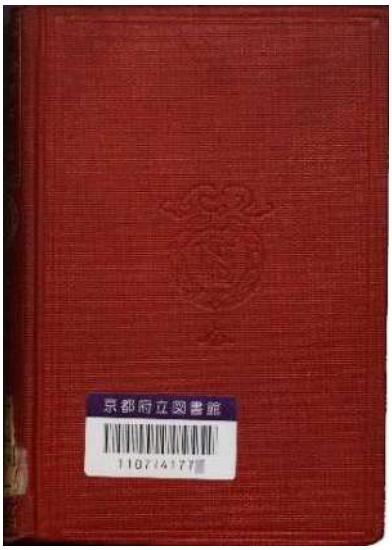
Visitors to the Kyoto Prefectural Library in the Meiji and Taishō periods would thus have encountered distant foreign cultures through both the books and the lock marked "MADE IN U.S.A."



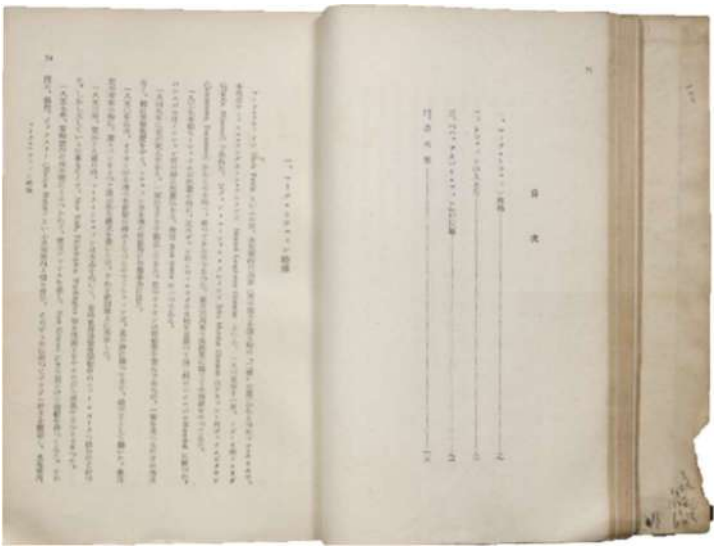
1.



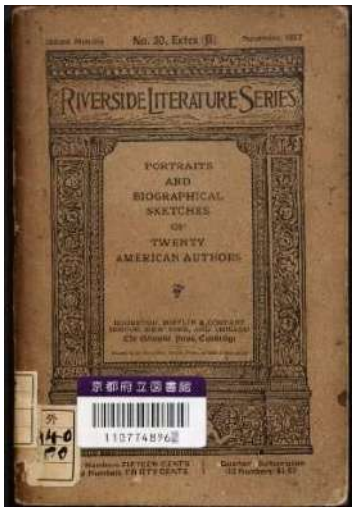
「Y&T 社製　ドアノブ」



2.



3.



4.

1. *Cassell's popular science*.
2. *The adventures of Huckleberry Finn. (Tom Sawyer's comrade)*
3. 『英語英文学講座』 9 巻
   マーク・トウェイン『ハックルベリ・フィン』
4. *Portraits and biographical sketches of twenty American authors.*

■洋書と和書

当館では、1900(明治33)年頃刊行の『*The adventures of Huckleberry Finn (Tom Sawyer's comrade)*』[2]を1912(大正元)年に受け入れており、翻訳された「ハックルベリ・フィン」(マーク・トウェイン)等を所載した『英語英文学講座』[3]シリーズ(英語英文学刊行会、1933-1934)も所蔵していることから、原書と解説書を読んだ利用者層が感じられます。

作家20人について、肖像画(銅版画)付きで紹介する『*Portraits and biographical sketches of twenty American authors*』[4]からは、19世紀後半に人気を博していたアメリカ文学界の様子を垣間見ることができます。

太平洋戦争が始まる前年の1940(昭和15)年、『現代アメリカ小説全集』第1巻[5]、ヘミングウェイ「持てるもの持たざるもの」をはじめ、シリーズで受け入れました。

同年刊行のパール・バックの小説『大地』[6]はベストセラーです。同じくパール・バック『母の生活』[7]の序文において、訳者の村岡花子は「支那を知り、アメリカを知ること」の大切さを述べています。

当館発行『京都府中央図書館報』58号[8]には、パール・バックに触発され、「善書の熟読に時間を割け」と題した読書慫慂の随筆があります。2年後の1942(昭和17)年以降、「敵性言語」を排斥する空気が蔓延するまでは、英米、中国を理解しようとする土壌があったことが、これらの文献から窺えます。

敗戦後、英会話やアメリカ文化への憧憬が増大し、アメリカ映画の輸入も活性化します。
戦前は、マーガレット・ミッチェル『風と共に去りぬ』の翻訳書は国内で刊行されたものの、映画上映ができなかったこともあり、1952(昭和27)年9月、日本で初めて上映された際は、通常の5倍の入場料にもかかわらず、大ヒットを放ちました。

同年刊行の雑誌『映画情報』[9]には『風と共に去りぬ』、『毎日グラフ』[10]にはヘミングウェイの『誰がために鐘は鳴る』など、グラフ雑誌らしい数々の写真が掲載され、アメリカ文化への熱い眼差しを見てとれます。

■Western and Japanese Books

In 1912 (Taishō 1), the library acquired an edition of *The Adventures of Huckleberry Finn (Tom Sawyer's Comrade)*[2] by Mark Twain, originally published around 1900. The library also holds the series *Eigo Eibungaku Kōza (The English and American Literature Lecture Series)*[3], published by Eigo Eibungaku Kankōkai (1933-1934), which includes Japanese translations such as Huckleberry Finn. These holdings suggest the presence of readers who engaged with both the original English texts and its Japanese translations and commentaries.

Portraits and Biographical Sketches of Twenty American Authors[4], which features twenty writers accompanied by engraved portraits, offers a glimpse into the American literary scene during its flourishing in the latter half of the nineteenth century.

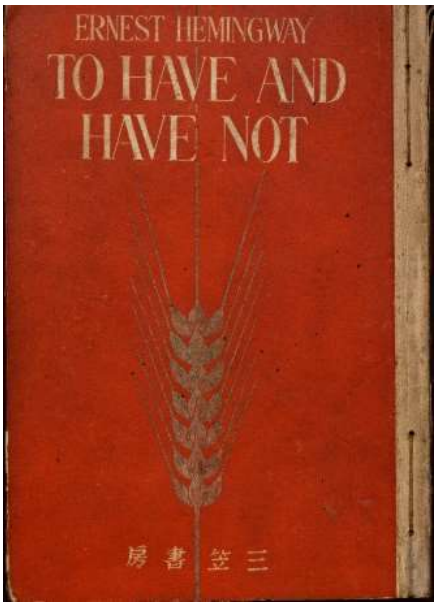
In 1940 (Shōwa 15), the year before the outbreak of the Pacific War, the library acquired the first volume of the series *Gendai Amerika Shōsetsu Zenshū (The Complete Collection of Contemporary American Fiction)*[5], which included *To Have and Have Not* by Ernest Hemingway.

The Good Earth[6] by Pearl S. Buck became a bestseller in Japan, while in the preface to her translation of Buck's *The Mother*[7], Hanako Muraoka emphasized the importance of understanding both China and the United States.

Issue No. 58 of *The Kyoto Prefectural Central Library Bulletin*[8], contains an essay entitled "Devote Time to the Careful Reading of Worthy Books," inspired by Pearl S. Buck and encouraging thoughtful reading. These documents suggest the presence of an intellectual climate that sought to understand Britain, America, and China, at least until 1942 (Shōwa 17), when a movement to exclude so-called "enemy languages" became widespread.

After the Second World War, interest in English conversation and admiration for American culture surged, accompanied by a marked increase in the import of American films. Although a Japanese translation of *Gone with the Wind* by Margaret Mitchell had been published before the war, the film itself could not be screened in Japan at that time. When it finally premiered in September 1952 (Shōwa 27), it became a major hit despite admission prices set at five times the usual rate.

Magazines published in the same year, such as *Eiga Jōhō*[9], featured *Gone with the Wind*, while *Mainichi Graph*[10] carried photographs relating to *For Whom the Bell Tolls* by Hemingway. The rich photographic coverage in these pictorial magazines conveys the fervent public enthusiasm for American culture during this period.



5. 『現代アメリカ小説全集』第１巻「持てるもの持たざるもの 」



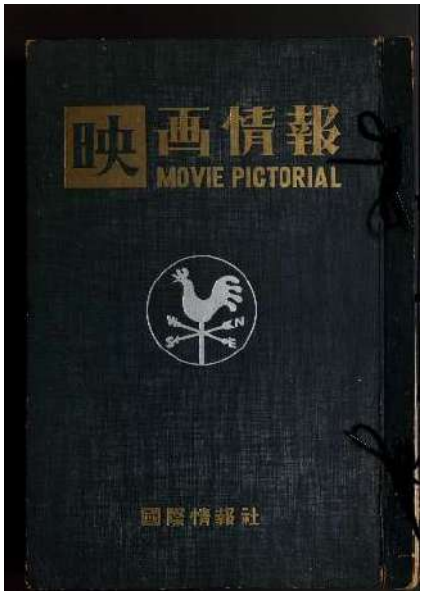
6. 『大地』 第１部



7. 『母の生活』



8. 『京都府中央図書館報』58 号



9. 『映画情報』 17-18 巻



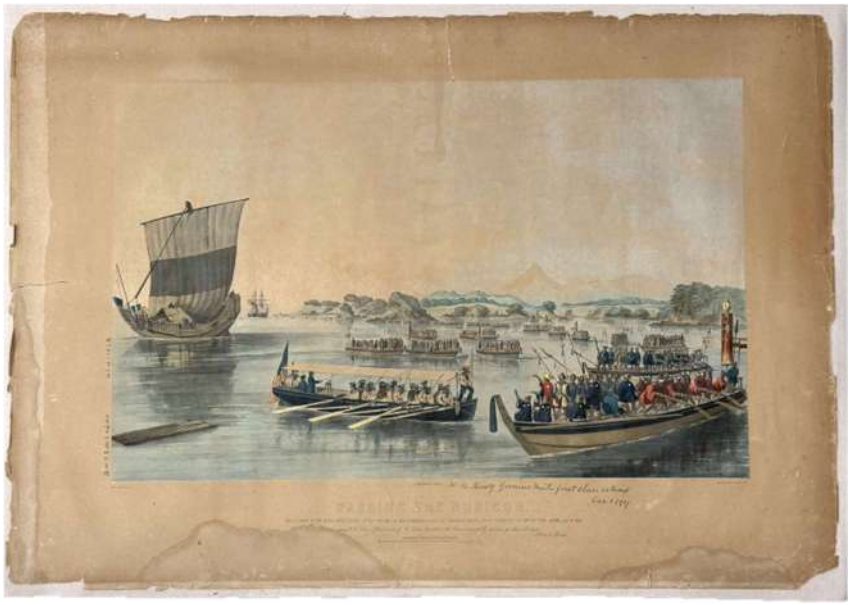
10. 『毎日グラフ』

HEINE, Wilhelm

Passing the Rubicon.

1855. approx. 67×94cm.

ハイネ≪ルビコン川を渡る≫石版画



※京都府立図書館会場でのみ展示

1853(嘉永 6)年のペリー来航時、画家ハイネと写真家ブラウン・ジュニアも随行して日本遠征の記録を残しました。ブラウン監修のもとでハイネが描いた水彩画は、大型石版画 6 枚の『日本遠征画集』として刊行され、ペリーに献上されたと言われます。そのうち 1 枚の《ルビコン川を渡る》は、古代ローマの故事にちなみ、ペリー艦隊が江戸湾を突破しようとする、まさに一線を超える局面を示唆しています。

府立図書館が所蔵するこの石版画には、田辺朔朗(1861-1944)の寄贈署名があります。琵琶湖疏水設計者の田辺は、アメリカで購入したこの石版画を当館に寄贈し、当館は貴賓室に飾りました。

その石版画にはもう 1 点、手書きによる英語の一文があります。調査の結果、ペリー来航から 64 年後の 1917 年、かつてペリー艦隊サラトガ号の掌砲長であったウィリアム・ハミルトン・ハーディが 82 歳で来日し、当館で石版画を見て感激のあまり書き込んだことが判明しました。

ハイネ、ブラウン、ペリー、ハーディ。アメリカとの関わりに満ちた稀有な石版画です。

At the time of Matthew C. Perry's arrival in Japan in 1853 (Kaei 6), the painter Wilhelm Heine and the photographer Eliphalet Brown Jr. accompanied the expedition and recorded its progress. Under Brown's supervision, Heine executed a series of watercolor drawings that were later issued as a set of six large-scale lithographs entitled Graphic Scenes of the Japan Expedition, which are said to have been formally presented to Perry. Among them, Passing the Rubicon, alluding to the famous episode from ancient Rome, suggests the decisive moment when Perry's squadron attempted to enter Edo Bay, symbolizing the crossing of a line from which there could be no return.

The lithograph preserved by the Kyoto Prefectural Library collection bears a dedicatory inscription by Sakuro Tanabe (1861-1944), the engineer known for designing the Lake Biwa Canal. Tanabe purchased the work in the United States and later donated it to the library, where it was displayed in the reception room.

The lithograph also features an additional handwritten sentence in English. Subsequent research has revealed that the sentence was added by William Hamilton Hardy, who had served as Chief Gunner aboard the USS Saratoga in Perry's squadron. In 1917, sixty-four years after Perry's arrival, the 82-year-old Hardy visited Japan. Upon seeing the lithograph at the library, he was so deeply moved that he added the inscription in his own hand.

Heine, Brown, Perry, and Hardy—this singular lithograph is linked to each of these figures, standing as a rare object that embodies profound ties with the United States.

主な参考文献・データベース

○阿部公彦（2021）『英文学教授が教えたがる名作の英語』文藝春秋.
○アメリカ文学の古典を読む会編, 坂本季詩雄 他（2007）『語り明かすアメリカ古典文学 12：アメリカ文学の古典を読む会編』南雲堂.
○市村尚久（1994）『エマソンとその時代』玉川大学出版部.
○杉野健太郎 責任編集；諏訪部浩一, 山口和彦, 他（2019）『アメリカ文学と映画 ＝American literature and film』三修社.
○諏訪部浩一 責任編集；稲垣伸一, 杉野健太郎, 他（2013）『アメリカ文学入門』三修社.
○野間正二（2023）『戦争 PTSD とアメリカ文学：南北戦争からベトナム戦争までを読む』文理閣.
○バーダマン・ジェームス・M（2024）『教養あるアメリカ人が必ず読んでいる英米文 42 選：アメリカ人の考え方は本から分かる』アルク.
○ハイネ・ヴィルヘルム 著 中井晶夫 訳（1983）『ハイネ世界周航日本への旅』 雄松堂出版.
○Riggs, Thomas 編（2000）『Reference Guide to American Literature 4th ed.』St. James Press.

○『Japan Knowledge』（https://japanknowledge.com/）
○『Britannica ONLINE JAPAN』（https://japan.eb.com/）

京都府立図書館会場
と　き：2026 年 4 月 7 日(火)～4 月 19 日(日)
ところ：京都府立図書館 2 階ナレッジベース

京都外国語大学会場
と　き：2026 年 6 月 5 日(金)～6 月 14 日(日)
ところ：京都外国語大学　4 号館 6 階

京都府立図書館・京都外国語大学付属図書館共催 講演会

「アメリカの『独立宣言』からみる社会、文化、文学」

講師：坂本 季詩雄 氏(京都外国語大学外国語学部 英米語学科 教授)
日程：2026 年 4 月 11 日(土) 13:30～15:00
会場：京都府立図書館 3 階 マルチメディア室

事前申込

京都府立図書館・京都外国語大学付属図書館共催

稀覯書展示会

自由への羅針盤－アメリカ 250 年を刻む書物たち：CHRONICLES OF LIBERTY

発　行　日：2026 年 4 月 7 日
編集・発行：京都外国語大学付属図書館
京都外国語短期大学付属図書館